

兵庫県伊丹市

# 口酒井遺跡発掘調査報告書

第22次・25次調査

1995.3

伊丹市教育委員会

兵庫県伊丹市

# 口酒井遺跡発掘調査報告書

第22次・25次調査

1995.3

伊丹市教育委員会





第25次調査 全景



第25次調査 壺棺 1



第22次調査 検出土坑（縄文時代晩期）



第22次調査 全景

## 例 言

- (1)本書は、兵庫県伊丹市口酒井字穴森1-1ほかに所在する口酒井遺跡発掘調査の報告書である。
- (2)今回の調査は、口酒井遺跡公園（仮称）の建設に伴って実施した事前調査である。昭和63年10月24日～12月27日まで確認調査を行い、その結果を受けて翌年1月6日～2月3日まで本調査を行った。調査次数は、確認調査が第22次調査、本調査が第25次調査である。
- (3)発掘調査事業および遺物整理事業は、市の単独事業として実施した。
- (4)遺物整理事業は、平成4～5年度にかけて、市立稲野小学校内埋蔵文化財整理室において実施した。
- (5)本書の執筆・編集は小長谷正治が担当した。但し、遺物の観察表については細川佳子・岡野理奈が担当した。
- (6)遺物整理作業は、遺物実測を岡野理奈・三輪隆子・沖高広子・伊藤秀樹が行い、遺構遺物のトレースは岡野理奈・沖高広子・三輪隆子が担当した。また、遺物の写真撮影は、小長谷正治・細川佳子が担当した。
- (7)発掘調査は、伊丹市教育委員会小長谷正治・中井秀樹（現三田市教育委員会）が担当し、次の各氏の協力を得た。
  - 田中 賢人（現三田市教育委員会）
  - 細川 佳子（現伊丹市教育委員会非常勤嘱託）
  - 小笠原典子（旧姓萩野、現大手前女子大学文化財調査室）
  - 伊藤 秀樹
  - 松田 研
  - 岡本 英一
- (8)発掘調査に際しては、全般にわたって大阪経済法科大学村川行弘教授の指導を賜った。
- (9)発掘調査の出土遺物ほか図面等の資料については、伊丹市教育委員会で保管している。



# 目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 遺跡の概要	3
第1節 口酒井遺跡の位置と立地	3
第2節 口酒井遺跡の調査	4
第3章 縄文時代晩期の調査（第22次調査）	5
第1節 調査の方法	5
第2節 調査の概要	7
第3節 基本土層	10
第4節 検出遺構	12
土 坑	12
足 跡	13
第5節 出土遺物	14
上層出土の遺物	14
縄文土器の検出状況	14
凸帯文土器の分類	16
石 器	17
第4章 弥生時代以降の調査（第25次調査）	37
第1節 調査の方法	37
第2節 調査の概要	37
第3節 基本土層	42
第4節 検出遺構と遺物	45
上層部の調査	45
下層部の調査	54
遺構外出土の遺物	62
第5章 結 語	71

## 挿 図 目 次

Fig. 1 口酒井遺跡位置図…………… 3	Fig. 29 SK04出土遺物 ……………46
Fig. 2 トレンチ設定図…………… 6	Fig. 30 SK05実測図 ……………46
Fig. 3 全体図(上層遺構)…………… 8	Fig. 31 SK06実測図 ……………47
Fig. 4 全体図(下層遺構)…………… 9	Fig. 32 SK06出土遺物 ……………48
Fig. 5 土層図……………11	Fig. 33 SK08実測図 ……………48
Fig. 6 土坑実測図(SK04~SK08) ……12	Fig. 34 SK09実測図 ……………49
Fig. 7 足跡実測図……………13	Fig. 35 SK09出土遺物 ……………49
Fig. 8 遺物出土状況実測図……………15	Fig. 36 壺棺 1 実測図……………50
Fig. 9 東西トレンチ(北)出土遺物(1)…17	Fig. 37 壺棺 1 出土遺物……………51
Fig. 10                   "          (2)…18	Fig. 38 壺棺 2 実測図……………52
Fig. 11                   "          (3)…19	Fig. 39 壺棺 2 出土遺物……………52
Fig. 12                   "          (4)…20	Fig. 40 壺棺 3 実測図……………53
Fig. 13 SK01出土遺物(1)……………21	Fig. 41 壺棺 3 出土遺物……………54
Fig. 14                   "          (2)……………22	Fig. 42 円形周溝墓 1 実測図……………55
Fig. 15 東西トレンチ(南)出土遺物(1)…22	Fig. 43 円形周溝墓 1 出土遺物……………56
Fig. 16                   "          (2)……………23	(方形周溝墓 2)
Fig. 17 東西トレンチ(南)東群出土遺物 ……24	Fig. 44 円形周溝墓 2 実測図……………57
Fig. 18 東西トレンチ(南)西群出土遺物(1) …25	Fig. 45 円形周溝墓 3 実測図……………57
Fig. 19                   "          (2) …26	Fig. 46 円形周溝墓 4 実測図……………58
Fig. 20 出土地点不明遺物……………27	Fig. 47 円形周溝墓 4 出土遺物……………58
Fig. 21 石器……………27	Fig. 48 方形周溝墓 1 実測図……………59
Fig. 22 調査区設定図……………38	Fig. 49 方形周溝墓 2 実測図……………59
Fig. 23 全体図(上層遺構)……………40	Fig. 50 方形周溝墓 2 出土遺物……………60
Fig. 24 全体図(下層遺構)……………41	Fig. 51 SK19実測図 ……………61
Fig. 25 土層図……………43	Fig. 52 SK19出土遺物 ……………61
Fig. 26 SK03実測図 ……………45	Fig. 53 SD02出土遺物 ……………62
Fig. 27 SK03出土遺物 ……………45	Fig. 55 P4出土遺物 ……………62
Fig. 28 SK04実測図 ……………46	Fig. 55 遺構外出土遺物……………63

## 図 版 目 次

P1.1 a	南北トレンチ	P1.19a	東西トレンチ(南)出土遺物(3)
P1. b	南北トレンチ	P1. b	東群出土遺物
P1.2 a	東西トレンチ(北)	P1.20a	西群出土遺物(1)
P1. b	東西トレンチ(北)縄文土器出土状況	P1. b	西群出土遺物(2)
P1.3 a	縄文土器出土状況	P1.21a	西群出土遺物(3)
P1. b	縄文土器出土状況	P1. b	出土の石器
P1.4 a	縄文土器検出状況	P1.22a	第25次調査上層 全景
P1. b	浅鉢出土状況	P1. b	土坑検出状況
P1. c	浅鉢出土状況	P1.23a	SK03
P1.5 a	足跡検出状況	P1. b	SK06半掘状況
P1. b	足跡検出状況	P1. c	SK06遺物出土状況
P1. c	足跡検出状況	P1.24a	壺棺 3
P1.6 a	東西トレンチ(北)落ち込み状遺構	P1. b	SK08, SK09
P1. b	落ち込み状遺構	P1. c	SK08
P1.7 a	東西トレンチ(南)足跡検出状況	P1.25a	SK09
P1. b	第11層掘り下げ状況	P1. b	壺棺 1
P1.8 a	流路検出状況	P1. c	壺棺 1
P1. b	流路検出状況	P1.26a	壺棺 2
P1.9 a	縄文土器出土状況	P1. b	P 1
P1. b	縄文土器出土状況	P1. c	SK19
P1. c	縄文土器出土状況	P1.27a	第25次調査下層 全景
P1.10a	縄文土器出土状況	P1. b	第25次調査下層 全景
P1. b	縄文土器出土状況	P1.28a	円形周溝墓 1
P1. c	石斧出土状況		方形周溝墓 2
P1.11a	SK04~SK08	P1. b	円形周溝墓 1
P1. b	SK04~SK08	P1.29a	円形周溝墓 1
P1.12a	SK04縄文土器出土状況	P1. b	円形周溝墓 1 遺物出土状況
P1. b	SK04炭化物出土状況	P1. c	円形周溝墓 1 遺物出土状況
P1. c	SK06炭化物出土状況	P1.30a	円形周溝墓 1 遺物出土状況
P1.13a	SK07炭化物出土状況	P1. b	円形周溝墓 1 遺物出土状況
P1. b	SK08炭化物出土状況	P1. c	円形周溝墓 1 遺物出土状況
P1. c	SK08炭化物	P1.31a	円形周溝墓 2
P1.14a	東西トレンチ(北)出土遺物(1)	P1. b	円形周溝墓 3・4
P1. b	出土遺物(2)	P1.32a	円形周溝墓 3
P1.15a	出土遺物(3)	P1. b	円形周溝墓 4
P1. b	出土遺物(4)	P1.33a	方形周溝墓 1
P1.16a	出土遺物(5)表面	P1. b	方形周溝墓 1
P1. b	裏面	P1.34	第25次調査出土遺物(1)
P1.17a	東西トレンチ(北)SK01出土遺物(1)	P1.35	" (2)
P1. b	SK01出土遺物(2)	P1.36	" (3)
P1.18a	東西トレンチ(南)出土遺物(1)	P1.37	" (4)
P1. b	" (2)	P1.38	" (5)

## 目 次

<p>Tab. 1 東西トレンチ(北)層毎出土遺物(1)…28</p> <p>Tab. 2                   "                  (2)…29</p> <p>Tab. 3                   "                  (3)…30</p> <p>Tab. 4 東西トレンチ(北)SK01出土遺物(1)…30</p> <p>Tab. 5                   "                  (2)…31</p> <p>Tab. 6                   "                  (3)…32</p> <p>Tab. 7 東西トレンチ(南)層毎出土遺物(1)…32</p> <p>Tab. 8                   "                  (2)…33</p> <p>Tab. 9 東西トレンチ(南)東群出土遺物 ……34</p> <p>Tab. 10 東西トレンチ(南)西群出土遺物(1)…34</p> <p>Tab. 11                  "                  (2)…35</p> <p>Tab. 12                  "                  (3)…36</p> <p>Tab. 13 出土地点不明遺物……………36</p> <p>Tab. 14 SK03出土遺物 ……………63</p> <p>Tab. 15 SK04出土遺物 ……………63</p>	<p>Tab. 16 SK06出土遺物 ……………64</p> <p>Tab. 17 SK09出土遺物 ……………64</p> <p>Tab. 18 壺棺 1 出土遺物……………64</p> <p>Tab. 19 壺棺 2 出土遺物……………65</p> <p>Tab. 20 壺棺 3 出土遺物……………65</p> <p>Tab. 21 SK19出土遺物 ……………65</p> <p>Tab. 22 SK20出土遺物 ……………66</p> <p>Tab. 23 SD02出土遺物 ……………66</p> <p>Tab. 24 P4出土遺物 ……………66</p> <p>Tab. 25 円形周溝墓 1 出土遺物(1)……………66</p> <p>Tab. 26                  "                  (2)……………67</p> <p>Tab. 27                  "                  (3)……………68</p> <p>Tab. 28 円形周溝墓 4 出土遺物……………68</p> <p>Tab. 29 方形周溝墓 2 出土遺物……………68</p> <p>Tab. 30 遺構外出土遺物……………69</p>
--	---

## 第1章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査経緯

伊丹市口酒井穴森5-1において、昭和55年12月に遺跡の確認調査を実施したところ、弥生時代後期の円形周溝墓と弥生時代前期の木棺などが発見された。当初この確認調査は、倉庫建設に伴う事前調査として実施したものであるが、予想以上に良好な状態で弥生時代の遺構が発見されたため、伊丹市としては遺跡の保存の観点から、急遽土地の買上げを行い遺跡公園として整備する方針を固めた。昭和56年1月穴森地区を史跡公園として保存整備することを決定し、同年9月に円形周溝墓などが発見された穴森5-1の土地について買収を完了した。

翌年2月～3月にかけて、前回の調査で発見された円形周溝墓の全体を調査するとともに、当該地の史跡公園化を図るための資料作成を行う調査を実施した。調査の結果、遺跡の範囲は西側及び南側に広がることが明らかになった。それ以降昭和63年までの間に公園予定地の公有化が完了した。それを受けて、昭和63年10月24日から公園予定地の全域を対象に試掘調査を実施することになった。この調査が本書で報告する第22次調査である。

第22次調査は、約1か月の予定で行った。この調査の目的は公園予定地の東側に広がる弥生時代の遺構面と西側に存在する縄文時代晩期の包含層の両者について、その範囲と遺構の状況を確認することである。そのため、敷地内に幅3mのトレンチを南北方向に1本、東西方向に2本設定して確認調査を行った。調査の結果、弥生時代の遺構面は敷地の東側にあつて中央部から西側には広がらないことが判明した。弥生時代の遺構面は微高地上に形成されているが、敷地の中央部から西側は一段落ちて低地となっている。縄文時代晩期の包含層はこの低地に形成されていることが確認された。また、縄文時代晩期の包含層は、微高地沿いにある流路を中心とした範囲に存在し、そこから西に離れると薄くなっていることが判明した。

今回検出した縄文時代の包含層については、調査範囲を拡張して本調査を実施せず、トレンチの範囲内での調査を行った。

### 第2節 調査経過

今回の発掘調査は、遺跡公園整備のための事前調査であるので、本格的な調査に先立って、公園予定地全体の状況を把握する必要があった。

予定地の東側については、第7次調査および9次調査によりほぼ遺構の状況が明らかとなっているので、今回の調査では公園予定地の中央部から西部を対象に発掘調査を計画した。これまでの調査で明らかになっていることは、東側にある弥生時代の遺構面がほぼ中央部まで存在するがその西側まで続いていな

いこと、また西側には縄文時代晩期の包含層が存在していることなどであった。こうした事前の知見から、今回の調査では先ずトレンチ調査を行って弥生時代の遺構面の広がりをお確かめるとともに縄文時代の包含層を確認することにした。昭和63年11月2日～12月7日の間の約1か月をかけて実施した確認調査を第22次調査と呼称し、その成果を基に実施した本調査を第25次調査と呼んで分けている。

第22次調査は、幅3m、長さ40mのトレンチを東西方向に20mの間隔をおいて2本設定し、それに直交して南北トレンチを1本設定した。東西トレンチの東端は円形周溝墓を検出した第7次調査区に重なるようにし、弥生時代の遺構面との関係を確認することにした。また、南北トレンチは主に縄文時代晩期の包含層の南北方向への広がりを調べる目的で、調査区の西側に設定した。11月4日重機を搬入し、バックホーによる機械削掘を始めた。機械削掘の深さについては第9次調査の試掘調査を参考にして、徐々に掘り下げを行った。約1m20cm掘り下げたところで、凸帯文土器を包含する灰色粘土層が存在していることがわかり、この面で機械削掘を止めた。機械削掘は東西トレンチから南北トレンチへと進めていき、11月12日まで続けて行った。こうした機械削掘と平行して縄文の包含層まで達したところから人力削掘に切り替えて掘り下げを進めた。東西トレンチの北側と南側で包含層を取り除くと、幅10m程の浅い自然の流路が存在することがわかった。また、南側のトレンチは流路の西側から凸帯文土器を含む小さな土坑を検出した。縄文時代晩期の土器包含層は流路のある場所を中心とし、南北トレンチの手前までとなっていることが確認できた。また、弥生時代の遺構面は縄文時代の流路付近で落ち込んでおり、これ以上西側に続かないことが判明した。このように、当初の目的を達したため、12月5日までに記録を採り了え、6日から埋埋め戻しを行った。

確認調査の結果、弥生時代の遺構面の範囲が明確となったため、継続して本調査を実施することになった。調査費用は補正予算を組んで対応することにし、調査期間を12月22日から翌年1月31日までの間とした。調査範囲は弥生時代の遺構が存在する約600㎡である。弥生の遺構面は2面あり、調査に際しては下層の遺構もすべて調査することにした。1月28日までには調査をほぼ完了し、最後に現地説明会を開催して一般に公開した。調査終了は2月3日である。

## 第2章 遺跡の概要

### 第1節 口酒井遺跡の位置と立地

口酒井遺跡は、兵庫県と大阪府の府県境に近い、伊丹市口酒井に所在する。口酒井は市域の東部を流れる猪名川と大阪空港に挟まれた猪名川流域に位置する。遺跡の周辺部は全体的に農地となっているが、近年倉庫や工場が建ち始め、準工業地帯と化してきている。また、遺跡の南域は兵庫県尼崎市域に入っており、一部の調査が実施されている。尼崎市の田能遺跡とは約500mの距離がある。

口酒井遺跡は、猪名川が藻川と分流する地点からやや南に下った猪名川の左岸に立地している。猪名川からの距離は約250mである。この周辺部はよく発達した沖積地で、川に沿って自然堤防と見られる微高地が形成されている。口酒井遺跡の範囲はその微高地上に立地しているが、この微高地は口酒井遺跡のあたりで終わりとなり、その南で発見された田能遺跡とは連続していないものと考えられる。現在の地表面の標高は7mである。

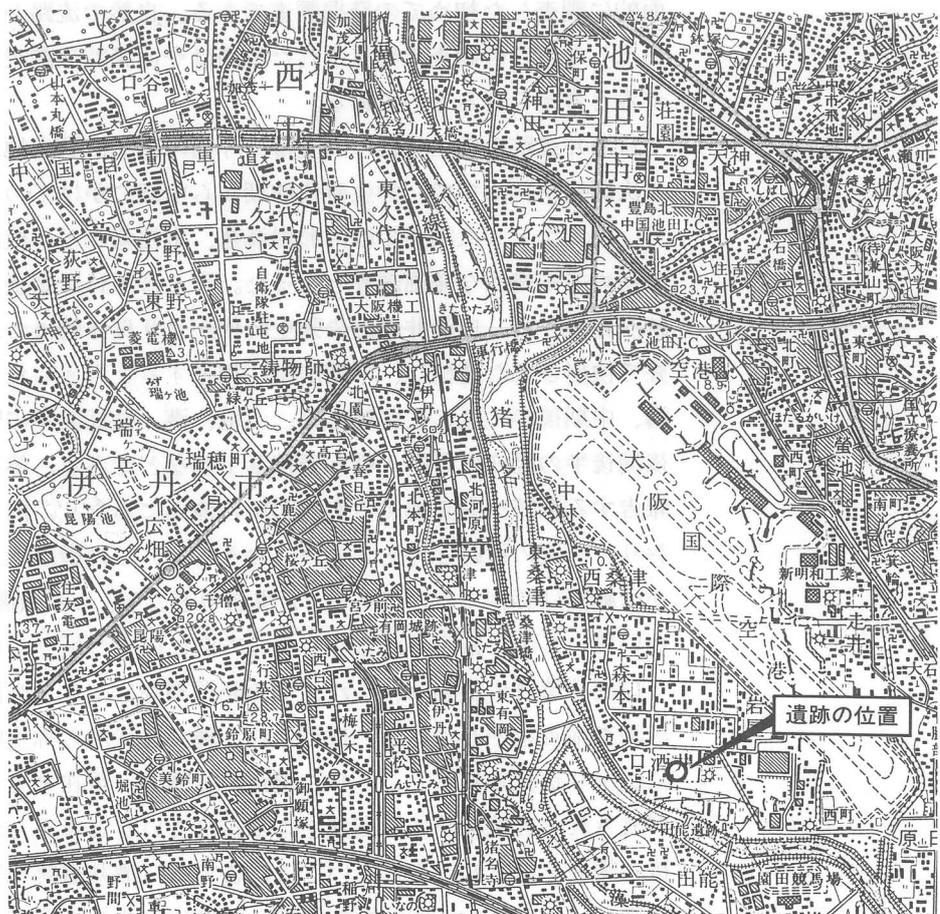


Fig. 1 口酒井遺跡位置図  
(1/50,000「大阪西北部」)

## 第2節 口酒井遺跡の調査

口酒井遺跡の調査は、昭和53年、口酒井字穴森2で実施した発掘調査が最初である。その地点は猪名川から約250m北に位置し、口酒井の現在の集落から東南方向に少し離れたところである。この場所に関西電力が口酒井変電所を建設することになり、確認調査を実施したところ、弥生土器少量と石包丁の未製品などが出土した。この調査が契機となり、その後周辺部の調査が始まった。続く第2次調査では、流路の中に堰状の木組み遺構が発見されている。時期は弥生時代末から古墳時代にかけてのものである。

縄文晩期の凸帯文土器については、第3次調査で凸帯文土器の単純包含層が発見され、第6次調査で出土した浅鉢形土器は、一辺16cmの波状方形口縁を呈し、同部中央に靱痕が残っている。また、土偶や石器なども出土し、口酒井遺跡の縄文晩期の遺跡が注目されるきっかけとなった。第9次調査は、今回報告する第22次調査範囲で実施した確認調査であるが、この調査で縄文時代晩期の包含層を確認している。さらに、古代学協会が行った第11次調査は、第22次調査地点の南側で実施された道路新設に伴う発掘調査で、縄文時代晩期の遺跡を面的に調査した初めての発掘調査である。自然の流路から多量の凸帯文土器が出土した。この調査で発見された流路は今回第22次調査で検出した流路につながると考えられるものである。

口酒井遺跡の弥生時代の調査は、今回の第25次調査地点の東方で実施した第4次調査が初めてで、弥生時代前期から中期にかけての土坑を検出した。そして、第7次・9次調査では円形周溝墓、木棺墓などが検出され、本遺跡において初めて本格的な発掘調査となった。さらに第11次調査では、初めて竪穴住居跡が発見され、口酒井遺跡の弥生時代がより具体的にわかってきた。第11次調査で検出された遺構は、中期前半に相当すると考えられる木棺墓1基、土坑、溝、中期後半の竪穴住居跡1軒、土坑、溝、後期前半の竪穴住居跡1軒と溝、後期後半の竪穴住居跡1軒と壺棺墓1基などである。第11次調査地点は、今回報告する第25次調査地点の南側50mの地点にあたり、同じ微高地上に立地しており、一連の遺跡と考えてよい。おそらく、この微高地上には弥生時代の遺跡が広範囲に存在するのであろう。現在のところ、この微高地の幅は100mに満たない狭いものと推定されるが、南北方向にはまだ延びていると考えられる。

口酒井遺跡の範囲は、これまでの発掘調査によると今回報告する第22次、25次調査地点を中心があると推定され、縄文時代から弥生時代までほぼ同じ場所に広がりが見られる。こうした遺跡の範囲は、現在までのところ猪名川により形成された自然堤防の微高地上に限られていると考えられるが、その結論は今後の調査を待たねばならない。これまでの口酒井遺跡の発掘調査は、トレンチ調査がほとんどで、広く面的に行った調査が少なく遺跡の全体像が把握できにくい状況にある。縄文晩期の集落遺跡の発見も今後の調査の課題である。

## 第3章 縄文時代晩期の調査（第22次調査）

### 第1節 調査の方法

同じ敷地内で行った昭和55年の第7次調査および昭和57年の第9次調査の結果から、この場所の遺跡の状況はある程度把握できていたが、遺跡公園を実現するためにはまだ確認すべき点が多くあった。その一つは、円形周溝墓や木棺墓など弥生時代の遺構の全貌を明らかにすることである。仮称「口酒井遺跡公園」計画は、こうした弥生時代の墓を中心に、猪名川流域における弥生文化の展開について復元することであった。そのためにも弥生時代の遺構はすべて確認しておく必要があったのである。第22次調査は弥生時代の範囲確認も重要な目的として行った。そしてもう一つの目的は、第9次調査において、その存在が確認されていた縄文時代晩期の調査である。第9次調査では、円形周溝墓などが存在する敷地東側の調査とは別に、西側については壺掘り調査を行って弥生時代の遺構面の確認を行っている。結局西側において弥生時代の遺構面は存在しないことが判明したが、この壺掘り調査により縄文時代晩期の包含層を発見したのである。この時の調査は、2m四方のトレンチを7箇所入れただけの調査であったため縄文時代の包含層の具体的な情報は得られていなかった。このため、今回の調査においてより詳しい調査をすることにした。

弥生時代の遺構面の範囲確認については、東西方向に設定した2本のトレンチにより行うことにした。このトレンチは幅3m、長さ40mの規模で、北トレンチと南トレンチの間隔は40mとした。トレンチの東端は第7・9次調査範囲と重なっている。これは弥生時代の遺構面の範囲が西側にどこまで続いているか確認するためである。調査に際しては、確実に弥生の遺構面が存在する東側から重機を用いて掘り下げていった。この結果、4ラインを境に西側では弥生の遺構面が下がっていき、遺構が存在しないことが判明した。今回の調査は、弥生時代の遺構面の確認を目的に行ったもので、遺構そのものの調査は予定していなかった。そのため遺構の検出作業は行わずに、土層の調査のみにとどめた。ただし、弥生の遺構面が存在しない西側については、さらに掘り下げて縄文時代の包含層の検出をすることにした。

縄文時代の調査は、2本の東西方向のトレンチを深く掘り下げるとともに、新たに南北方向のトレンチを設定して南北方向の広がりも併せて調査することにした。この南北方向のトレンチは、2ラインに設定した幅3m、長さ40mのトレンチである。以上3本のトレンチにより、縄文時代晩期の包含層を検出することにした。敷地の東側に存在していた弥生時代の遺構面は西側では緩やかに下がっていくが、弥生土器を含む包含層は存在していて西側にも広がっていた。そのため、重機による掘り下げは、こうした包含層の調査を行いながら進めた。重機掘削は縄文晩期の凸帯文土器が出土する第10層上面までとし、それ

以下は遺構を検出しながらの人力掘削とした。

遺構は東西トレンチの北と南で検出したが、南北トレンチからは検出されなかった。また、各トレンチでは壁際にさらに幅50cmのサブトレンチを入れて下層の調査を実施したがこれより下からは何も検出されなかった。

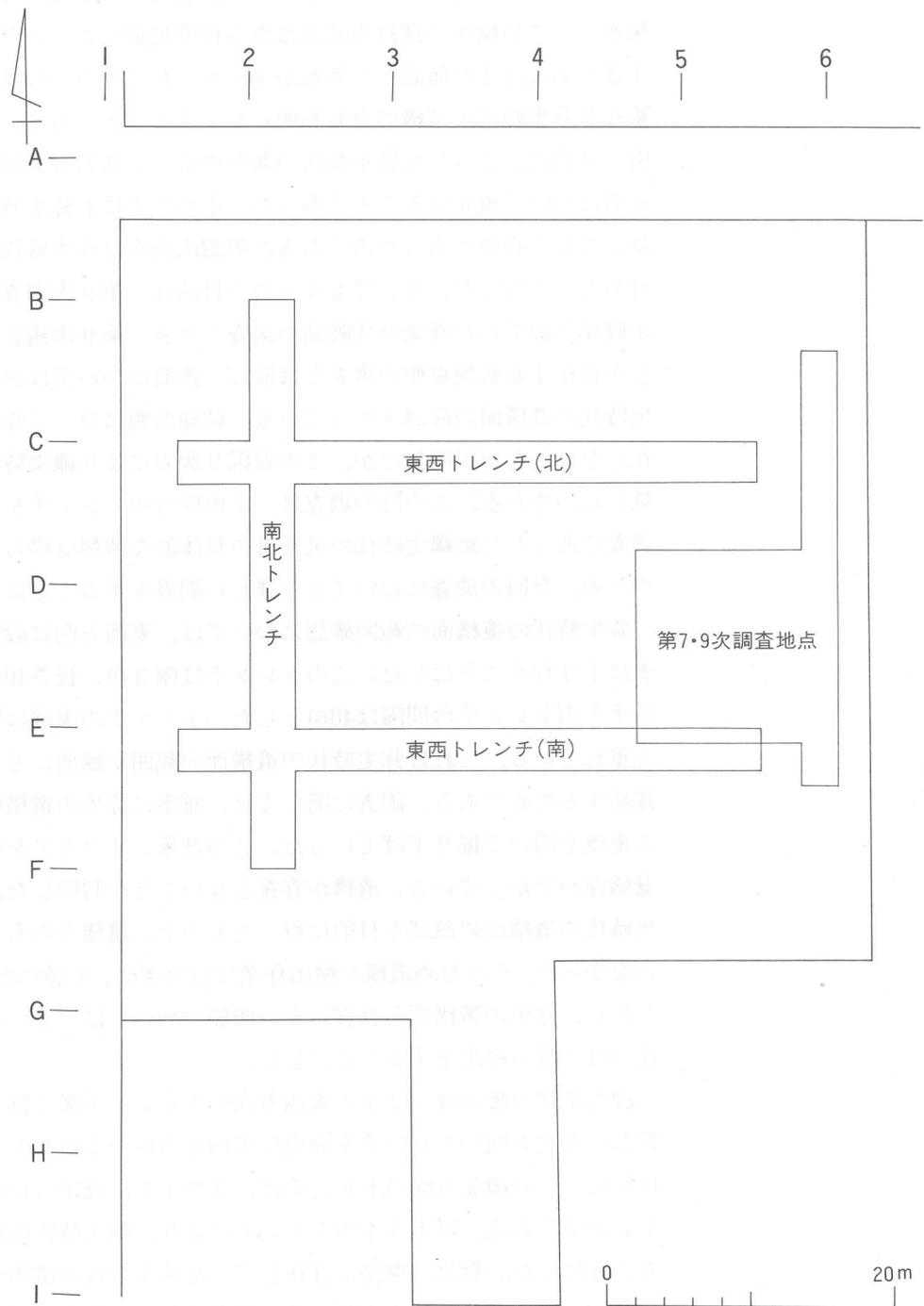


Fig. 2 トレンチ設定図

## 第2節 調査の概要

第22次調査では、微高地から一段下がったあたりを中心として広がる凸帯文土器の包含層と、凸帯文土器を出土する自然の流路及び小規模な幾つかの土坑が検出された。凸帯文土器の包含層は、東西トレンチ、南北トレンチともに存在していたが、南北トレンチは薄い分布が認められる程度で、東西トレンチ（北）では3ラインを中心とした付近に、また東西トレンチ（南）では3ラインから4ラインにかけて厚い分布が認められた。

この凸帯文土器の範囲は、流路の位置とほぼ一致しており、流路から離れると薄い分布状況になっている。特に東西トレンチ（北）では流路の埋土（11層）以外から出土することは少ないことがわかった。流路の上層部には特に凸帯文土器が集中しており、遺物出土状況の図(Fig.8)はこの上層部の出土状態を記録したものである。

遺構は、第11層上面と同層を掘り下げた第12層上面において検出した。上層部の遺構は、東西トレンチ（南）において浅い溝状の遺構を検出しているが、この遺構の続きは（北）では確認できていない。溝状遺構の位置は下層で検出した流路と重なっていることから、流路の上層部であると考えられる。

上層部から検出した遺構には、この溝状遺構のほかに足跡遺構が検出された。足跡遺構は、東西トレンチの北と南から検出されているが、調査した範囲が狭いためか足跡に連続性は認められなかった。

下層部からは、流路と幾つかの土坑が検出された。流路は幅5m、深さは50cm程の規模で、北から南に向かって流れている。内部からは多数の凸帯文土器片が出土している。この流路の下流部は第11次調査で検出されている。土坑は東西トレンチ（南）から検出されている。土坑の検出された場所は流路の西側で、SK05を中心に計5基の土坑が並んで位置している。土坑内部からは凸帯文土器が出土しているため、遺構の時期は流路とほぼ同時期と考えられる。遺構の配置状況から見て調査区外に広がっている可能性が高く、全体の調査を行わないと遺構の性格については判断することができない。しかし、これまでの発掘調査では、縄文晩期の遺構は流路など自然に形成されたものが中心であることから、今回発見した土坑などは縄文晩期の集落遺跡の発見の手がかりになるものと期待される。

口酒井遺跡の縄文時代晩期の調査は、これまでトレンチ調査が中心で面的な調査は昭和61年に実施された第11次調査しかない。しかも広い範囲での調査は皆無となっている。その結果住居跡などの遺構の発見例が全くなく、口酒井遺跡の全体像は把握できていない原因にもなっている。今回の調査も同様トレンチ調査であるため、集落遺構の検出など具体的に口酒井遺跡を解明する調査とはならなかった。しかし、東西トレンチ（南）にみられた土坑などから、低地上に集落遺構が存在する可能性が指摘できたことは大きな成果である。

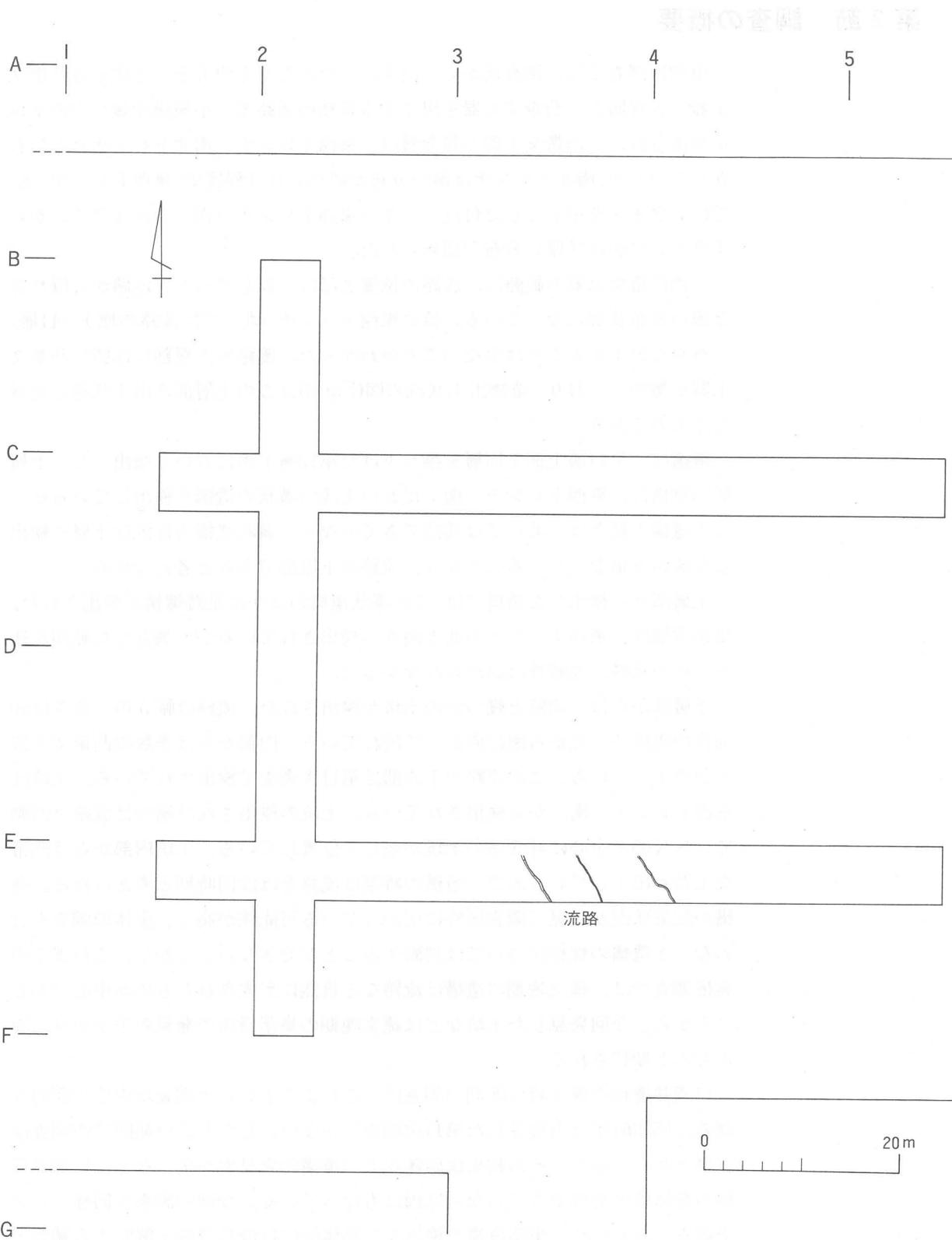


Fig. 3 全体図（上層遺構）

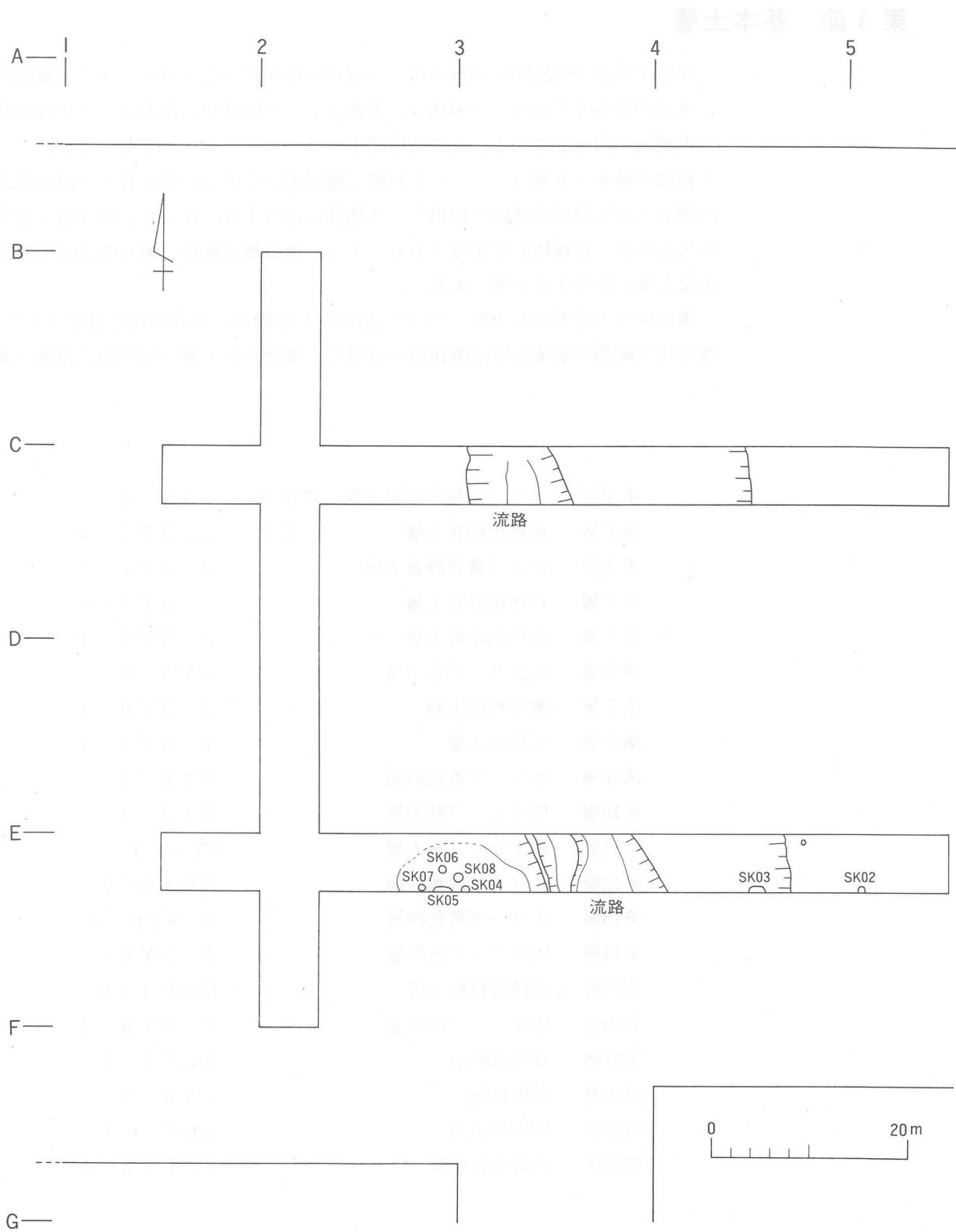


Fig. 4 全体図（下層遺構）

### 第3節 基本土層

第22次調査(確認調査)の層序は、土層図(Fig.5)に示しており、その土層説明は下記のとおりである。土層図は、東西トレンチは北壁、南北トレンチは西壁の実測図を図示している。この土層図中のスクリーントーンを貼って示している範囲が第8・9層 [ ] と11層 [ ] である。第9層の上面は第25次調査で弥生時代の遺構を検出した遺構面に該当する。従って、第9層は弥生時代より古くに堆積した土層である。また、第11層は純粹に縄文時代晩期の凸帯文土器を包含する土層である。

調査区内の基本的な土層について、出土した遺物からその年代を見ていくと、縄文時代晩期の堆積土層は第10層と11層で、遺物の出土量は圧倒的に11層が多い。

第1層	オリーブ黒色砂質土層 (耕作土)	5 Y 3 / 2
第2層	黄褐色砂質土層 (床土)	2 . 5 Y 5 / 4
第3層	にぶい黄色砂質土層	2 . 5 Y 6 / 3
第4層	黄褐色砂質土層	2 . 5 Y 5 / 6
第5層	黄灰色砂質土層	2 . 5 Y 5 / 1
第6層	灰オリーブ色土層	5 Y 5 / 2
第7層	黄灰色粘土層	2 . 5 Y 6 / 1
第8層	灰色粘土層	7 . 5 Y 5 / 1
第9層	オリーブ黄色砂層	5 Y 6 / 3
第10層	灰オリーブ粘土層	5 Y 4 / 2
第11層	灰オリーブ粘土層	5 Y 4 / 1
第12層	オリーブ灰色砂層	5 G Y 5 / 1
第13層	オリーブ黄色砂層	2 . 5 Y 6 / 3
第14層	灰オリーブ色砂層	7 . 5 Y 6 / 3
第15層	暗緑灰色粘土層	10 G Y 4 / 1
第16層	灰オリーブ色砂層	7 . 5 Y 6 / 2
第17層	緑灰色砂層	10 G Y 5 / 1
第18層	灰色砂層	5 Y 4 / 1
第19層	緑灰色土層	10 G Y 5 / 1
第20層	明黄褐色砂層	2 . 5 Y 6 / 8

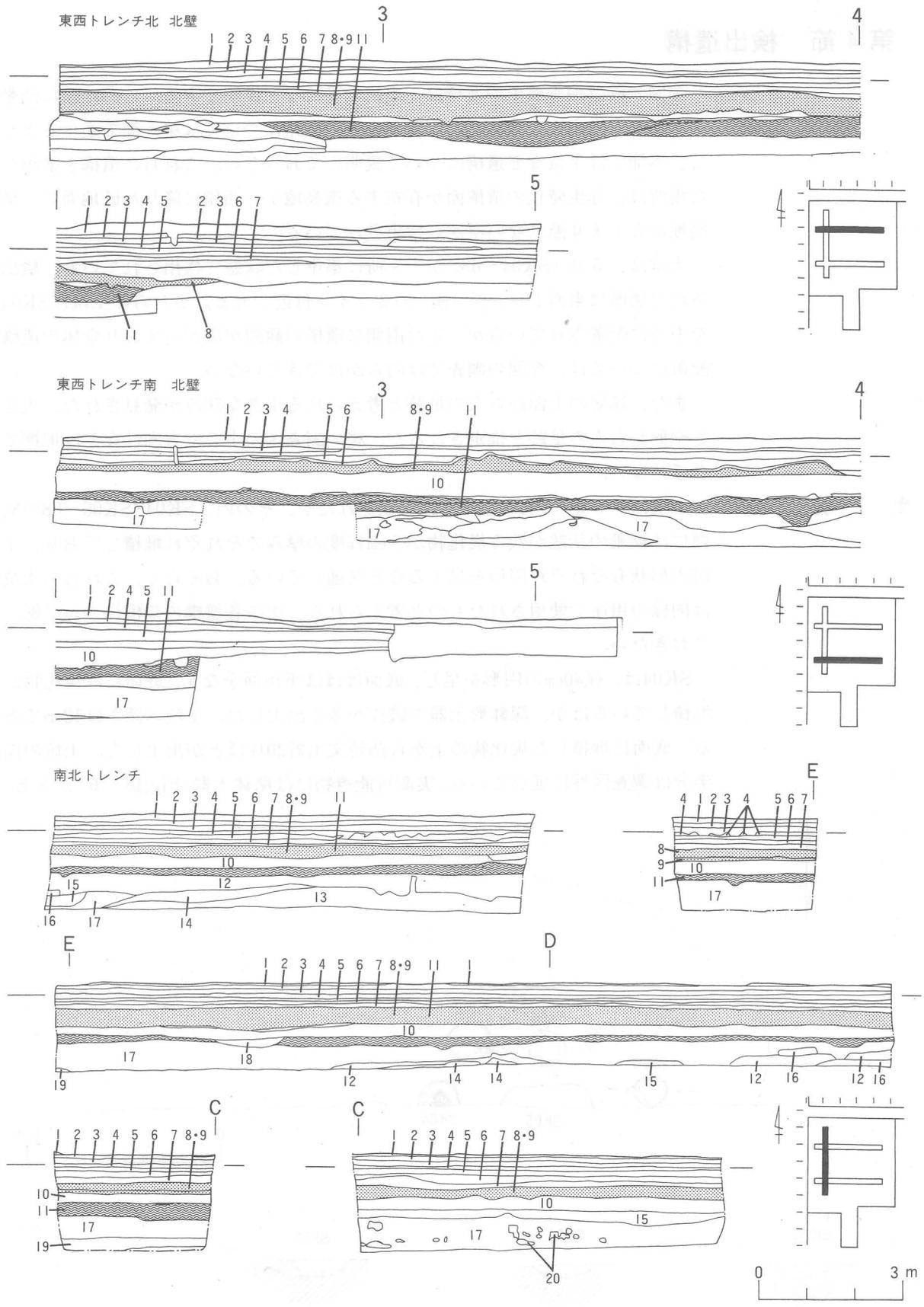


Fig. 5 土層図 (東西トレンチは北壁、南北トレンチは西壁)

## 第4節 検出遺構

今回の確認調査検出の遺構は、土坑と足跡など僅かである。このほかに凸帯文土器を多数出土した自然の流路がある。流路については第5節で述べるとして、本節では土坑など遺構について説明しておきたい。これらの遺構を検出した場所は、弥生時代の遺構面が存在する微高地から西側に降りた低地面で、微高地からあまり離れない所から検出されている。

土坑は、5基（SK04～08）が一ヶ所に集中した状態で検出されている。検出された場所は東西トレンチ（南）の3ライン付近である。これらの土坑はSK04を中心に配置されているが、まだ南側に遺構の範囲が広がっており全体の遺構配置については、今回の調査では明らかにできていない。

また、10層の上面から人の足跡と考えられる小さな窪みが発見された。大きさや形から人の足跡と推定されるが、狭い調査区の中では方向性などは把握できていない。

### 土 坑

土坑は、5基がSK05を中心に検出されたが、その内、SK04・SK06～08の底面には繊維の状態が残る炭化物が5cm程度の厚みでそれぞれ堆積しており、土坑の形状もそれぞれ円形を呈するなど共通している。おそらく、これらの土坑は同様の用途で使用されたものと考えられる。次に各遺構の規模について延べておきたい。

SK04は、径40cmの円形を呈し、底面はほぼ平坦面をなす。底面には炭化物が堆積しているほか、深鉢形土器の破片が多く出土した。土坑の深さは12cmである。底面に堆積した炭化物の上から凸帯文土器20片ほどが出土した。土坑の南半分は調査区外に延びている。実測可能遺物には深鉢土器 (Fig.18-6) がある。

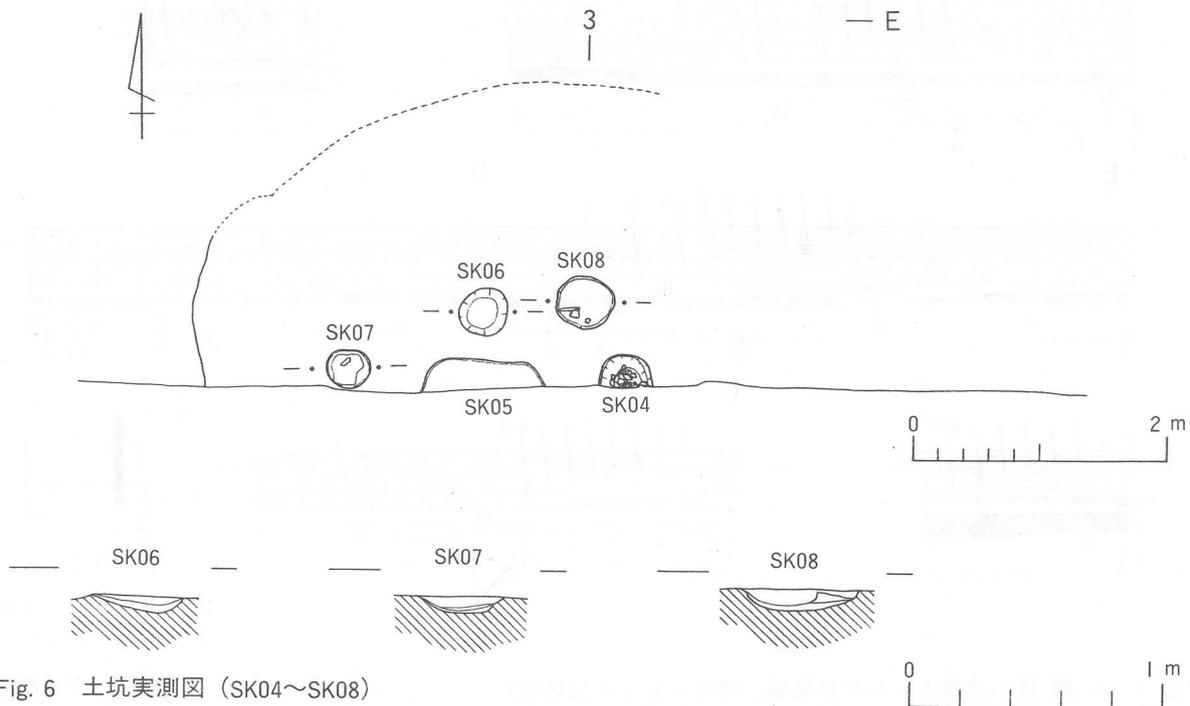


Fig. 6 土坑実測図 (SK04～SK08)

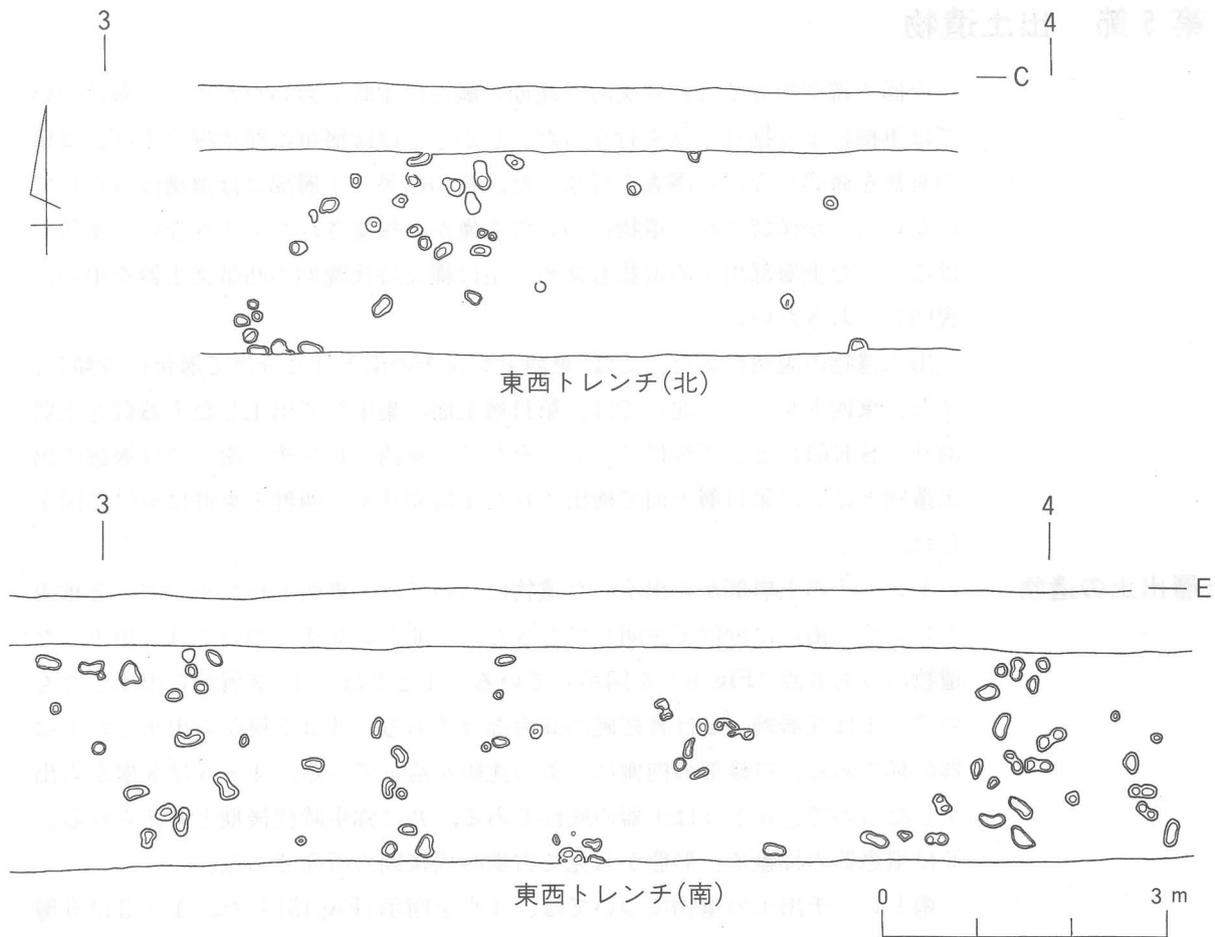


Fig. 7 足跡実測図

SK05は、土坑の南側が調査区外に延びており全体の規模・形態は不明である。検出した範囲では、長軸1m、深さ5cmとなっている。

SK06は径40cmの円形を呈し、深さは7cmである。土坑の底には3cmの厚さで炭化物が堆積している。

SK07は径34cmの円形を呈しており、深さは約7cmである。やはり底面には炭化物が堆積している。

### 足跡

10層上面から足跡状の窪みが多数検出されている。これらの窪みは、東西トレンチの南と北で発見され、北では、3ラインから東側に向けて7mの範囲で確認されている。また、南では3ラインから4ラインにかけて13mの範囲で確認されている。

足跡状遺構は、長楕円形のもので20~30cmの長さがあり、形態的にも人の足跡と近似している。しかし、円形に近い形態のものも多く、これらは径15cm程度と小さい。調査範囲が狭いことから足跡遺構の方向性など詳しいことは判断できないが、とりあえず足跡遺構の存在することを指摘し今後の調査に備えておきたい。

## 第5節 出土遺物

今回の確認調査では、縄文時代晩期の調査に主眼をおいたため、上層については重機により掘り下げを行なった。しかし、ほぼ層毎に順次掘り下げ、遺構の有無を確認しながら調査を行なった。その結果、上層部には遺構は存在していないことが確認され、遺物についても僅かに採集されたにすぎない。本稿ではこうした上層部出土の遺物も含め、主に縄文時代晩期の凸帯文土器を中心に説明しておきたい。

出土遺物の説明にあたっては、東西トレンチの南と北に分けて層毎に分類し、また、東西トレンチ（北）では、第11層上面に集中して出土した土器群を土器溜り（SK01）として分けている。そして、東西トレンチ（南）では層毎の出土遺物とは別に第11層上面で検出された土器溜りを、西群と東群に分けて図示した。

### 上層出土の遺物

トレンチの上層部から出土した遺物については、東西トレンチ（北）と東西トレンチ（南）に分けて説明しておきたい。北トレンチについては、出土した遺物のうち6点（Fig.9）を図示している。1と2は、1・2層から出土したもので、1は瓦器碗、2は青磁碗の高台部分である。3は7層から出土した土師器の杯である。口縁部の内側に一条の沈線が巡っている。4～6は8層から出土したもので、4と5は土師器の底部である。共に弥生時代後期と考えられる。6は須恵器の杯蓋で、形態から見て古墳時代後期の所産である。

南トレンチ出土の遺物については、4点を図示（Fig.15）した。1～3は6層から出土した。1と2は土師器の高杯、3は土師器の甕の胴部である。4は7層から出土した土師器の高杯の脚部である。4点とも古墳時代前期の所産と考えられる。

### 縄文土器の検出状況

東西トレンチ（北）における遺物の出土状況は、3ライン付近に集中部分があり、これを土器溜りと呼ぶことにする。この土器溜りは幅4mの範囲に集中が認められるが、中でもその東側（Fig.8の点線で囲った範囲）には特に多くの土器が集中して分布している。これらの土器片には接合関係にあるものが多いが、復元して完形になるものはなかった。この土器溜りの範囲はほぼ流路の位置と重なっており、この段階で流路そのものは僅かな窪み程度となり確認できなかったが、流路の上部に堆積した土器群と考えることもできる。この窪み（点線の範囲）をSK01とし遺構の扱いをしている。

東西トレンチ（南）の遺物出土状況は、（北）と異なり、東西2群に別れる。西群は3ラインから西にその中心があり、およそ5mの幅がある。東群は4ライン付近において検出された浅い流路の内部に中心がある。

遺物のほとんどが縄文時代晩期の凸帯文土器で、両群とも遺物に若干の接合関係が認められるが、全体としては多くはない。また、遺物の出土状況を見ると、西群は調査した範囲を中心として土器溜りの様相を呈しているが、東群については流路に沿って出土する傾向が強く、南北方向に長く分布する物と



Fig. 8 遺物出土状況実測図

## 凸帯文土器の分類

考えられる。

今回の確認調査出土の遺物については、縄文時代晩期の凸帯文土器がその大半をしめているので、本稿ではそれらを分類し、器種構成や胎土についても若干の検討を加えておきたい。ここで取り扱う資料は、第10層・第11層および第11層上面で検出された土器溜り出土の遺物である。

### (胎土の分類)

凸帯文土器の胎土の分類については、古代学協会が実施した口酒井遺跡第11次調査報告書（南ほか1988年）に詳しいが、本稿もその基準を参考にして分類することにした。

凸帯文土器の胎土は幾種類かつ分類できる可能性はあるが、大別して次の2種類に分けることができる。

A類 黒褐色から褐色を呈し、比較的緻密な胎土の中に角閃石と黒雲母を多く含む。その特長から生駒西麓産と考えられるものである。

B類 褐色から淡褐色を呈し、A類のような雲母などの含有物を含んでいない。在地の粘土を用いたものと考えられる。

### (深鉢土器の形態分類)

1類 肩部から頸部にかけて内側に強く屈曲し、口縁部は緩やかに外反する。肩部の凸帯部分に最大径がある。

(Fig,10-15・16)

2類 肩部から頸部にかけて「S字状」に緩やかに屈曲し、口縁部が垂直気味に立ち上がる。同部最大径のやや上に凸帯が巡る。

(Fig,10-14、13-1、19-17)

3類 口縁部が内傾気味に立ち上がる。

(Fig,18-1・4・5、19-18)

4類 底部から口縁部にかけて直線的に開く。

(Fig,11-17)

### (浅鉢形土器)

1類 肩部から口縁部にかけて強く内側に屈曲し、口縁端部が外反する。

(Fig,12-54・55、16-11・12、17-10、19-30)

2類 皿形を呈するもので、内面に沈線が巡る。

(Fig,12-52、14-32、19-31)

3類 皿形を呈するもの。

(Fig,12-53、16-22)

### (底部)

1類 平底で底部外縁が外側に張り出すもの。

(Fig,12-61、14-29、16-24、19-33)

2類 平底

(Fig,10-13、12-57・59・60~62、14-31、16-23・25、17-11・13、19-34~38)

3類 平底で中心部が上げ底状になるもの

(Fig,14—30)

4類 丸底

(Fig,12—58、17—12、19—39)

(凸帯の位置)

A類 口縁端部より少し下がって凸帯を貼り付けるもの。

B類 口縁端部に接して凸帯を貼り付けるもの。

凸帯文土器の深鉢形土器には、口縁部のみに凸帯文を巡らす一条凸帯と胴部と口縁部の境付近にも凸帯文を巡らす二条凸帯が存在する。遺物観察表の中で二条凸帯としたものは、凸帯文をもつ胴部の破片と明らかに二条の凸帯文が残る破片であり、一条凸帯としたものは口縁部から胴部までの破片で胴部に凸帯文を持たないものである。従って、口縁部のみの破片は不明とした。

(刻目)

刻目については、その形状からV字形、D字形、O字形に分類した。V字形の刻目は、へら状工具を立てて施文したものと考えられ、D字形の刻目は、へら状工具をややねかせて押し引きしたと考えられる。また、O字形はへら状工具を深く押し込まずに滑らせるようにして施文したものである。

## 石 器

今回の調査で出土した石器類は極めて少なく、実測図を掲載したものは3点となっている。1と2は敲石。1は砂岩製で、欠損しており先端部のみ遺存している。河原石を利用したもので、先端部に敲打痕が明瞭に残る。現存の大きさは、幅6cm、長さ44.7cm、厚さ4.4cmである。2はチャート製。大きく破損し先端部のみ遺存している。先端部に敲打痕がある。3は磨製石斧。大きく破損しており刃部の一部が遺存している。刃部には使用による刃こぼれが多数認められる。

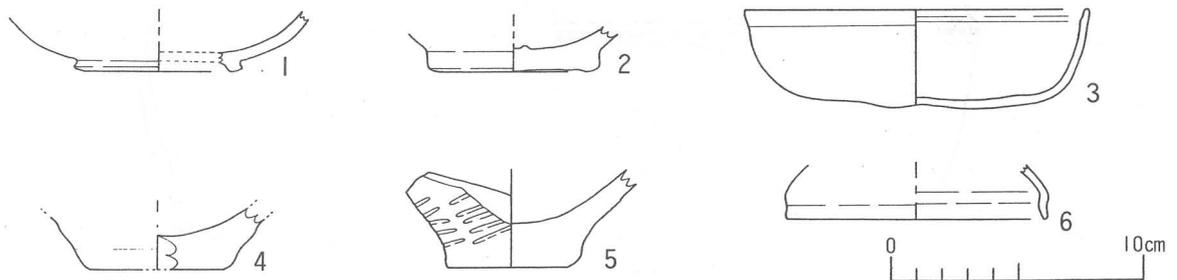


Fig. 9 東西トレンチ（北）出土遺物 (I) 1・2 - 1・2層、3 - 7層、4~6 - 8層

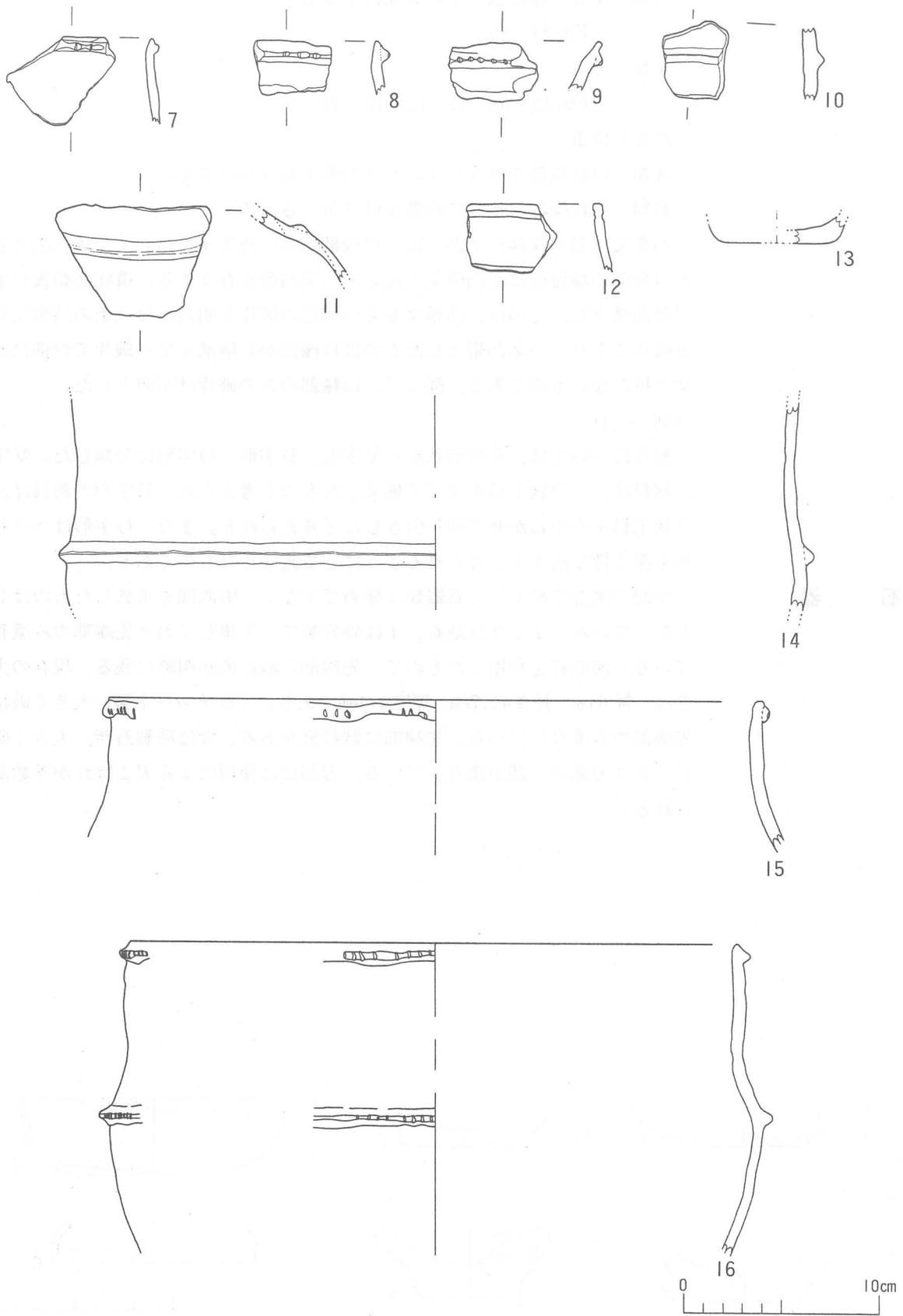


Fig. 10 東西トレンチ（北）出土遺物（2） 7・8-8・9層、9~14-10層、15・16-11層

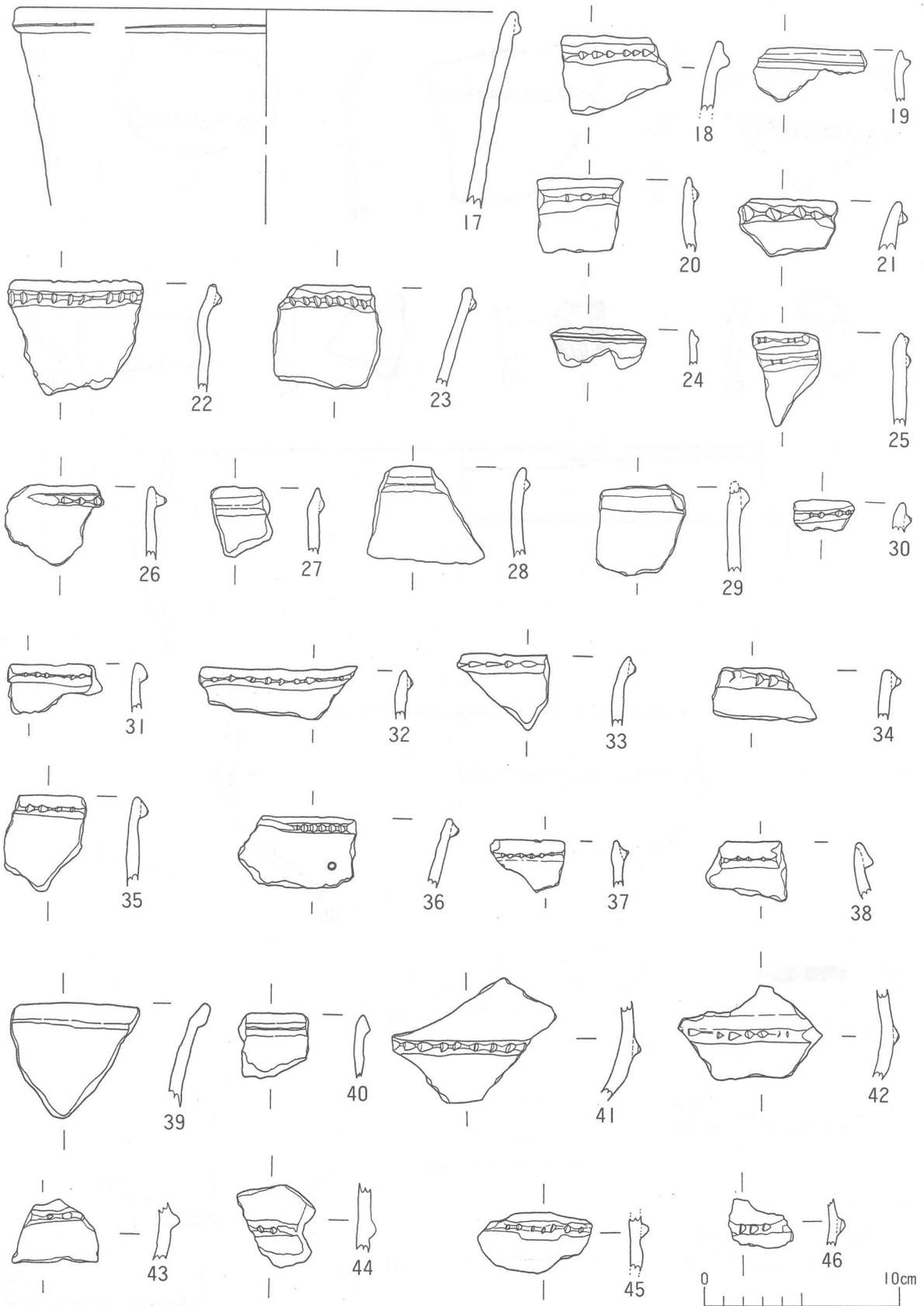


Fig. 11 東西トレンチ（北）出土遺物（3） 17～46-II層

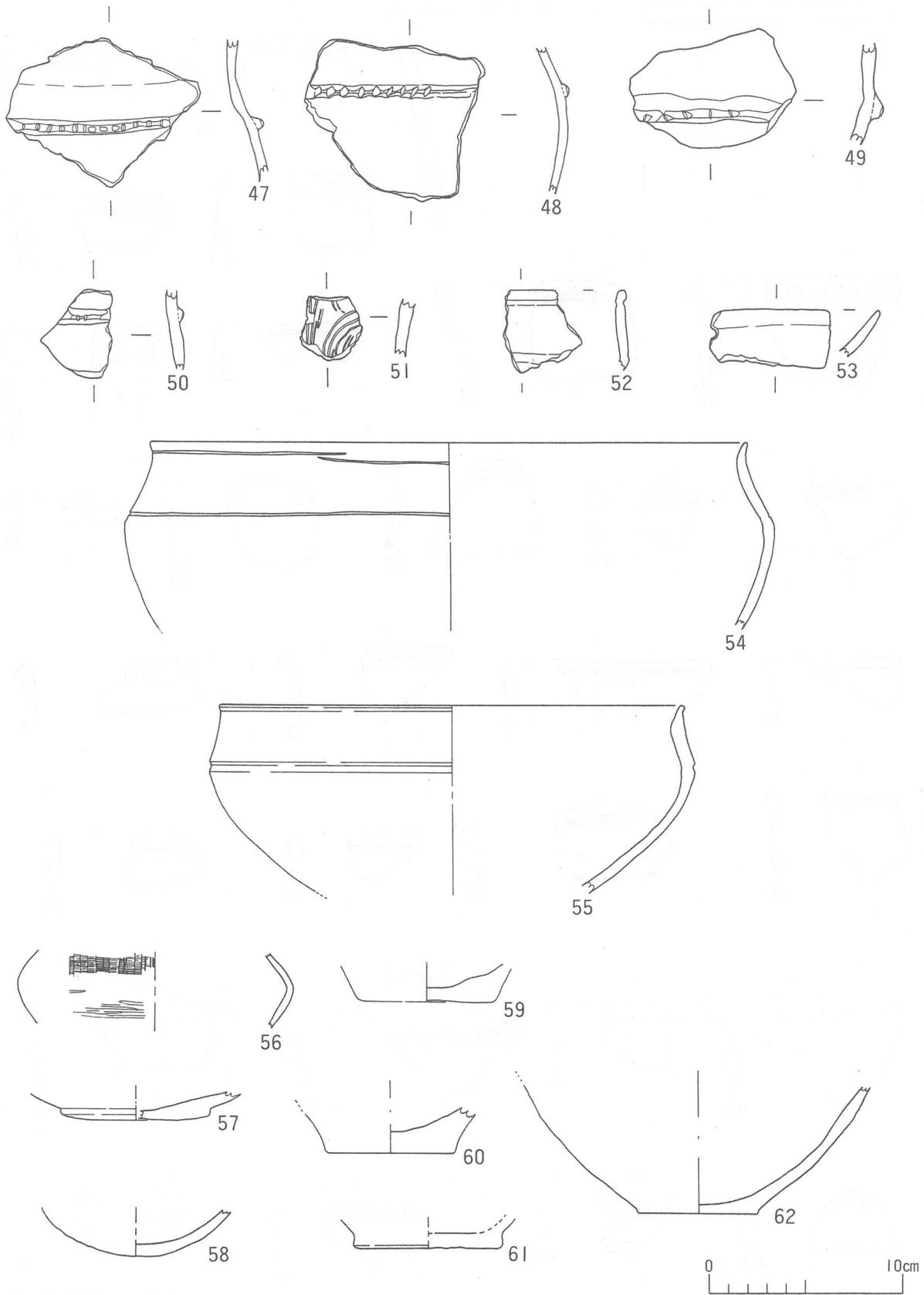


Fig. 12 東西トレンチ（北）出土遺物（4） 47～62-11層

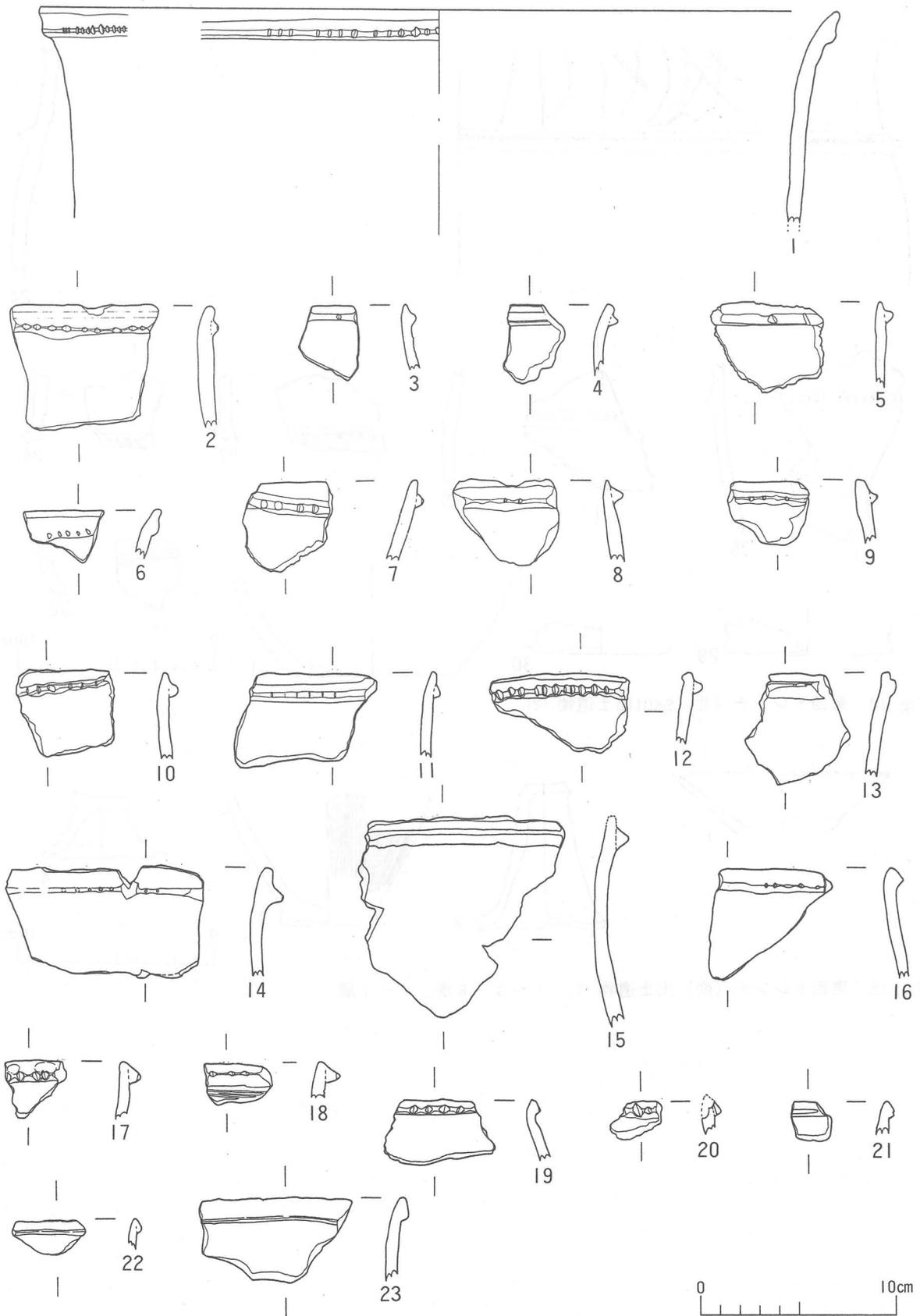


Fig. 13 東西トレンチ（北）SK01出土遺物（I）

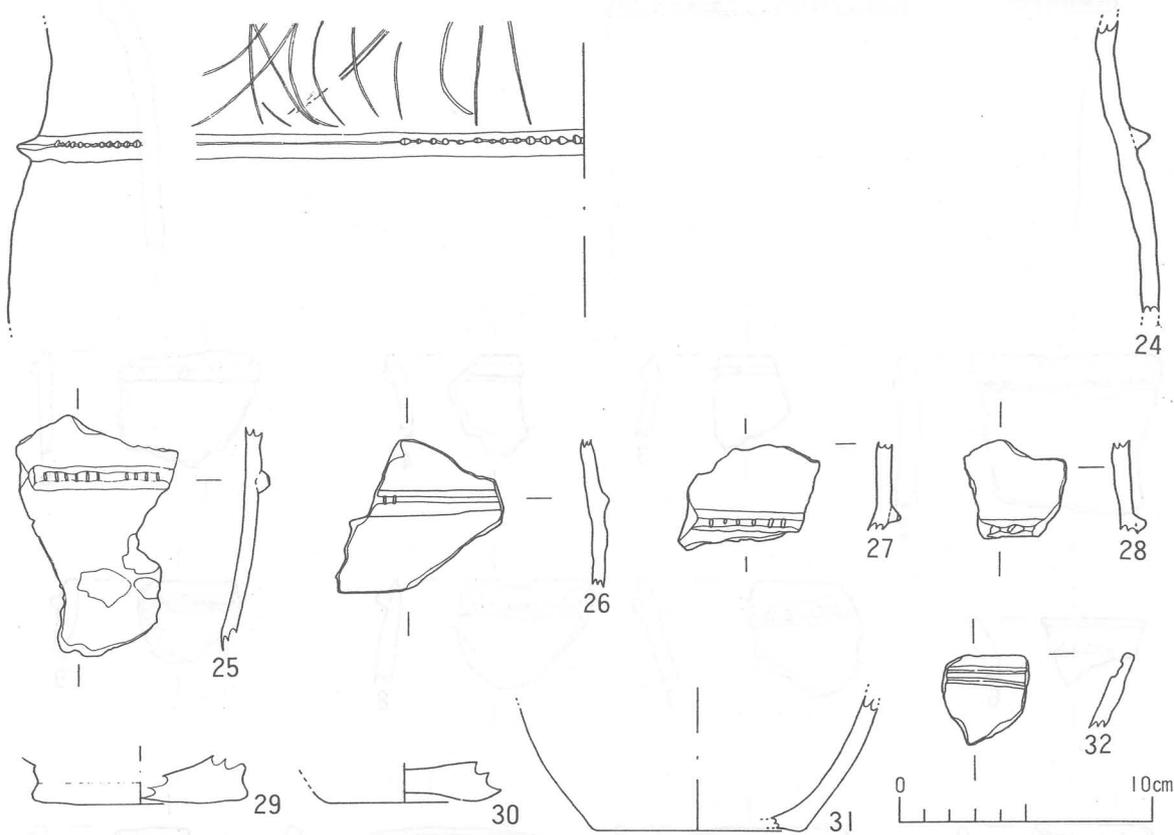


Fig. 14 東西トレンチ（北）SK01出土遺物（2）

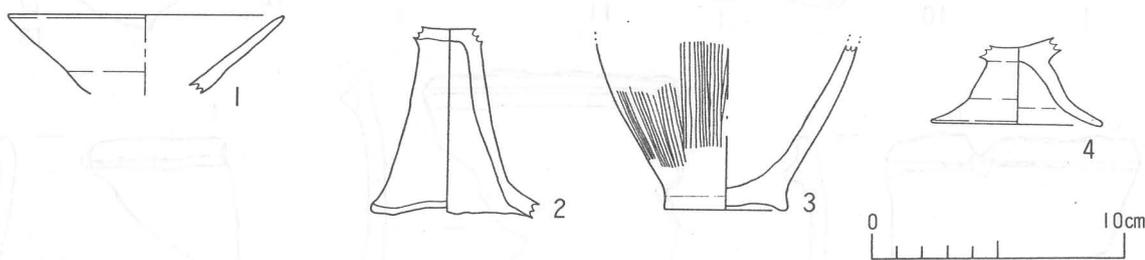


Fig. 15 東西トレンチ（南）出土遺物（1） 1～3 - 6層、4 - 7層

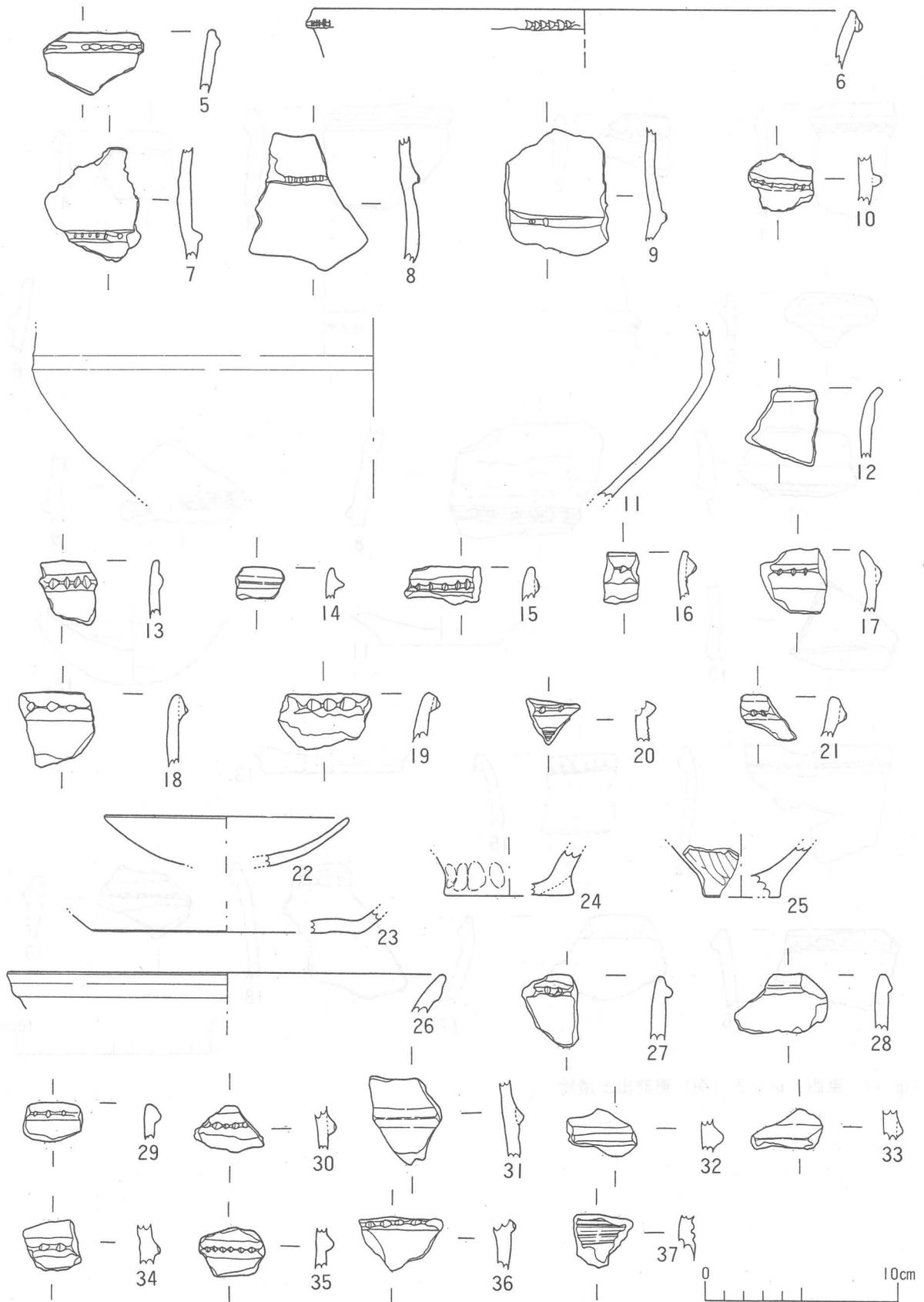


Fig. 16 東西トレンチ（南）出土遺物（2） 5～25-10層、26～37-11層



Fig. 17 東西トレンチ（南）東群出土遺物

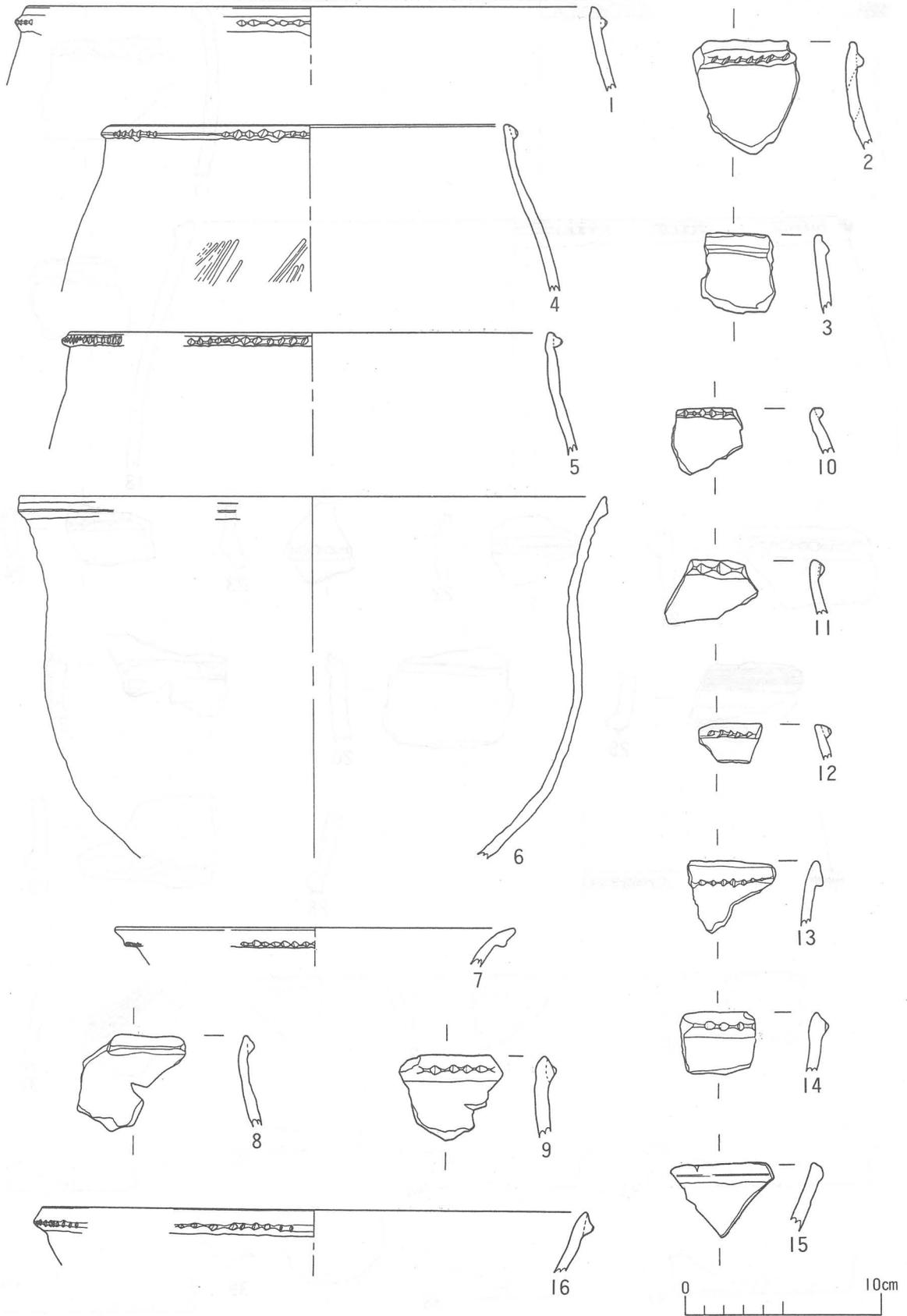


Fig. 18 東西トレンチ（南）西群出土遺物（I）

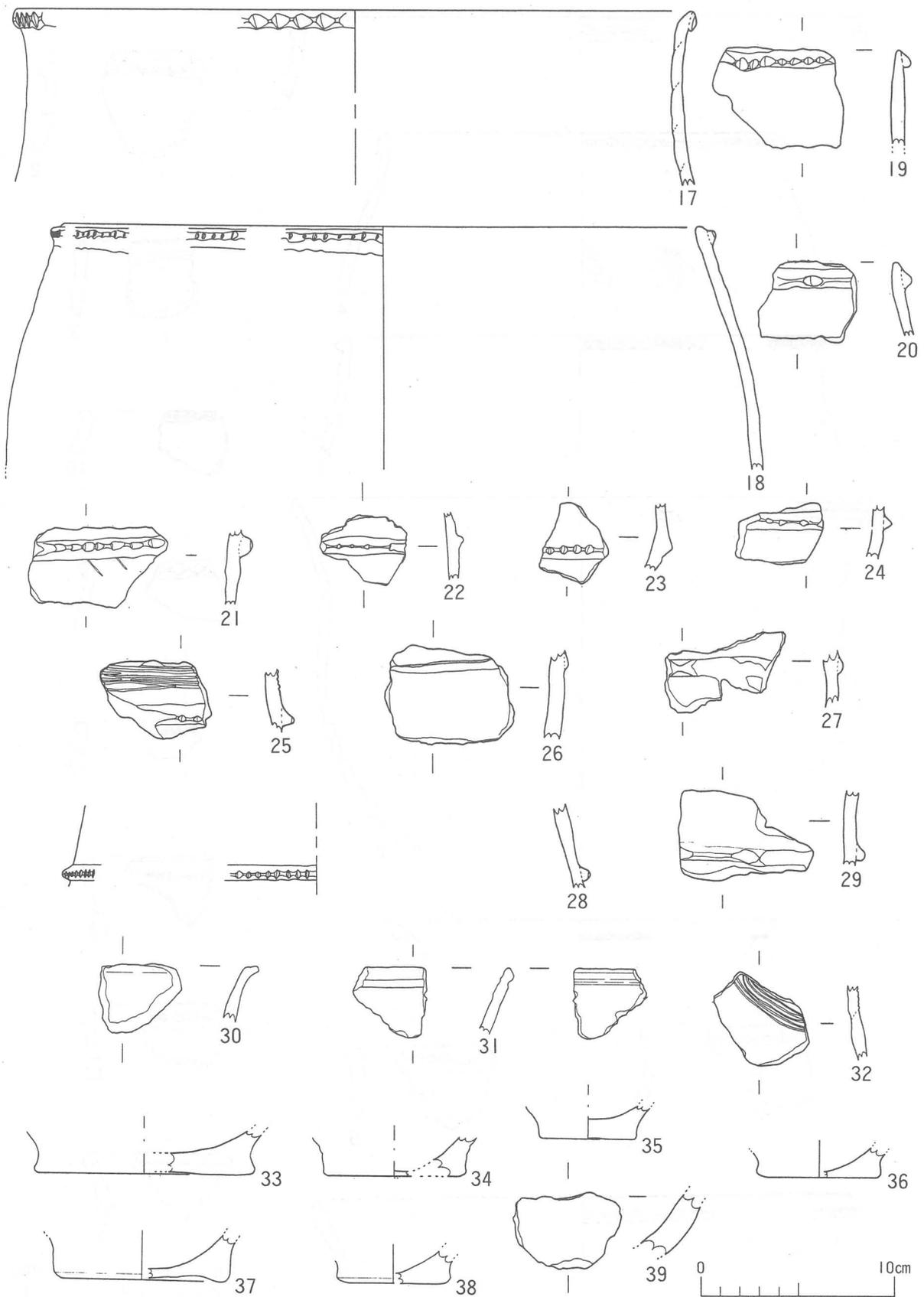


Fig. 19 東西トレンチ（南）西群出土遺物（2）

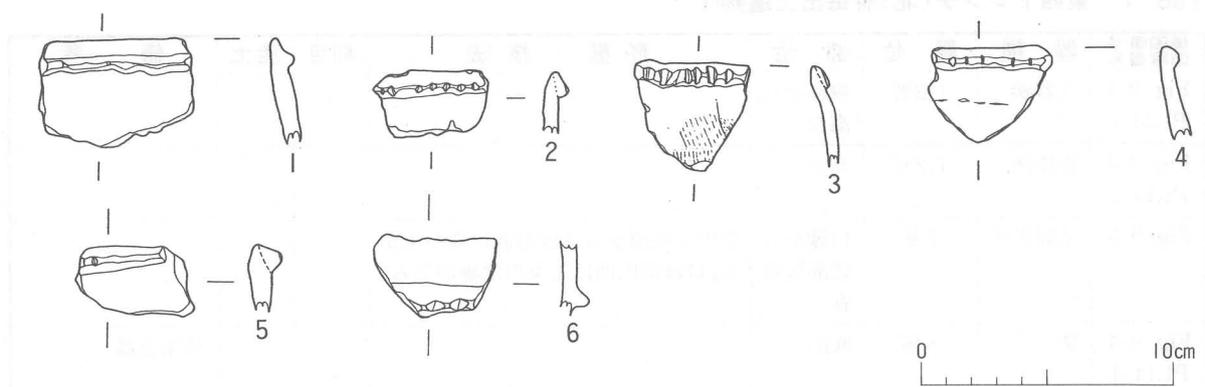


Fig. 20 出土地点不明遺物

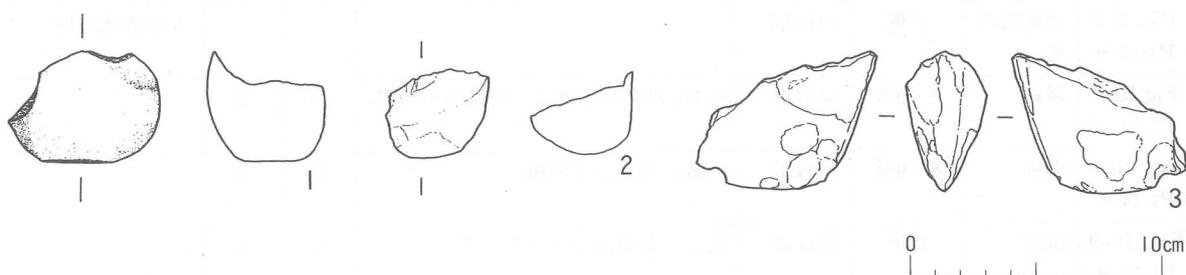


Fig. 21 石器

Tab. 1 東西トレンチ(北)層毎出土遺物(1)

挿図番号 図版番号	器種	層位	部位	形態・技法	刻目	胎土	備考
Fig. 9-1 P1.14-1	瓦器碗	1.2層	胴部から 高台				
Fig. 9-2 P1.14-2	青磁碗	1.2層	高台				
Fig. 9-3	土師器坏	7層	口縁から 底部 <sup>2/3</sup> 残 存	平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がる。口縁部内面に1条の沈線が巡る。			
Fig. 9-4 P1.14-4	甕	8層	底部				弥生土器
Fig. 9-5 P1.14-5	甕	8層	底部	外面にタタキ目を残す。			弥生時代後期
Fig. 9-6 P1.14-6	須恵器坏 蓋	8層	口縁部				古墳時代後期
Fig.10-7 P1.14-7	深鉢	8・9層	口縁部	凸B。凸帯は小さく、刻目は不明瞭。	D	B	
Fig. 10-8 P1.14-8	深鉢	8・9層	口縁部	凸B。刻目は不明瞭。	D	B	
Fig. 10-9 P1.14-9	深鉢	10層	口縁部	凸A。刻目は小さいV字形。	V	A	
Fig. 10-10 P1.14-10	深鉢 二条凸帯	10層	胴部	胴部の凸帯は断面三角形。刻目はない。		A	
Fig. 10-11 P1.14-11	深鉢 二条凸帯	10層	胴部	胴部の凸帯は刻目はない。肩部が強く張り出す。		A	
Fig. 10-12 P1.14-12	浅鉢	10層	口縁部	2類。口縁部内外面に沈線が巡る。内外面ともにヘラミガキ。		A	
Fig. 10-13 P1.14-13	深鉢	10層	底部	2類。		B	
Fig. 10-14 P1.14-14	深鉢 二条凸帯	10層	胴部	2類。肩部から口縁部にかけて、ほぼ垂直に立ち上がる。刻目はない。		A	
Fig. 10-15 P1.14-15	深鉢	11層	口縁部	1類。凸B。内外面ともにヘラナデ。	V	B	
Fig. 10-16 P1.14-16	深鉢 二条凸帯	11層	口縁部	1類。凸B。刻目は小さなV字形。	V	B	外面に煤が付着。
Fig. 11-17 P1.15-17	深鉢	11層	口縁部	4類。凸B。凸帯に刻目はない。		B	
Fig. 11-18 P1.15-18	深鉢	11層	口縁部	凸A。	O	B	
Fig. 11-19 P1.15-19	深鉢	11層	口縁部	凸A。凸帯は小さく、刻目はない。		A	
Fig. 11-20 P1.15-20	深鉢	11層	口縁部	凸A。刻目は磨滅が著しい。	O	A	
Fig. 11-21 P1.15-21	深鉢	11層	口縁部	凸A。刻目は明瞭なV字形。	V	A	
Fig. 11-22 P1.15-22	深鉢	11層	口縁部	凸A。	V	A	

Tab. 2 東西トレンチ(北)層毎出土遺物(2)

挿図番号 図版番号	器種	層位	部位	形態・技法	刻目	胎土	備考
Fig. 11-23 P1.15-23	深鉢	11層	口縁部	凸A。内外面ともにヘラナデ。	D	A	
Fig. 11-24 P1.15-24	深鉢	11層	口縁部	凸A。凸帯は小さく、刻目はない。		A	外面に煤付着。
Fig. 11-25 P1.15-25	深鉢 二重凸帯	11層	口縁部	口縁部に二条の凸帯を巡らす。	V	A	
Fig. 11-26 P1.15-26	深鉢	11層	口縁部	凸A。凸帯の断面台形に強く張り出す。	D	A	
Fig. 11-27 P1.15-27	深鉢	11層	口縁部	凸A。磨減が著しく刻目は不明。		A	
Fig. 11-28 P1.15-28	深鉢	11層	口縁部	凸A。磨減が著しく刻目は不明。		A	
Fig. 11-29 P1.15-29	深鉢	11層	口縁部	凸A。凸帯に刻目はない。		A	外面に煤付着。
Fig. 11-30 P1.15-30	深鉢	11層	口縁部	凸A。刻目は小さなD字形。	D	A	
Fig. 11-31 P1.15-31	深鉢	11層	口縁部	凸B。刻目は小さなD字形。	D	B	
Fig. 11-32 P1.15-32	深鉢	11層	口縁部	凸B。	D	B	
Fig. 11-33 P1.15-33	深鉢	11層	口縁部	凸B。刻目は小さなD字形。	D	B	
Fig. 11-34 P1.15-34	深鉢	11層	口縁部	凸B。	V	B	
Fig. 11-35 P1.15-35	深鉢	11層	口縁部	凸B。刻目は小さなD字形。内外面ともに丁寧なヘラナデ。	D	B	
Fig. 11-36 P1.15-36	深鉢	11層	口縁部	凸B。刻目はV字形に近いD字形。口縁部に穿孔されている。	D	A	
Fig. 11-37 P1.15-37	深鉢	11層	口縁部	凸B。	D	A	外面に煤付着。
Fig. 11-38 P1.15-38	深鉢	11層	口縁部	凸B。刻目は弱く不明瞭。		A	
Fig. 11-39 P1.15-39	深鉢	11層	口縁部	凸B。磨減が著しく刻目不明。		A	
Fig. 11-40 P1.15-40	深鉢	11層	口縁部	凸B。磨減が著しく刻目不明。		A	
Fig. 11-41 P1.15-41	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	胴部の刻目は明瞭なD字形。口縁部はヘラナデ。	D	B	
Fig. 11-42 P1.15-42	深鉢 二条凸帯	11層	胴部		D	B	
Fig. 11-43 P1.15-43	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	胴部の刻目は小さなD字型。	D	B	
Fig. 11-44 P1.15-44	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	磨減著しく刻目の形態は不明瞭。	V?	B	
Fig. 11-45 P1.15-45	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	磨減著しく刻目不明。		A	

Tab. 3 東西トレンチ(北)層毎出土遺物(3)

挿図番号 図版番号	器種	層位	部位	形態・技法	刻目	胎土	備考
Fig. 11-46 P1.15-46	深鉢 二条凸帯	11層	胴部		D	A	
Fig. 12-47 P1.15-47	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	1類。胴部凸帯の刻目は小さなV字形。	V	A	
Fig. 12-48 P1.15-48	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	磨滅が著しく、刻目は不明瞭。	DかO	A	
Fig. 12-49 P1.15-49	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	胴部凸帯の刻目は弱く不明瞭。	D?	A	
Fig. 12-50 P1.15-50	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	胴部凸帯の刻目は弱く不明瞭。		A	
Fig. 12-51 P1.15-51	深鉢	11層	口縁部	へら描きの直線文、円弧文が描かれている。		A	
Fig. 12-52 P1.15-52	浅鉢	11層	口縁部	2類。内外面に沈線が巡る。口縁部外面は丁寧なへらミガキ。		A	
Fig. 12-53 P1.15-53	浅鉢	11層	口縁部	3類。内外面ともに丁寧なへらミガキ口縁部に穿孔されている。		A	
Fig. 12-54 P1.16-54	浅鉢	11層	口縁部	1類。口縁部と肩部に沈線が巡る。口縁部外面と底部内面へらミガキ。		A	
Fig. 12-55 P1.16-55	浅鉢	11層	口縁部	1類。肩部に沈線が巡る。内外面ともにへらミガキ。		A	
Fig. 12-56 P1.16-56	壺?	11層	胴部			A	
Fig. 12-57 P1.16-57	浅鉢	11層	底部	2類。		A	
Fig. 12-58 P1.16-58	深鉢	11層	底部	4類。外面は丁寧なへらナデ。		A	
Fig. 12-59 P1.16-59	深鉢	11層	底部	2類。		B	
Fig. 12-60 P1.16-60	深鉢	11層	底部	2類。		B	
Fig. 12-61 P1.16-61	深鉢	11層	底部	1類。		B	
Fig. 12-62 P1.16-62	深鉢	11層	底部	2類。		A	

Tab. 4 東西トレンチ(北)SK-01出土遺物(1)

挿図番号 図版番号	器種	層位	部位	形態・技法	刻目	胎土	備考
Fig. 13-1 P1.17-1	深鉢	11層	口縁部	凸A。刻目は弱いV字形。外面はへらミガキ、内面はへらナデ。	V	B	外面に煤付着。
Fig. 13-2 P1.17-2	深鉢	11層	口縁部	凸A。口縁端部が外反する。	D	B	
Fig. 13-3 P1.17-3	深鉢	11層	口縁部	凸A。凸帯に刻目はない。		B	
Fig. 13-4 P1.17-4	深鉢	11層	口縁部	凸A。凸帯に刻目はない。		B	

Tab. 5 東西トレンチ(北)SK-01出土遺物(2)

挿図番号 図版番号	器種	層位	部位	形態・技法	刻目	胎土	備考
Fig. 13-5 P1.17-5	深鉢	11層	口縁部	凸A。凸帯の磨減が著しく刻目は不明。		B	
Fig. 13-6 P1.17-6	深鉢	11層	口縁部	凸A。凸帯は低く、刻目は弱い。	D	B	
Fig. 13-7 P1.17-7	深鉢	11層	口縁部	凸A。	D	A	
Fig. 13-8 P1.17-8	深鉢	11層	口縁部	凸A。凸帯上に刻目はない。		A	
Fig. 13-9 P1.17-9	深鉢	11層	口縁部	凸A。刻目は小さなD字形。	D	A	
Fig. 13-10 P1.17-10	深鉢	11層	口縁部	凸A。	D	A	
Fig. 13-11 P1.17-11	深鉢	11層	口縁部	凸A。凸帯上に刻目はない。		A	
Fig. 13-12 P1.17-12	深鉢	11層	口縁部	凸A。刻目は明瞭なD字形。	D	A	
Fig. 13-13 P1.17-13	深鉢	11層	口縁部	凸A。刻目はない。		A	
Fig. 13-14 P1.17-14	深鉢	11層	口縁部	凸A。刻目は小さなO字形。	O	A	
Fig. 13-15 P1.17-15	深鉢	11層	口縁部	凸A。刻目はない。		A	
Fig. 13-16 P1.17-16	深鉢	11層	口縁部	凸B。刻目は弱く不明瞭。		A	
Fig. 13-17 P1.17-17	深鉢	11層	口縁部	凸B。刻目は明瞭なD字形。	D	A	
Fig. 13-18 P1.17-18	深鉢	11層	口縁部	凸B。	D	A	
Fig. 13-19 P1.17-19	深鉢	11層	口縁部	凸B。	D	B	外面に煤付着。
Fig. 13-20 P1.17-20	深鉢	11層	口縁部	凸B。	V	B	
Fig. 13-21 P1.17-21	深鉢	11層	口縁部	凸B。刻目はない。		B	
Fig. 13-22 P1.17-22	深鉢	11層	口縁部	凸B。刻目はない。		B	
Fig. 13-23 P1.17-23	深鉢	11層	口縁部	凸B。刻目はない。		A	
Fig. 14-24 P1.17-24	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	2類。口縁部にはへう描文が描かれている。	O	A	外面に煤付着。
Fig. 14-25 P1.17-25	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	凸帯が磨減し刻目は不明瞭。		A	内面に煤付着。
Fig. 14-26 P1.17-26	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	胴部の凸帯は低く、刻目は不明瞭。		A	
Fig. 14-27 P1.17-27	深鉢 二条凸帯	11層	胴部		D	A	

Tab. 6 東西トレンチ(北)SK-01出土遺物(3)

挿図番号 図版番号	器種	層位	部位	形態・技法	刻目	胎土	備考
Fig. 14-28 Pl.17-28	深鉢 二条凸帯	11層	胴部		D	A	
Fig. 14-29 Pl.17-29	深鉢	11層	底部	1類。		B	
Fig. 14-30 Pl.17-30	深鉢	11層	底部	3類。		B	
Fig. 14-31 Pl.17-31	深鉢	11層	底部	2類。		B	
Fig. 14-32 Pl.17-32	浅鉢	11層	口縁部	2類。内面に沈線が巡る。		A	

Tab. 7 東西トレンチ(南)層毎出土遺物(1)

挿図番号 図版番号	器種	層位	部位	形態・技法	刻目	胎土	備考
Fig. 15-1 Pl.18-1	土師器 高坏	6層	口縁部	底部との境は不明瞭。口縁部は直線的に開く。口縁部はヨコナデ。			
Fig. 15-2 Pl.18-2	土師器 高坏	6層	脚部				
Fig. 15-3 Pl.18-3	弥生土器 甕	6層	底部	外面はハケ目。底部はあげ底状を呈す。			
Fig. 15-4 Pl.18-4	土師器 高坏	7層	脚部	短脚。裾部は大きく開く。			
Fig. 16-5 Pl.18-5	深鉢	弥生面下	口縁部	凸A。	O	B	
Fig. 16-6 Pl.18-6	深鉢	10層	口縁部	凸B。	D	A	
Fig. 16-7 Pl.18-7	深鉢 二条凸帯	10層	胴部	2類。	D	A	
Fig. 16-8 Pl.18-8	深鉢 二条凸帯	10層	胴部	2類。刻目は細かく施される。	V	A	
Fig. 16-9 Pl.18-9	深鉢 二条凸帯	10層	胴部	凸帯は低く、刻目は不明瞭。	D	A	
Fig. 16-10 Pl.18-10	深鉢 二条凸帯	10層	胴部	刻目は小さなD字形。	D	A	
Fig. 16-11 Pl.18-11	浅鉢	10層	胴部	1類。底部と口縁部の境に沈線が巡る。内外面ともにヘラミガキ。		B	
Fig. 16-12 Pl.18-12	浅鉢	10層	口縁部	1類。口縁端部は外反する。内外面ともにヘラミガキ。		B	
Fig. 16-13 Pl.18-13	深鉢	10層下	口縁部	凸A。	D	A	
Fig. 16-14 Pl.18-14	深鉢	10層下	口縁部	凸A。凸帯上に刻目はない。	D	A	
Fig. 16-15 Pl.18-15	深鉢	10層下	口縁部	凸A。磨滅が著しく、刻目は不明瞭。		A	
Fig. 16-16 Pl.18-16	深鉢	10層下	口縁部	凸A。	D	A	

Tab. 8 東西トレンチ(南)層毎出土遺物(2)

挿図番号 図版番号	器種	層位	部位	形態・技法	刻目	胎土	備考
Fig. 16-17 P1.18-17	深鉢	10層下	口縁部	凸A。磨減が著しく、刻目は不明瞭。		A	
Fig. 16-18 P1.18-18	深鉢	10層下	口縁部	凸B。	O	A	
Fig. 16-19 P1.18-19	深鉢	10層下	口縁部	凸B。	D	A	
Fig. 16-20 P1.18-20	深鉢	10層下	口縁部	凸B。	D	A	
Fig. 16-21 P1.18-21	深鉢	10層下	口縁部	凸B。刻目は小さなV字形。	V	A	
Fig. 16-22 P1.18-22	浅鉢	10層下	口縁部	3類。推定径12.6cm。外面はヘラナ デ。		A	
Fig. 16-23 P1.18-23	浅鉢	10層下	底部	2類。		A	
Fig. 16-24 P1.18-24	深鉢	10層下	底部	1類。		B	
Fig. 16-25 P1.18-25	深鉢	10層下	底部	2類。		A	
Fig. 16-26 P1.19-26	深鉢	11層	口縁部	凸A。凸帯は低く、刻目はない。		A	
Fig. 16-27 P1.19-27	深鉢	11層	口縁部	凸A。刻目は弱く不明瞭。		B	
Fig. 16-28 P1.19-28	深鉢	11層	口縁部	凸B。磨減が著しく刻目は不明。		B	
Fig. 16-29 P1.19-29	深鉢	11層	口縁部	凸B。磨減が著しく、刻目は不明瞭。		B	
Fig. 16-30 P1.19-30	深鉢 二条凸帯	11層	胴部		D	B	
Fig. 16-31 P1.19-31	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	刻目はない。		B	
Fig. 16-32 P1.19-32	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	磨減が著しく刻目は不明瞭。		B	
Fig. 16-33 P1.19-33	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	刻目はない。		B	
Fig. 16-34 P1.19-34	深鉢 二条凸帯	11層	胴部		D	B	
Fig. 16-35 P1.19-35	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	刻目は小さなD字形。	D	B	
Fig. 16-36 P1.19-36	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	磨減が著しく、刻目は不明瞭。		B	
Fig. 16-37 P1.19-37	浅鉢	11層	胴部			A	

Tab. 9 東西トレンチ(南)東群出土遺物

挿図番号 図版番号	器種	層位	部位	形態・技法	刻目	胎土	備考
Fig. 17-1 P1.19-1	深鉢	11層	口縁部	凸A。刻目は小さなD字形。	D	A	
Fig. 17-2 P1.19-2	深鉢	11層	口縁部	凸A。	D	B	
Fig. 17-3 P1.19-3	深鉢	11層	口縁部	凸B。刻目はない。		A	
Fig. 17-4 P1.19-4	深鉢	11層	口縁部	凸B。刻目はない。		A	
Fig. 17-5 P1.19-5	深鉢	11層	口縁部	凸A。刻目はない。		A	
Fig. 17-6 P1.19-6	深鉢 二条凸帯	11層	口縁部	磨滅が著しく、刻目は不明瞭。	V?	A	
Fig. 17-7 P1.19-7	深鉢 二条凸帯	11層	口縁部	刻目はない。		A	
Fig. 17-8 P1.19-8	深鉢 二条凸帯	11層	口縁部		D	B	
Fig. 17-9 P1.19-9	深鉢 二条凸帯	11層	口縁部		V	B	
Fig. 17-10 P1.19-10	浅鉢	11層	胴部	1類。口縁部と底部の境に沈線が巡る。		A	
Fig. 17-11 P1.19-11	深鉢	11層	底部	2類。		A	
Fig. 17-12 P1.19-12	深鉢	11層	底部	4類。		B	
Fig. 17-13 P1.19-13	浅鉢?	11層	底部	2類。		A	
Fig. 17-14 P1.19-14	深鉢	11層	口縁部	凸A。磨滅が著しく刻目は不明瞭。		A	
Fig. 17-15 P1.19-15	深鉢	11層	口縁部	凸B。	D	A	
Fig. 17-16 P1.19-16	深鉢	11層	口縁部	凸B。	V	A	
Fig. 17-17 P1.19-17	深鉢	11層	口縁部	凸B。刻目はない。		A	
Fig. 17-18 P1.19-18	深鉢	11層	口縁部	凸B。	V	B	
Fig. 17-19 P1.19-19	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	刻目は細かなV字形。	V	A	

Tab. 10 東西トレンチ(南)西群出土遺物(1)

挿図番号 図版番号	器種	層位	部位	形態・技法	刻目	胎土	備考
Fig. 18-1 P1.20-1	深鉢	11層	口縁部	3類。凸A。	O	A	

Tab. 11 東西トレンチ(南)西群出土遺物(2)

挿図番号 図版番号	器種	層位	部位	形態・技法	刻目	胎土	備考
Fig. 18-2 P1.20-2	深鉢	11層	口縁部	凸A。	V	A	
Fig. 18-3 P1.20-3	深鉢	11層	口縁部	凸A。刻目はない。		A	
Fig. 18-4 P1.20-4	深鉢	11層	口縁部	3類。凸B。	V	A	
Fig. 18-5 P1.20-5	深鉢	11層	口縁部	3類。凸B。	D	A	
Fig. 18-6 P1.20-6	深鉢	11層	口縁部	1類。刻目はない。内面はヘラナデ。 外面は磨減が著しく調整技法は不明。		A	SK04出土。
Fig. 18-7 P1.20-7	深鉢	11層	口縁部	凸A。刻目は小さなV字形。	V	A	
Fig. 18-8 P1.20-8	深鉢	11層	口縁部	凸B。刻目はない。		A	
Fig. 18-9 P1.20-9	深鉢	11層	口縁部	凸B。	D	A	
Fig. 18-10 P1.20-10	深鉢	11層	口縁部	凸B。	D	A	
Fig. 18-11 P1.20-11	深鉢	11層	口縁部	凸B。	D	A	
Fig. 18-12 P1.20-12	深鉢	11層	口縁部	凸B。磨減が著しく、刻目は不明瞭。	D?	A	
Fig. 18-13 P1.20-13	深鉢	11層	口縁部	凸B。	D	A	
Fig. 18-14 P1.20-14	深鉢	11層	口縁部	凸B。	D	A	
Fig. 18-15 P1.20-15	深鉢	11層	口縁部	凸B。磨減が著しく刻目は不明。		A	
Fig. 18-16 P1.20-16	深鉢	11層	口縁部	凸B。	D	A	
Fig. 19-17 P1.20-17	深鉢	11層	口縁部	2類。凸B。内外面ともにヘラナデ。	D	B	
Fig. 19-18 P1.20-18	深鉢	11層	口縁部	3類。凸B。内外面ともにヘラナデ。	V	B	
Fig. 19-19 P1.20-19	深鉢	11層	口縁部	凸B。	D	B	
Fig. 19-20 P1.20-20	深鉢	11層	口縁部	凸B。磨減が著しく刻目は不明。		B	
Fig. 19-21 P1.20-21	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	凸帯の断面台形。	D	A	
Fig. 19-22 P1.20-22	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	刻目は小さなD字型。	D	A	
Fig. 19-23 P1.20-23	深鉢 二条凸帯	11層	胴部		D	A	
Fig. 19-24 P1.20-24	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	刻目は弱く不明瞭。	D	A	

Tab. 12 東西トレンチ(南)西群出土遺物(3)

挿図番号 図版番号	器種	層位	部位	形態・技法	刻目	胎土	備考
Fig. 19-25 P1.20-25	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	口縁部外面にへら描きの文様が描かれる。	O	A	
Fig. 19-26 P1.20-26	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	凸帯が低く、刻目はない。		A	
Fig. 19-27 P1.20-27	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	破損著しく、刻目は不明。		A	
Fig. 19-28 P1.20-28	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	刻目は小さなV字形。	V	B	
Fig. 19-29 P1.20-29	深鉢 二条凸帯	11層	胴部	刻目はない。		B	
Fig. 19-30 P1.21-30	浅鉢	11層	口縁部	1類。口縁端部が強く外反する。		A	
Fig. 19-31 P1.21-31	浅鉢	11層	口縁部	2類。口縁端部の内外面に沈線が巡る。		B	
Fig. 19-32 P1.21-32	深鉢	11層	胴部	へら描きの円弧文。		A	
Fig. 19-33 P1.21-33	深鉢	11層	底部	1類。		A	
Fig. 19-34 P1.21-34	深鉢	11層	底部	2類。		A	
Fig. 19-35 P1.21-35	深鉢	11層	底部	2類。		A	
Fig. 19-36 P1.21-36	深鉢	11層	底部	2類。		A	
Fig. 19-37 P1.21-37	深鉢	11層	底部	2類。		B	
Fig. 19-38 P1.21-38	深鉢	11層	底部	2類。		B	
Fig. 19-39 P1.21-39	深鉢	11層	底部	3類。		B	

Tab. 13 出土地点不明遺物

挿図番号 図版番号	器種	層位	部位	形態・技法	刻目	胎土	備考
Fig. 20-1	深鉢		口縁部	凸A。刻目はない。		A	
Fig. 20-2	深鉢		口縁部	凸B。	V	A	
Fig. 20-3	深鉢		口縁部	凸B。	V	B	
Fig. 20-4	深鉢		口縁部	凸B。		B	
Fig. 20-5	深鉢		口縁部	凸B。		B	
Fig. 20-6	深鉢 二条凸帯		胴部		O	A	

## 第4章 弥生時代以降の調査（第25次調査）

### 第1節 調査の方法

第22次調査による確認調査により、弥生時代以降の遺跡の範囲を確認することができた。その範囲は4ライン以東である。ちょうど4ラインより東側は西側より一段高くなって微高地となっている。その微高地上に弥生時代の遺構が分布することが確認されたのである。従って、本調査の範囲は4ライン以東の約600㎡を対象とした。

本調査対象範囲には、第7・9次調査で円形周溝墓などを調査した範囲を含んでいる。第7・9次調査地点は、円形周溝墓や木棺墓を発掘調査した後、遺構の保存のため川砂を用いて丁寧に埋め戻しているが、今回行う周辺部の調査との関連を見るため再度掘り起こした。

本調査は、確認調査により明らかとなった弥生時代の遺構面までは重機によって掘り下げることとした。弥生時代の遺構面は、2面存在することが確認調査で判明している。この2層の遺構面については、第9次調査では、上層が弥生時代後期（V様式）以降と下層が中期（IV様式）の遺構面であることが確認されている。こうしたことから、重機掘削は上層部（基本土層第7層）直上まで掘り下げ、その後はすべて人力掘削によって調査を行なった。

重機掘削が完了した時点で、先ず第7・9次調査地点の川砂を取り除き、遺構の状況及び調査区周囲に残る土層を観察して上層部の遺構面検出の参考とすることとした。

上層部の遺構は広い調査区に散在するといった状況で検出された。遺構の遺存状態は悪く、既に大きく削平されている遺構が大半であった。

上層部の遺構検出を完了した後、調査区内に設定した10m方眼のグリットにより各遺構の実測を行った。また遺構外の出土遺物については、グリット単位で取り上げている。

グリットの名称は、南北のラインについてはローマ数字で、東西ラインについてはアルファベットで表した。また、グリットの名称については、北西の交点の名称（例A-1）を用いてそのグリットの名称とした。

下層部の調査は、第7層を人力で掘り下げて検出した。下層面の遺構は、調査区全域にわたって検出された円形周溝墓を中心に、僅かの土坑が検出された。調査区の北側には円形周溝墓と方形周溝墓が重複して検出されたが、その中で方形周溝墓は西側の調査区外に延びている事が判明したため、調査区の西側に拡張して全体を検出することとした。

### 第2節 調査の概要

第25次調査地点の遺構検出の概要について述べておきたい。上層部検出の遺

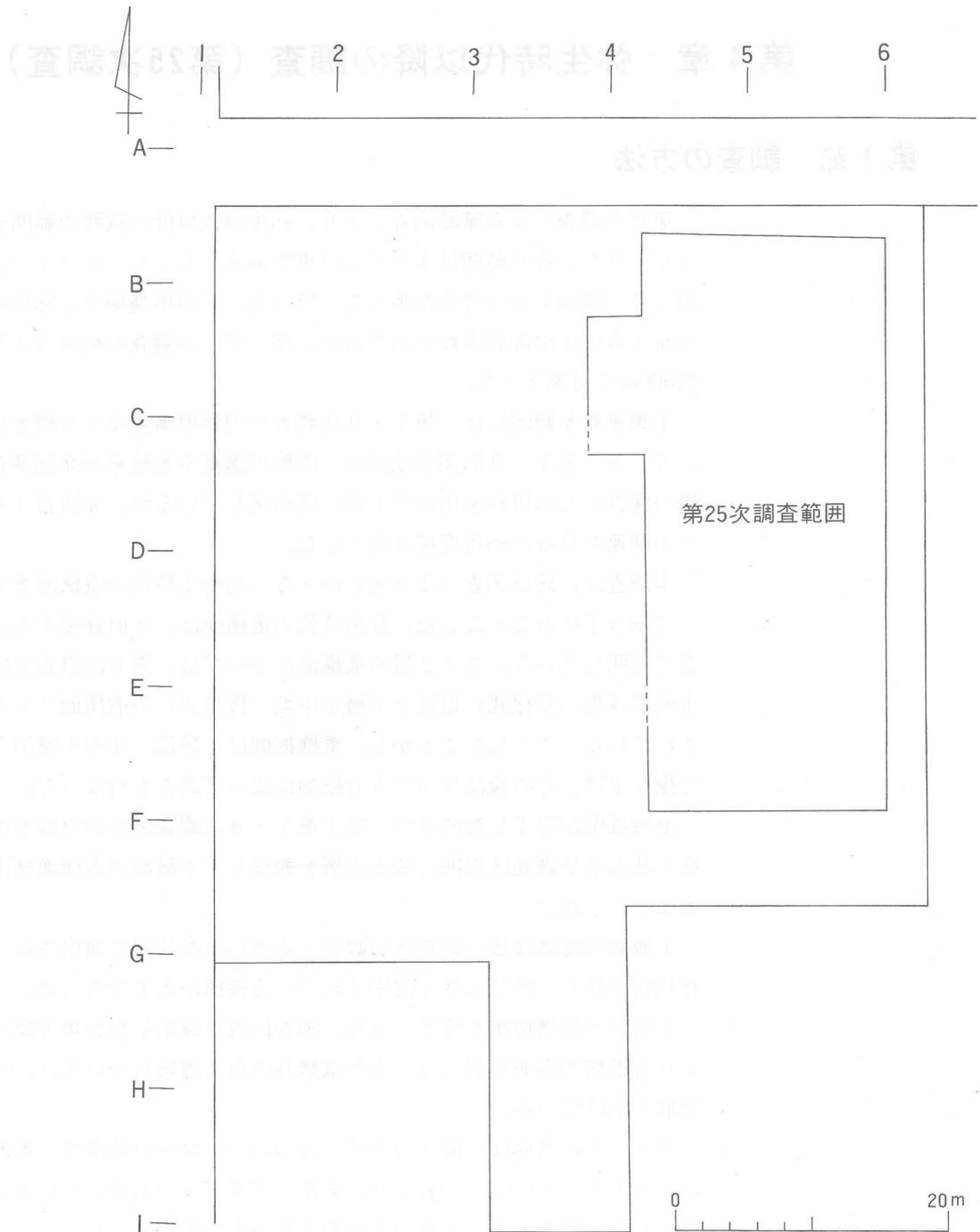


Fig. 22 調査区設定図

構には、弥生時代後期の壺棺と古墳時代前期の土坑などがある。壺棺は、明確に壺棺と判断されるものの他、遺構の遺存状態が悪いため壺棺と判断するのを躊躇した遺構がある。明確に壺棺と考えられる遺構は3基（壺棺1～3）ある。調査区の北端に位置する壺棺2と調査区中央部に位置する壺棺1、調査区南西部に位置する壺棺3は20m程の間隔をおいて検出され、集中する傾向はない。このような壺棺の分布状況から見て、調査区の北側に続いて広がっているものと推定され、今回の調査地点の南側で実施された第11次調査でも壺棺1基が検

出されていることから、壺棺主体の墓域が広範囲にわたっていることが判る。第11次調査検出の壺棺は二重口縁の壺型土器を用いたもので、今回の調査検出の壺棺1と同じ弥生時代後期後半所産である。

壺棺1は、中でも最も遺存状態が良好で、壺棺の埋設状態がよく判る資料である。壺棺には二重口縁の壺型土器を用いており、口の部分は胴部以上を打ち欠いた別の壺型土器を蓋として利用している。壺棺2は、遺存状態が悪く胴部以外は出土していない。壺棺3は壺棺1と同様に別の壺型土器を蓋として利用している。

このほか壺棺の可能性のある遺構として、SK08がある。SK08は土坑の上部が大きく削平されて遺存状態が極めて悪いため、判断が困難であるが土坑内の壺型土器の出土状態から壺棺の可能性はある。

古墳時代の遺構は、布留式の土器を出土するSK06など少数ながら検出され、遺構外出土遺物にも若干含まれていることから、古墳時代にいたっても遺跡が存続していたことが判る。しかし、全体から見ると少数であることから、古墳時代以降の遺跡については、今回の調査区が遺跡の中心ではないと考えられる。第11次調査地点では古墳時代以降の遺跡の範囲が東側に移動しており、その原因として「自然地形の微妙な変化に対応したもの」と推定している。

下層部の遺構には、円形周溝墓4基、方形周溝墓2基のほか少数の土坑と小穴がある。円形周溝墓は第7・9次調査検出の円形周溝墓を含めると5基になる。円形周溝墓の分布状況を見てみると、北から円形周溝墓2、円形周溝墓1、第7・9次調査検出の円形周溝墓、円形周溝墓4、円形周溝墓3の順で並んで検出され、円形周溝墓間では重複していない。またこれらの円形周溝墓は南北に長く分布しており、南北方向にはまだ広がると考えられるが、東西方向への広がりには認められない。恐らく、南北方向に伸びている微高地の制約された範囲に構築されたものと考えられる。円形周溝墓の時期については、円形周溝墓1、円形周溝墓4、第7・9次調査検出の円形周溝墓が弥生時代後期後半（V様式）の遺物を伴っている。円形周溝墓2・3については共伴遺物がなく構築時期が明らかではないが、検出面から判断して他の円形周溝墓と同時期の可能性が高い。

これらの円形周溝墓は上部が既に削平されており、主体部は遺存していない。

方形周溝墓は2基が検出された。いずれも円形周溝墓1と切り合い関係にあり、古い方から方形周溝墓2、円形周溝墓1、方形周溝墓1の順となる。方形周溝墓2は第7・9次調査検出の円形周溝墓とも切り合っている。方形周溝墓2は、隅丸形状を呈しており、東南の隅が陸橋部となっている。出土遺物は周溝内から弥生時代中期後半の遺物が出土している。

方形周溝墓1は、円形周溝墓を切って、調査区外に伸びていた。調査区を西側に拡張したところ、周溝墓の西側半分は遺存していなかった。遺物が出土していないため時期は特定できない。この他の遺構として、円形周溝墓1の北側に伸びるSD02があるが、周溝墓の可能性はない。

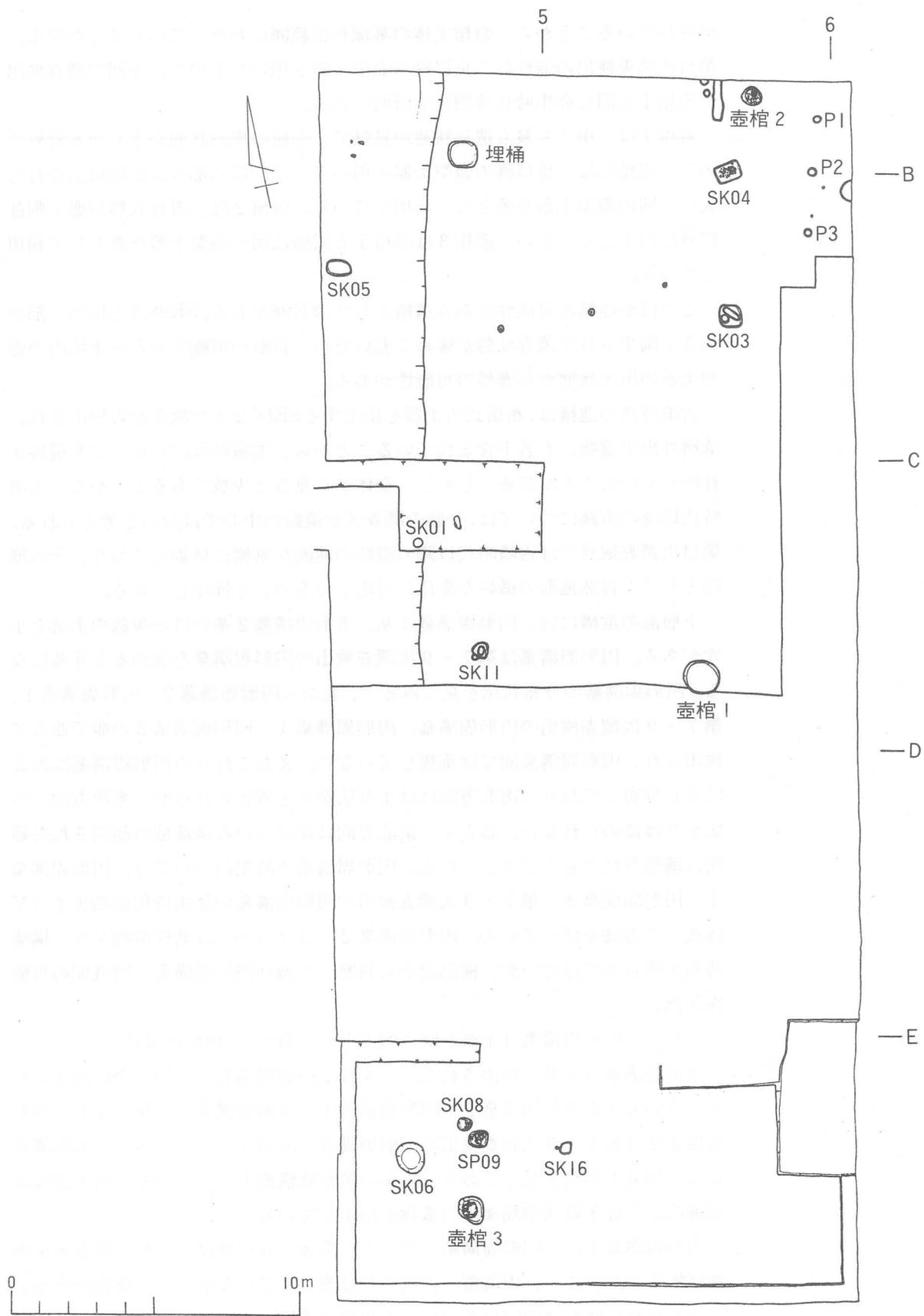


Fig. 23 全体図(上層遺構)

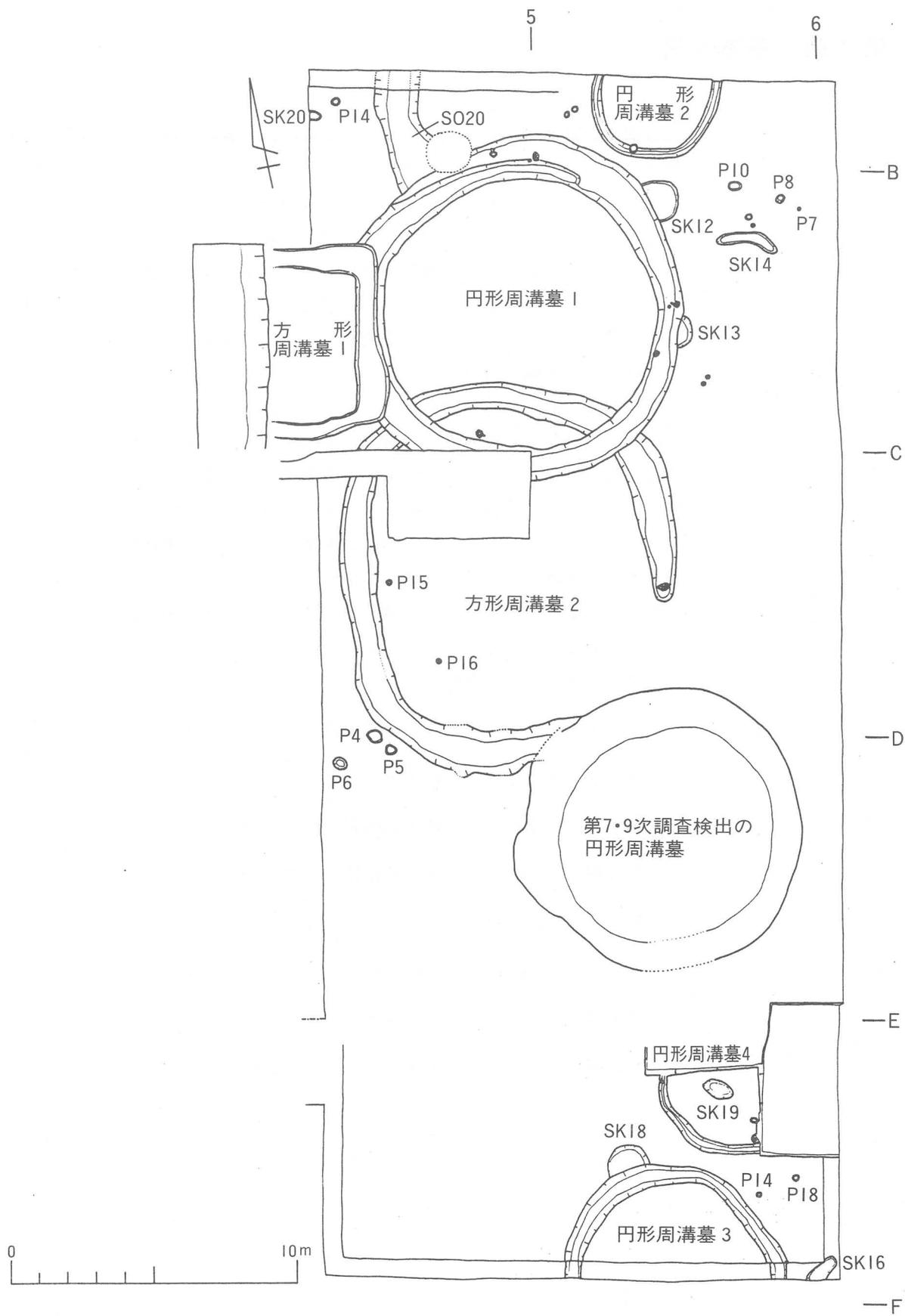


Fig. 24 全体図(下層遺構)

### 第3節 基本土層

第25次調査地点の土層の堆積は、安定した微高地上の堆積を示している。遺物包含層と遺構面について説明すると、中世の包含層(第5層)、古墳時代の包含層(第6層)、弥生時代の包含層(第7層)の順に堆積が見られる。これらの包含層は調査区内全域に存在する。弥生時代の包含層は、主に弥生時代中期後半の遺物を出土する。今回の調査での上層部の調査は、この弥生時代の包含層の上面で行っている。この上層部の調査では、弥生時代後期後半(V様式)以降の遺構と遺物を検出した。そして、下層部の調査はこの弥生時代の包含層を掘り下げたところ(第8層上面)で実施した。その結果、主に弥生時代中期後半(IV様式)の遺構と遺物を検出した。

調査区内の土層の堆積状態を見てみると、中世の遺物包含層である第5層、古墳時代の遺物包含層である第6層は、周囲の各壁に堆積が認められるが、弥生時代の遺物包含層の第7層と弥生時代中期後半の遺構面に当たる第8層は、西壁には存在していない。この第7・8層については、南壁の西端では次第に下がって消えていき、その上に第10層が堆積をしている。第10層は第22次調査の基本土層第10層のことで、低地に堆積する土層である。このことから、調査区の西端部分では、弥生時代の遺構面が存在する微高地が緩やかに西に向かって落ちていることがわかる。

次に基本土層について説明しておきたい。

第1層	耕作土	オリーブ黒色土(5Y3/2)
第2層	床土I	黄褐色砂質土(2.5Y/5/4)
第4層	床土II	黄褐色砂質土(2.5Y5/6)
第5層	(中世)	黄灰色粘質土(2.5Y5/1)
第6層	(古墳時代)	灰色粘質土(5Y4/1)
第7層	(弥生時代)	褐灰色粘質土(10YR4/1)
第8層		灰黄褐色土(10YR5/2)
第10層		灰オリーブ色土(5Y4/2)

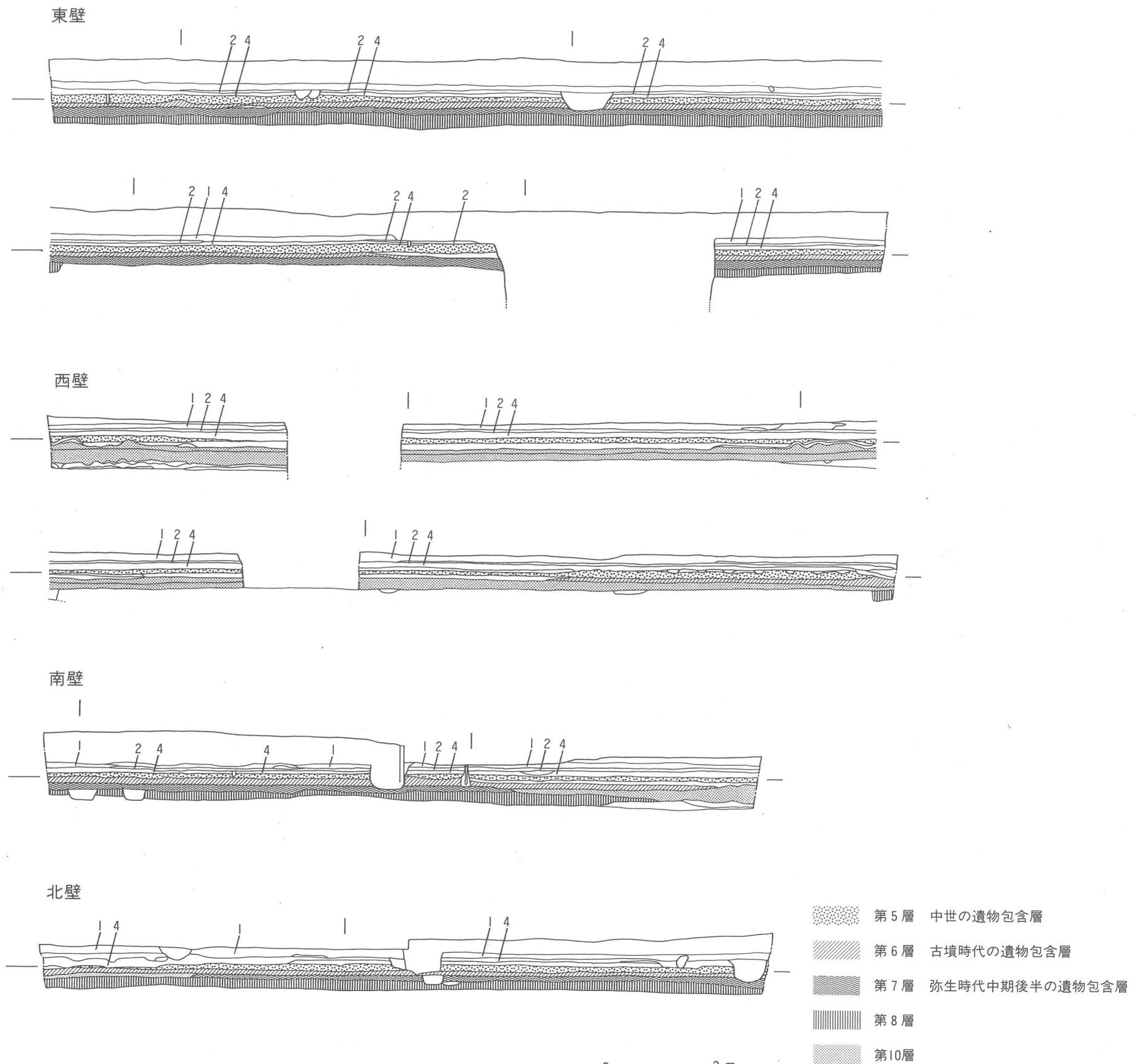


Fig. 25 土層図

## 第4節 検出遺構と遺物

### 上層部の調査

第25次調査では、上下2層の遺構面の存在が確かめられた。上層面(第1面)では、壺棺や小規模な土坑が発見されているが、その分布状態をみると、調査区の北部と南部に分かれていることがわかる。しかし壺棺を見てみると、3基が集中することなく分布している。上層部検出の遺構の時期は、壺棺が弥生時代後期後半(V様式)、土坑は古墳時代前期(布留式)が中心となっている。

弥生時代の壺棺墓については、調査区の中央部で行った第9次調査において中期の壺棺墓1期が検出されているほか、調査区の南側で実施した第11次調査では後期後半の壺棺墓が1期検出されている。こうした壺棺墓の検出状況を見てみると、今回検出した後期後半の時期に限った場合集中する傾向は認められない。また、古墳時代前期の布留式期についても同様に密な分布状況は示していない。次に今回検出した上層部の遺構について説明する。

### (土 坑)

SK03

本遺構は、調査区の北東部の土坑群の中に位置する上層部の遺構で、一辺が76cmの方形を呈している。土坑の上部は既に削平されているため遺存状態は悪い。現存の深さは6cm程度である。土坑の底面はほぼ平坦で、その底部から甕形土器などが出土したが、土坑上部が削平されているため1部が残っているだけとなっている。

出土遺物の内図示できたものは、甕形土器の口縁部の一点だけである。この甕形土器は口縁部から肩部にかけて遺存する。口縁部は内湾気味に立ち上がり、

口縁部の内側は丸く仕上げられている。胴部は球形を成すと考えられる。口縁部外面から肩部にかけてはヨコナデ、胴部内面はヘラナデが施されている。布留式土器と考えられる。

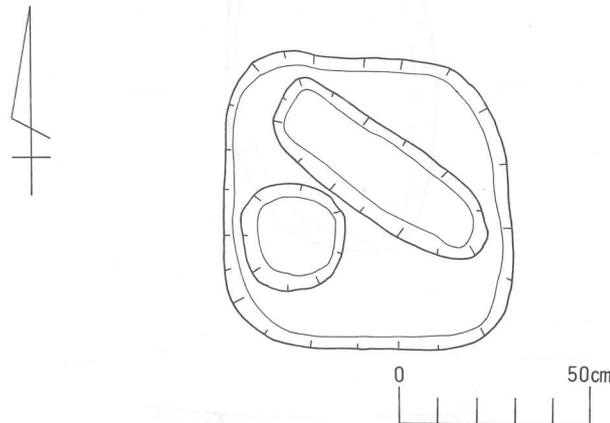


Fig. 26 SK03実測図

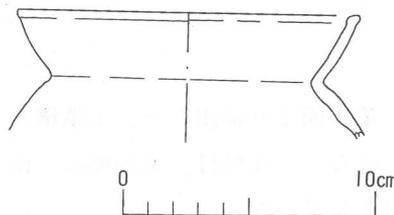


Fig. 27 SK03出土遺物

S K 0 4

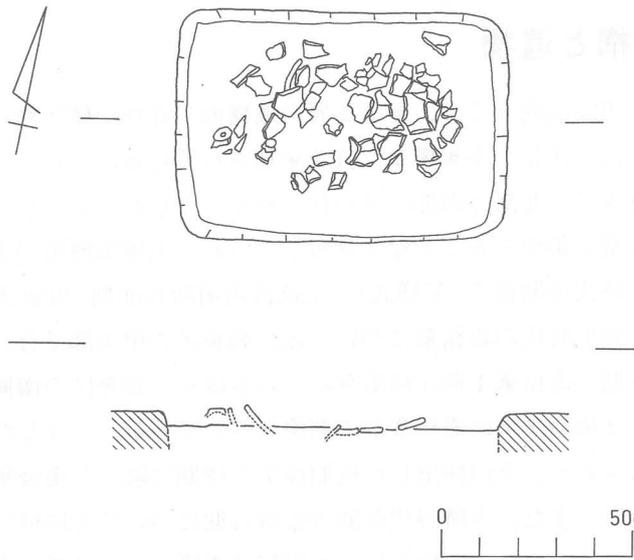


Fig. 28 SK04実測図

本遺構は、第1面の調査区北東部より検出した。規模は東西86cm、南北62cmの長方形を呈しており、深さは6cmを測る。土坑の内部から大型の壺形土器の破片が多数出土したが、これらは同一個体の破片とみられる。しかし胴部上半から口縁部にかけて

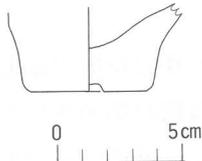


Fig. 29 SK04出土遺物

の破片は含まれていない。出土状態から見て壺棺の可能性もある。

出土遺物で図示できたのは底部のみとなっている。1は、壺形土器の底部。器面は磨滅が著しく調整技法等は不明。

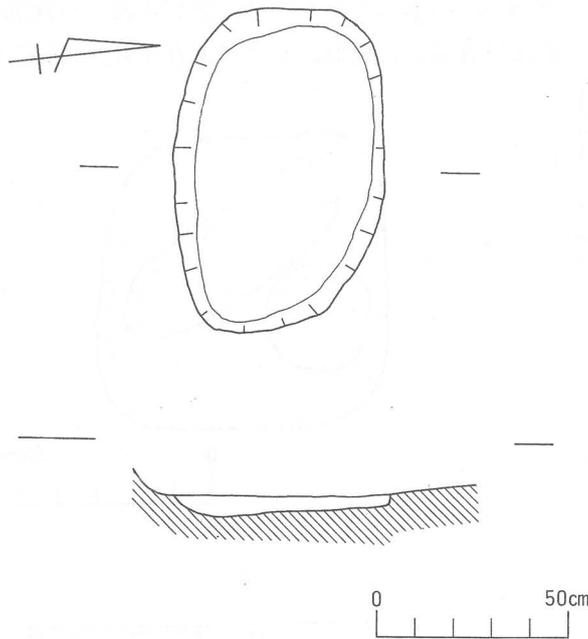


Fig. 30 SK05実測図

S K 0 5

第1面より検出した、本遺構と方形周溝墓1と重複関係にあるが新旧は明らかではない。規模は、東西95cm、南北56cm、深さ6cmの浅い土坑である。遺物は出土していない。

S K 0 6

本遺構は、第1面の調査区南西部より検出した。土坑の規模は、東西95cm、南北110cm、深さ70cmである。土坑の壁面は急角度で立ち上がり、底面は平坦となっている。内部から壺形土器や高杯形土器などが出土している。これらの出土遺物は土坑の底面から出土したものではなく、土坑の埋没過程で入り込んだと考えられる。

出土遺物の内図示できたものは、壺形土器(1)と高杯(2)の2点である。1は甕形土器。ほぼ完全な状態で出土している。胴部は球形を呈し、口縁部は「くの字」状に外反する。外面は全面に縦方向のハケ調整が施されている。口縁部の外面はハケ調整の後にヨコナデを施すが、内面については横方向のハケ調整のままとなっている。胴部の内面はヘラナデ調整が施されている。胴部外面の全体に黒く煤が付着しており、煮沸用に供されたことがわかる。2は、高杯形土器。底部との境は不明瞭で、いったん内湾気味に立ち上がるが、中程から外反気味に開く。内外面ともヨコナデを施している。1と2はともに布留式の土器である。

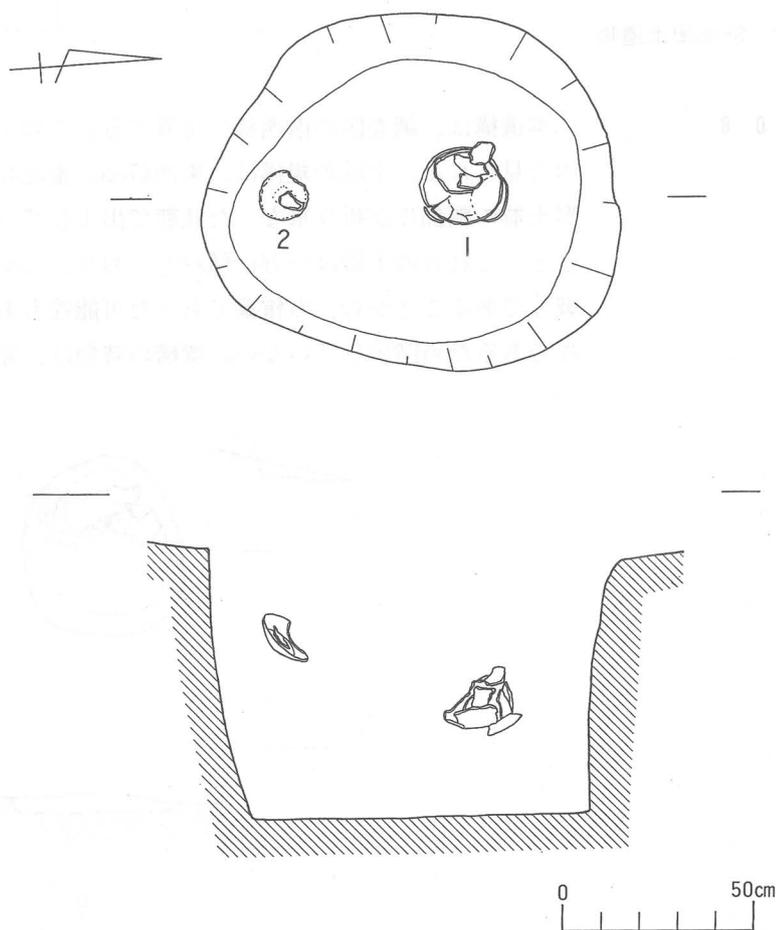


Fig. 31 SK06実測図

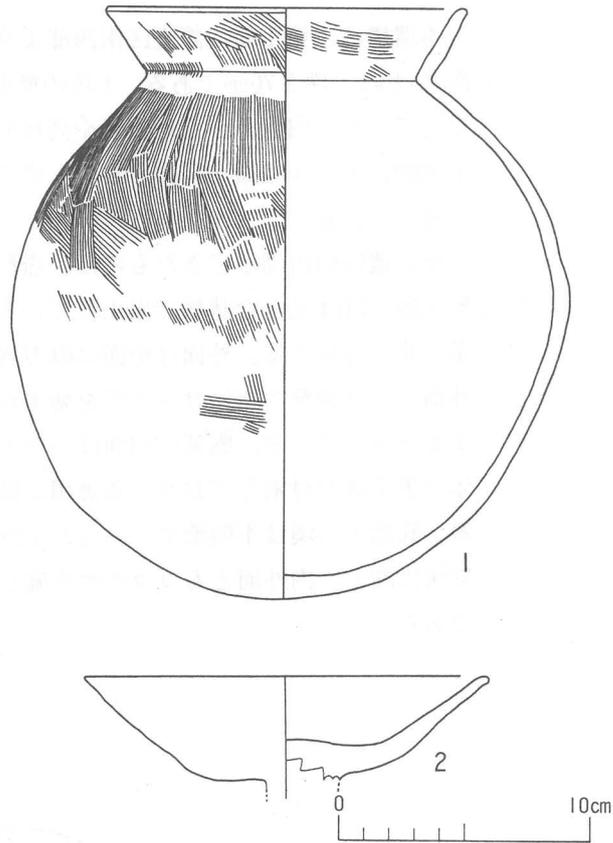


Fig. 32 SK06出土遺物

**S K 0 8**

本遺構は、調査区の南西部に位置する。この上部は既に大きく削平されたものと見られる。土坑の規模は、東西47cm、南北43cm、深さ5cmで、底面から壺形土器の胴部片が折り重なった状態で出土している。出土状態を詳しくみると、これらの土器は一方に傾斜しており、しかも同一個体の大型壺形土器の破片であることから、壺棺墓であった可能性もある。出土遺物はいずれも胴部片であるため図示していない。遺構の時期は、弥生時代後期と考えられる。

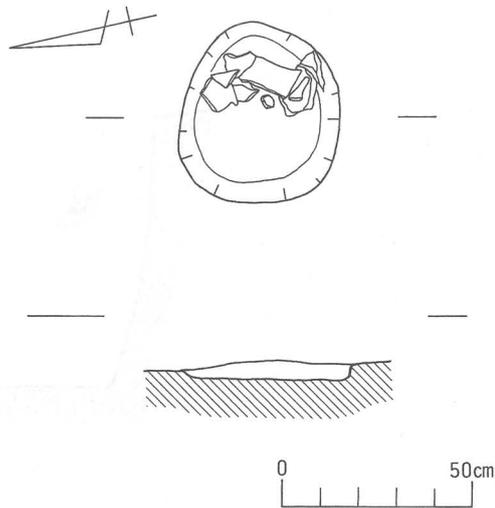


Fig. 33 SK08実測図

SK09

本遺構もSK09などとともに調査区南西部から検出された。土坑の規模は、東西64cm、南北56cm、深さ15cmである。平面形態は隅丸方形を呈している。土坑の底面はやや東側に傾斜している。土坑の内部から大型の鉢形土器(1)と壺形土器の底部(2)などが出土している。

1は、鉢形土器。形態は、平底の底部から大きく上方に開き、中位やや上か

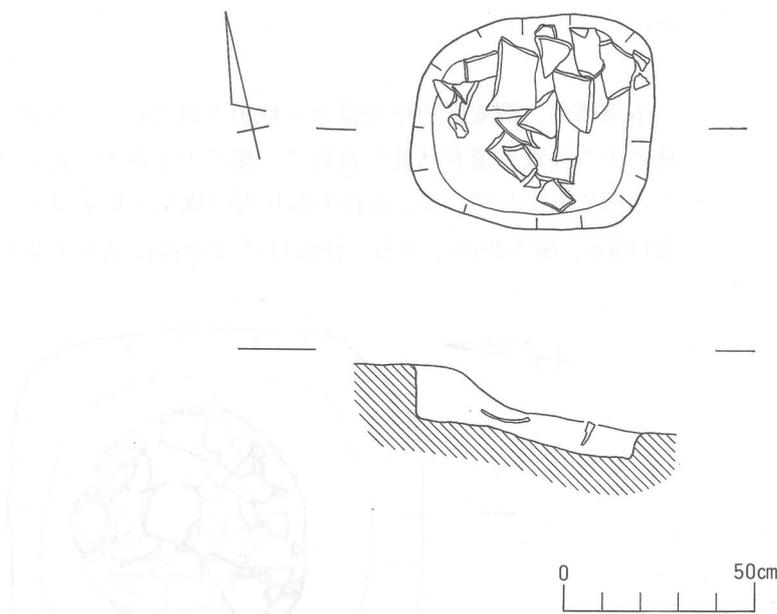


Fig. 34 SK09実測図

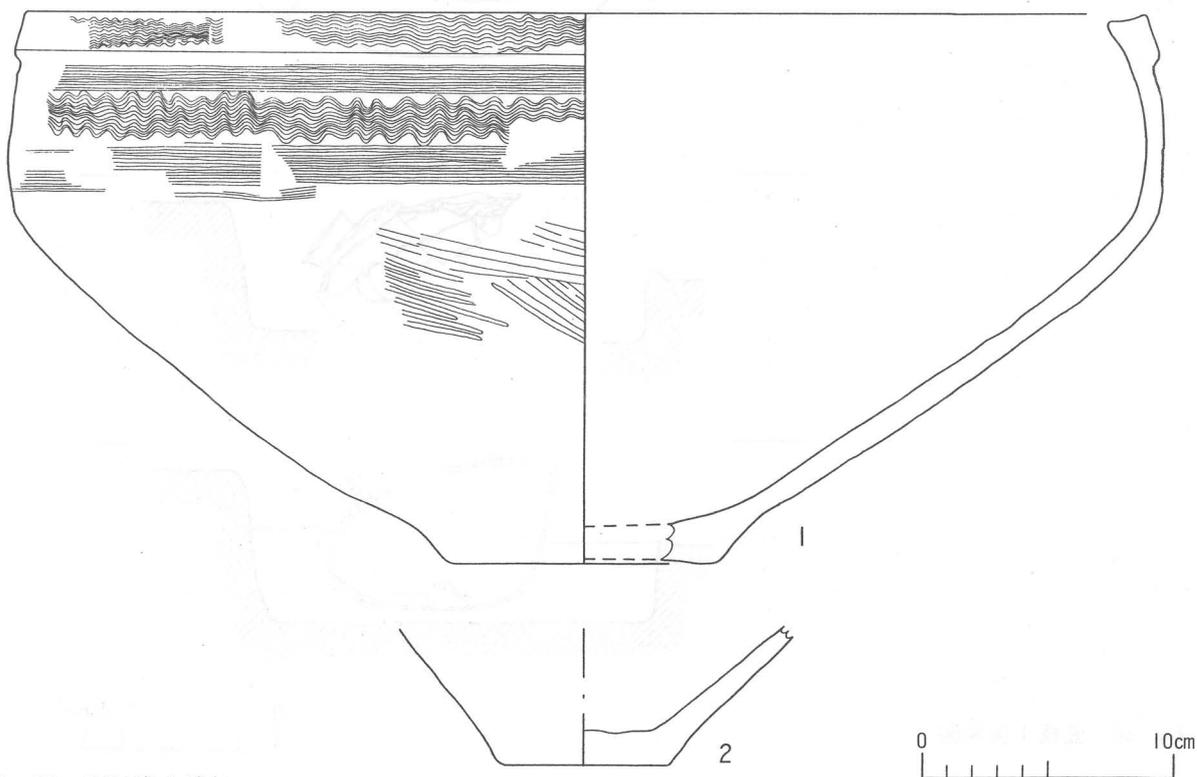


Fig. 35 SK09出土遺物

らは内湾気味にほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は段状口縁を呈し、口縁端部は平坦面を成す。文様は、胴部から口縁部にかけて楕円描きの波状文と直線文を交互に描いている。胴部の中程にはタタキ目が残るが、下半部はそれをヘラナデにより消している。2は壺形土器の底部。底部から直線的に立ち上がる。器面調整は、外面がヘラミガキ、内面がヘラナデを施している。

遺構の時期は、鉢形土器からみて、弥生時代中期後半（IV様式）と考えられる。

(壺 棺)

壺 棺 1

本遺構は、調査区の中央部より検出されている。今回の調査で検出した壺棺墓の中では最も遺存状態が良好で、掘り方が深かったためか内部の壺棺は完全な状態で出土している。壺棺の掘り方は隅丸方形を呈し、規模は東西108cm、南北110cm、深さ40cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦面を成

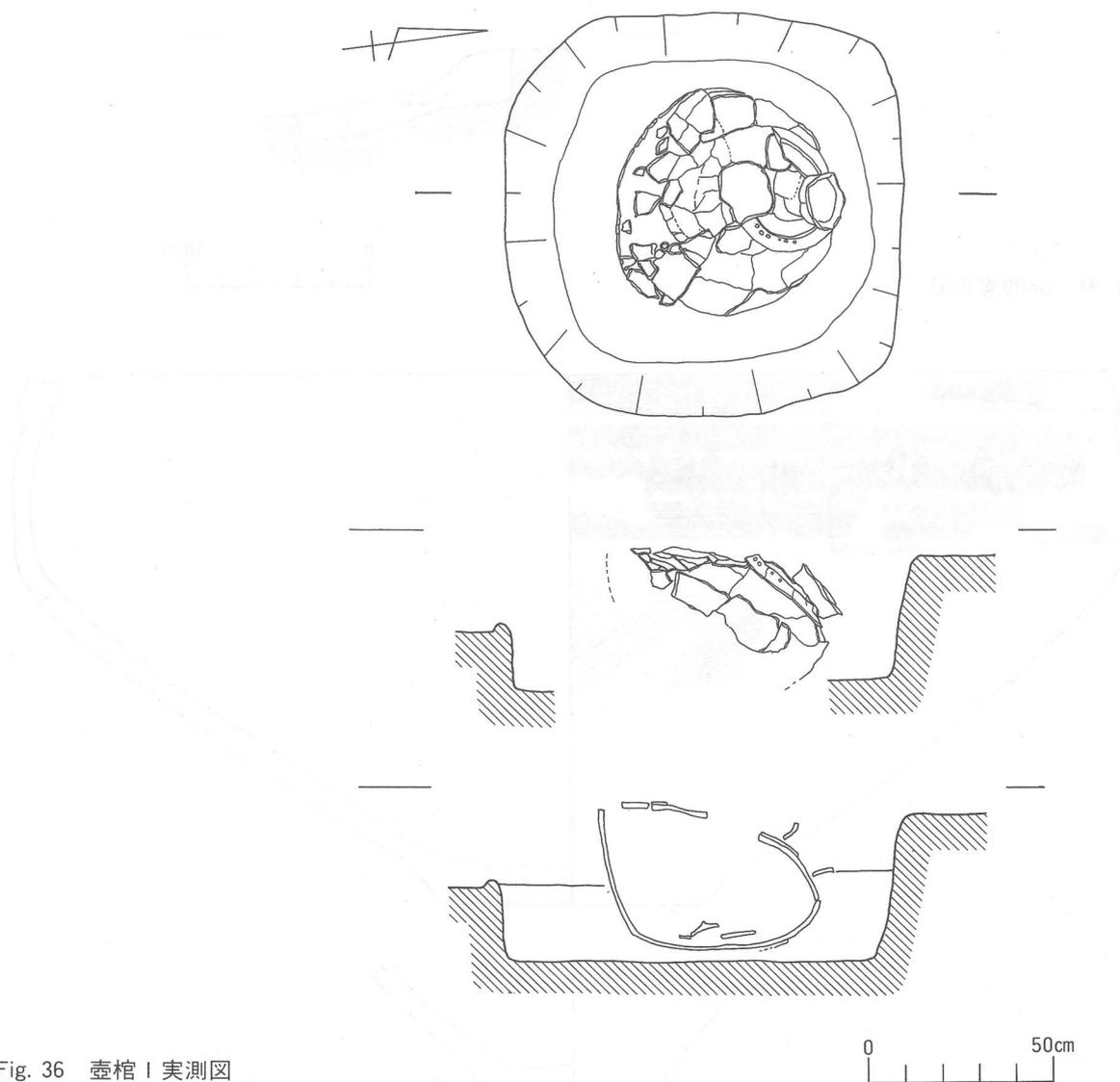


Fig. 36 壺棺 I 実測図

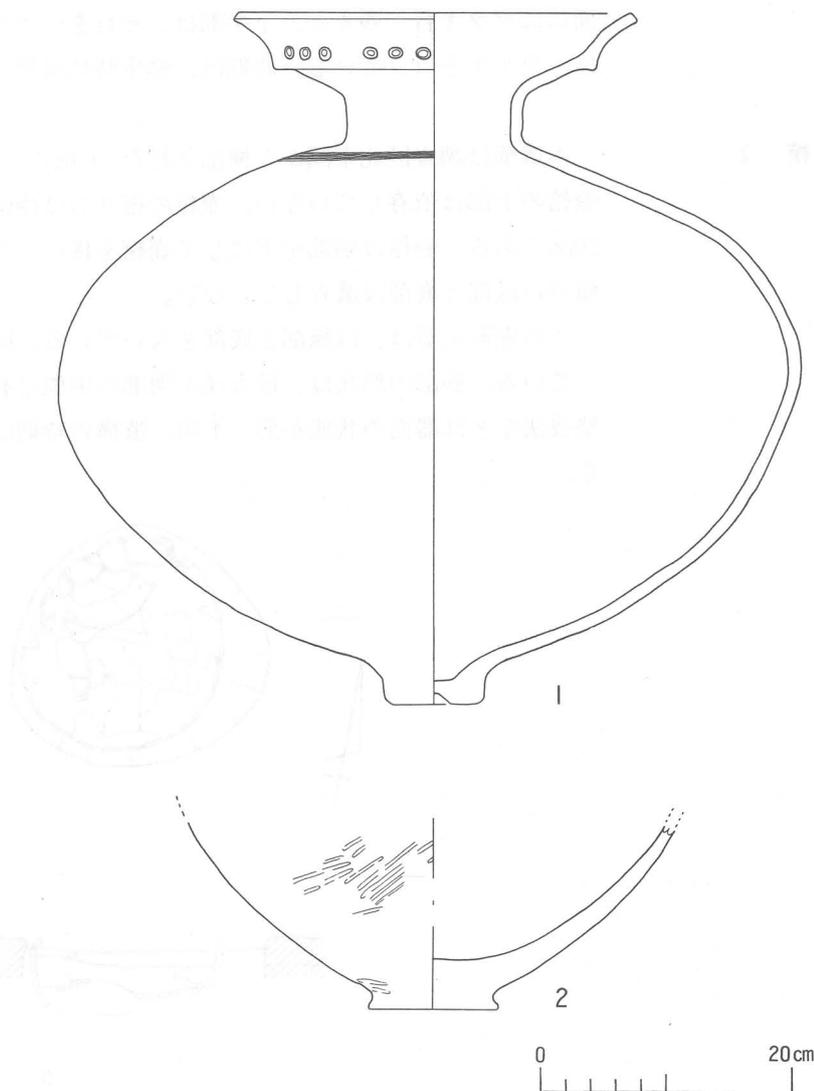


Fig. 37 壺棺 I 出土遺物

している。

壺棺は、南北方向に傾けた状態で設置されている。壺棺の口の部分は、同じ壺形土器の頸部より上を打ち欠いたものを逆さにかぶせて塞いでおり、同じ壺形土器の口縁部が蓋の役割をしていた。発掘調査した時点では、この蓋はやや北側にずれていたが、出土状態からみて蓋として利用されていたことは確実である。また、蓋には別の壺形土器の底部片(2)も用いて塞ぐ工夫をしている。壺棺の内部に骨などは遺存していなかった。

1は、壺棺に用いられた二重口縁の壺形土器。胴部は、中位に最大径をもち、やや偏平化した球形を呈している。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部に至って大きく外反する。文様は、口縁部に3個1組の竹管文を巡らしているほか、胴部と頸部の境あたりに櫛描きの直線文を巡らしている。胎土は、生駒西麓産の粘土を用いている。2は、壺形土器の底部。壺棺の蓋として利用されていた。

形態は、底部から内湾しながら立ち上がり、球形の胴部を成している。胴部外面にはタタキ目が残るが、下半部は、それをへラナデにより消している。内面はへラナデを行っている。時期は、弥生時代後期（V様式）である。

## 壺 棺 2

本遺構は調査区北東隅から検出された。土坑の上部は大きく削平されており、壺棺の上部は依存していない。壺棺の掘り方は径65cmの円形を呈し、深さは約20cmである。壺棺は胴部を下にして壺棺を横にした状態で設置されていた。壺棺の口縁部と底部は遺存していない。

この壺形土器は、口縁部と底部を欠いている。胴部についても約半分が欠損している。胴部の形状は、最大径を胴部の中位に有する球形を呈している。調整技法などは器面の状態が悪く不明。遺構の時期は、弥生時代後期と考えられる。

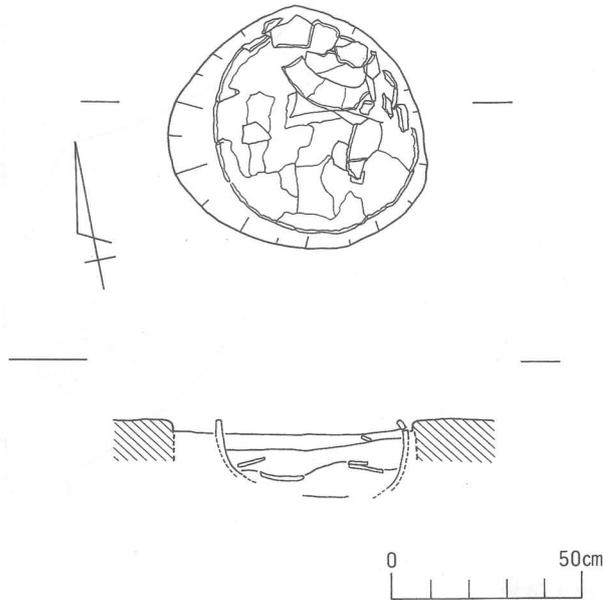


Fig. 38 壺棺 2 実測図

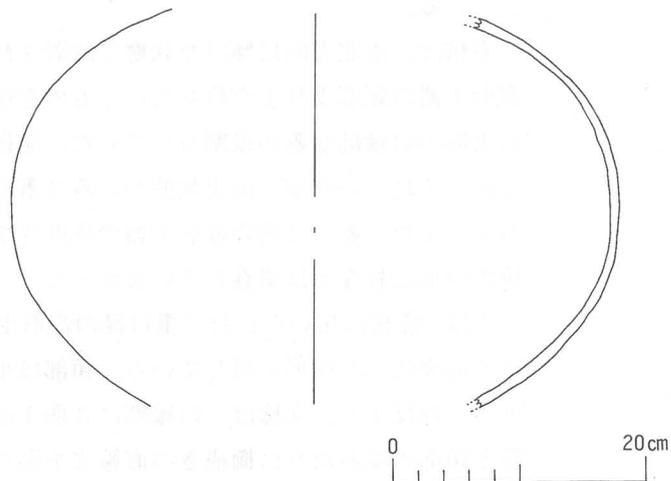


Fig. 39 壺棺 2 出土遺物

壺 棺 3

調査区南西部から検出された。壺棺の掘り方は、東西85cm、南北95cm、深さ16cmの規模である。他の遺構と同様に上部が大きく削平されているため、壺棺の遺存状態は極めて悪い。壺棺は胴部を下にして、口縁部をやや斜め上に設置されていたが、胴部は土圧のため内側に押しつぶされていたために残っていた。壺棺の設置角度については、壺棺1のような傾きをもっている。口縁部の破片が見あたらないことから、埋設するにあたり口縁部は取り除かれていた可能性がある。

1は、口縁部を欠いているが、その他はよく遺存している。この壺形土器は最大径を胴部中位に有する球形を呈している。頸部には断面三角形の突帯を巡らしている。器面の状態が悪く、調整技法は不明瞭であるが、胴部下半部には丁寧なヘラミガキが施されている。2は、壺形土器の底部。底部から大きく開きながら立ち上がる。外面は風化が著しく調整技法は不明瞭であるが、内面については細かいハケ目が残る。蓋として利用されていた可能性がある。時期は弥生時代後期と考えられる。

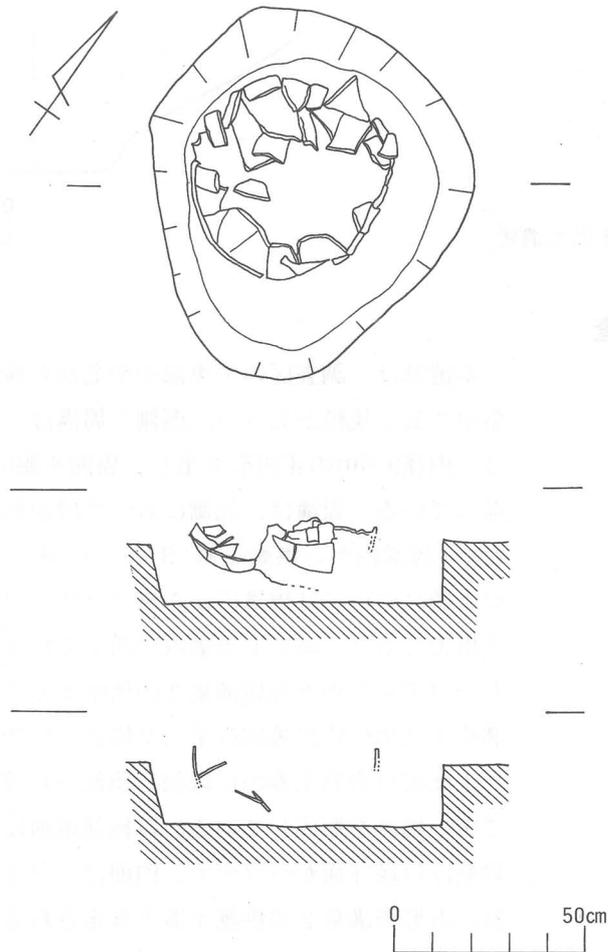


Fig. 40 壺棺3実測図

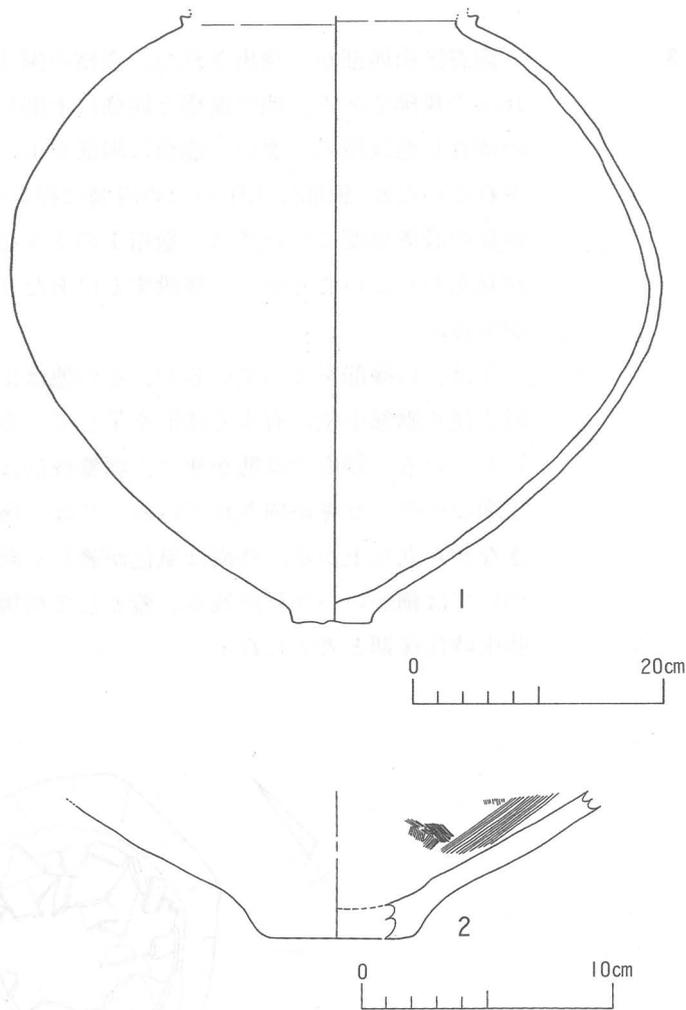


Fig. 41 壺棺 3 出土遺物

**下層部の調査**  
**(周溝墓)**  
**円形周溝墓 1**

本遺構は、調査区の中央部やや北から検出された。今回検出された円形周溝墓中で最も規模が大きい。西側の周溝は、方形周溝墓 1 に切られている。規模は、内径 9.5m の正円形を呈し、周囲を幅 0.8~1.48m、深さ 20~44cm の周溝が巡っている。周溝は、北側において段が形成されている。主体部は遺存していない。周溝内から供献土器 (3・4・8・9) が良好な状態で出土した。2 の広口壺形土器については周溝内から出土せず、方形周溝墓 2 と重複している部分からの出土であり、時期も周溝内の出土遺物より古く、むしろ方形周溝墓 2 の時期と一致するため方形周溝墓 2 の供献土器である可能性がある。従って、円形周溝墓 1 は弥生時代後期後半 (V 様式) の時期と考えられる。

1 は広口壺形土器の口縁部。頸部から強く外反し、口縁端部を下方に拡張して広い端面を形成している。口縁部端面には 3 条の凹線を巡らしている。器面調整は口縁外面がヘラナデ、内面はヘラミガキを施している。2 は広口壺形土器。方形周溝墓 2 の供献土器と推定される。胴部中に穿孔されている。胴部は中位やや下に最大径がある。頸部から緩やかに外反するが、口縁部に至って強く外反する。口縁端部は下方にやや拡張され端面を形成している。文様は櫛

描きの波状文と直線文を胴部中位から頸部にかけて施している。3は小型の短頸壺。胴部の中程に穿孔がある。器面調整は胴部外面がヘラミガキ、口縁部は内外面ともにナデを行っている。4は長頸壺。算盤形の胴部から直線的に外傾する口縁部を有する。胴部外面はヘラミガキ、口縁部はヨコナデを行なっている。5・6は壺形土器の底部。7は甕形土器の口縁部。口縁部はくの字状に外反する。胴部の外面には斜め方向のタタキ目が施されている。8は完形の甕形土器。胴部下位に穿孔がある。口縁部はくの字状に外反する。胴部外面にはタタキ整形が行われている。9は甕形土器。最大径が胴部中位やや上にある。口縁部はくの字状に外反する。胴部外面はタタキ整形を行った後下半部について

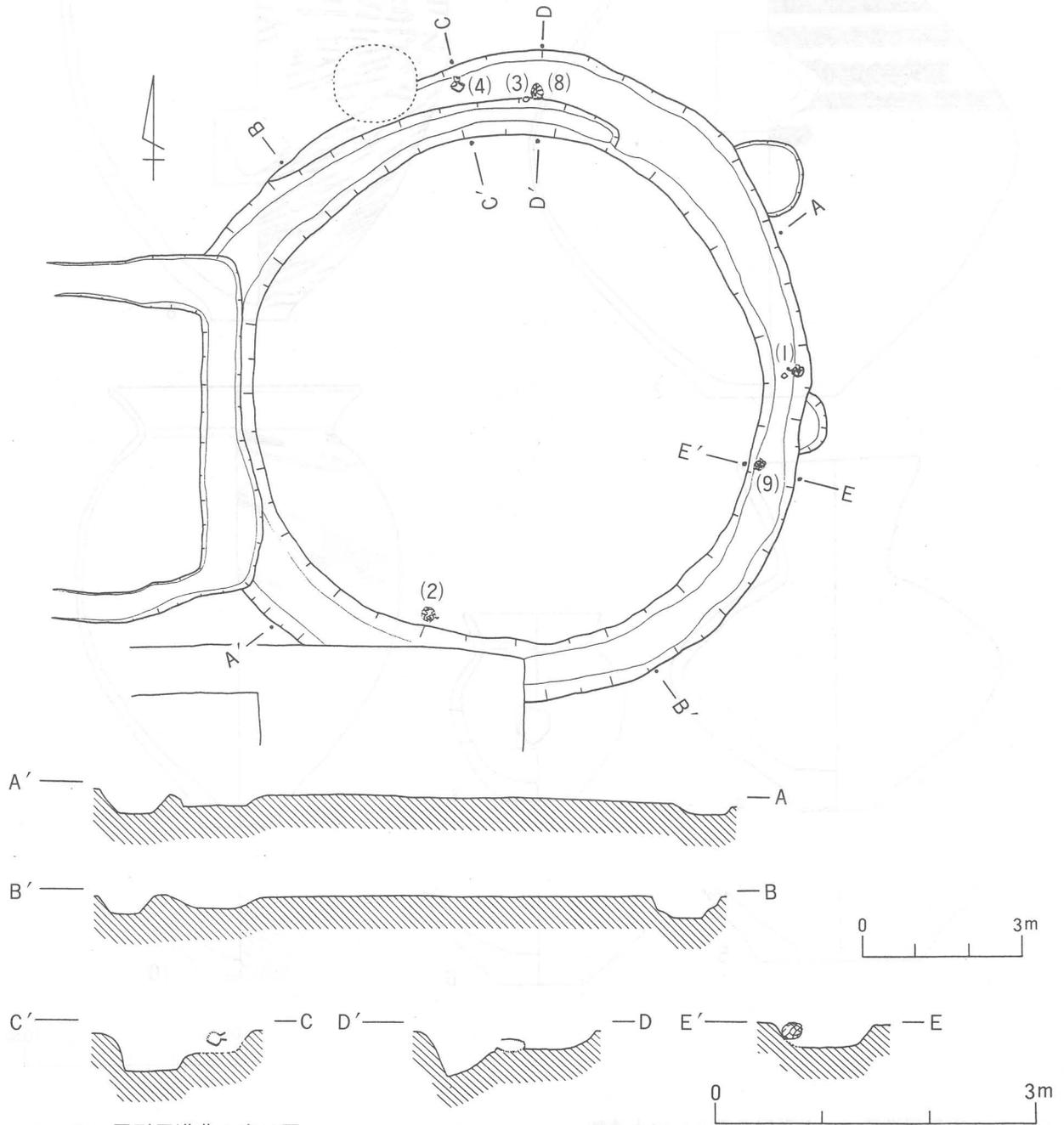


Fig. 42 円形周溝墓Ⅰ実測図

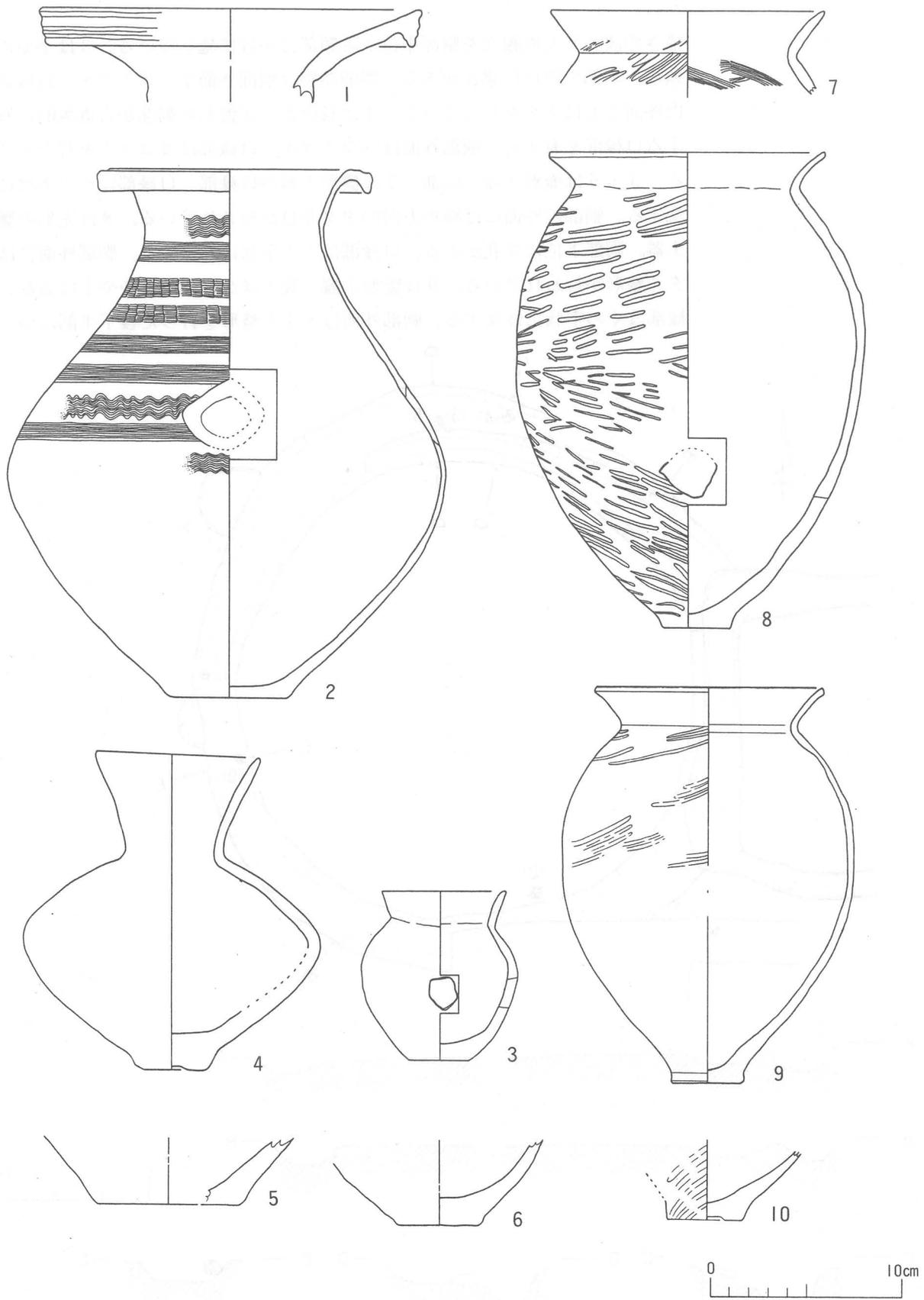


Fig. 43 円形周溝墓 1 (方形周溝墓 2) 出土遺物

はヘラナデにより消している。10は甕形土器の底部。タタキ整形が施されている。1と2を除いて弥生時代後期（V様式）後半の遺物である。

**円形周溝墓 2**

本遺構は、調査区の北端において検出された。遺構の北半分は調査区が延びており、未調査となっている。内径は3.86m、その周囲に幅30～35cm、深さ10cmの周溝が巡っている。主体部は遺存せず、遺物も全く出土しなかったため、時期は特定できない。

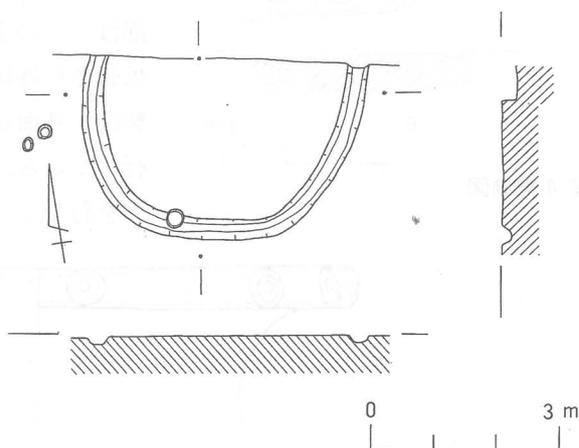


Fig. 44 円形周溝墓 2 実測図

**円形周溝墓 3**

本遺構は、調査区の南端から検出され、円形周溝墓 2 と同様に約半分が調査区外に延びており、未調査となっている。規模は、内径6.7m、その周囲に幅50～93cm、深さ20cmの周溝が巡っている。主体部は遺存せず、出土遺物もない。

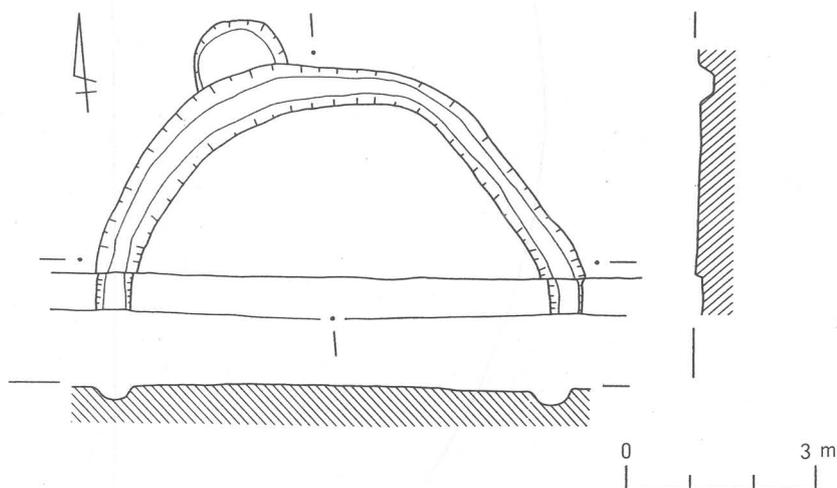


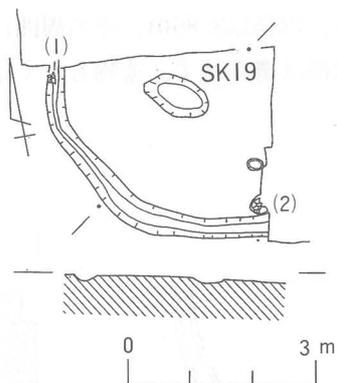
Fig. 45 円形周溝墓 3 実測図

**円形周溝墓 4**

円形周溝墓 3 の北東側に位置し、大半を第7次調査のトレンチによって壊されている。検出した範囲は約1/4となっている。周溝墓内にSK19があるが、周溝

墓との関係は明確ではない。周溝は幅30~45cm、深さ10cmの規模である。

周溝内より壺形土器の口縁部(1)が出土し、周溝脇から甕形土器(2)が埋まった状態で出土した。遺構の時期は、同溝内から出した広口壺(1)により弥生時代後期(V様式)と考えられる。1は広口壺の口縁部。頸部から緩やかに外反し、



口縁部端は上下に拡張されて端面を形成している。端面には円形浮文が貼付されている。内外面ともにナデ調整を施している。2は大型の甕形土器。胴部中位から口縁部にかけて約半分が遺存している。胴部上位に最大径を有し、口縁部は「くの字」状に外反した後、端部が上方に拡張され外傾する端面を形成している。器面調整は、外面が縦方向のハケ調整の後ヘラナデを行っている。内面はナデ調整、口縁部はヨコナデを行なっている。

Fig. 46 円形周溝墓 4 実測図

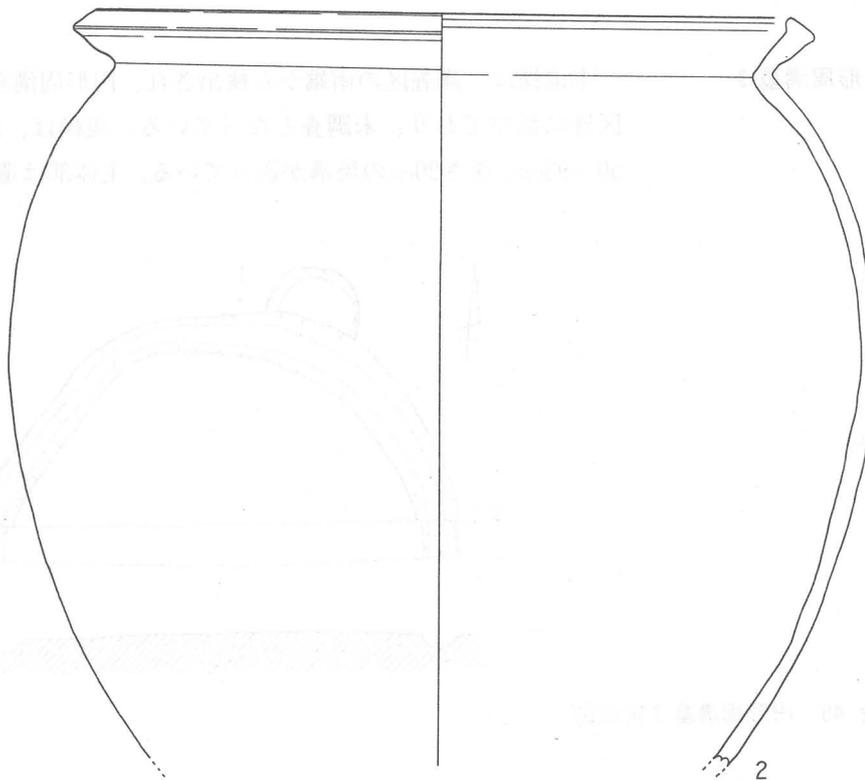
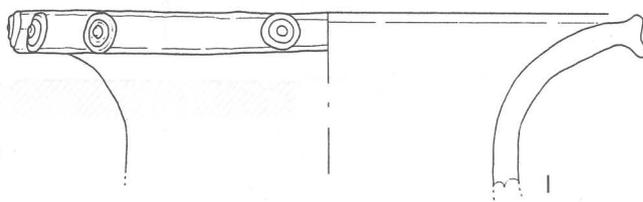
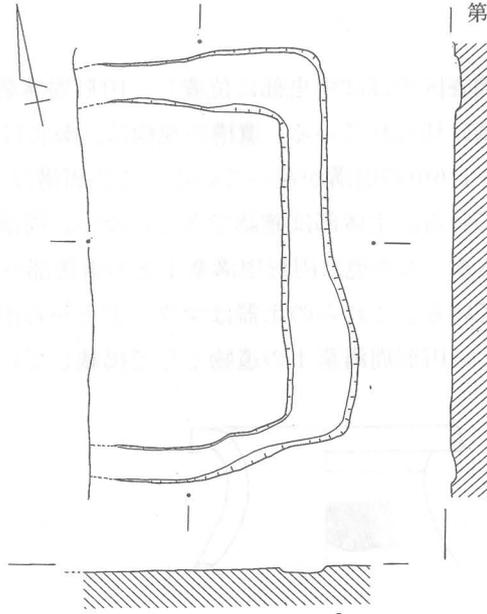


Fig. 47 円形周溝墓 4 出土遺物



方形周溝墓 1



本遺構は調査区の西側に位置し、遺構の西側が未調査区に延びており、約半分の調査となった。円形周溝墓1と重複し、円形周溝墓1を切っている。規模は、南北6.8mでその周囲に幅50cm~1.1mの周溝が方形に巡る。周溝の深さは4~18cmとなっている。主体部は遺存せず、遺物も出土しなかったため築造時期は不明である。

Fig. 48 方形周溝墓 1  
実測図

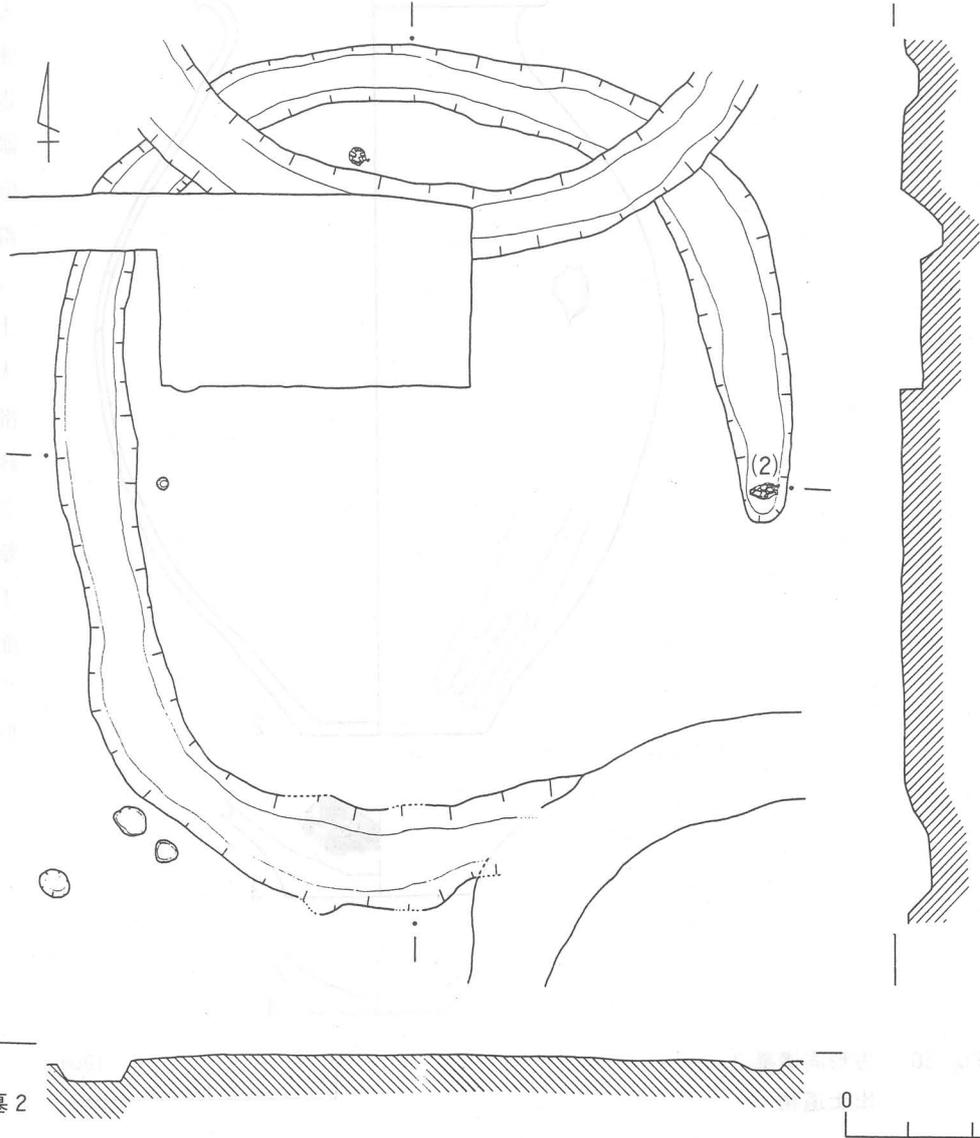


Fig. 49 方形周溝墓 2  
実測図

方形周溝墓 2

本遺構は、調査区のほぼ中央部に位置し、円形周溝墓 1 と第 7・9 次調査検出の円形周溝墓に切られている。遺構の規模は、南北 11.2m、東西 9.5m、その周囲に幅 90cm～1.6m の周溝が巡っている。この周溝は、南東隅で切れており、陸橋部となっている。主体部は確認できていない。周溝内部から甕形土器などが出土しているが、この他に円形周溝墓 1 との重複部分から、壺形土器 (Fig. 43-2) が出土している。これらの土器はマウンド上から出土していたため、切り合い関係の新しい円形周溝墓 1 の遺物として掲載しているが、時期的に見ると

本遺構の遺物の可能性が高い。

1 は壺形土器の口縁部。頸部は緩やかに外反し、口縁部に至って強く外反する。端部は上下に拡張され 2 条の凹線を巡らしている。器面調整は、外面が縦方向のハケ調整、口縁部にはヨコナデを行っている。2 は甕形土器。胴部中位に最大径を有する。口縁部は強く外反し、口縁端部は上下に拡張されている。器面調整は、外面において丁寧なヘラナデ、内面はナデ調整を行っている。3 と 4 は壺形土器の底部。

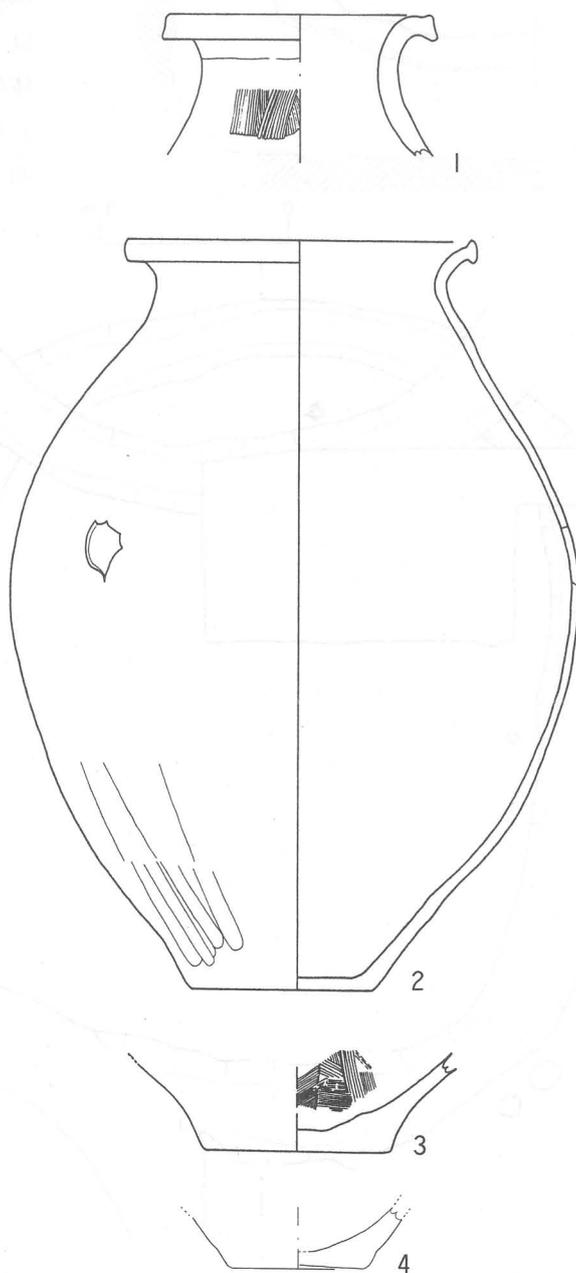


Fig. 50 方形同溝墓 2  
出土遺物

（土 坑）  
S K 1 9

本遺構は、調査区南東隅に位置し、円形周溝墓4の上面で検出されている。SK19出土の遺物の時期は円形周溝墓4出土の遺物と同時期であるため、関連のある遺構の可能性がある。土坑の規模は、東西108cm、南北60cm、深さ10cmで、東西方向に長い不正形を呈している。土坑の底面はほぼ平坦を成し、壁面は緩やかに立ち上がる。土坑の内部から高環形土器などが出土している。この高環形土器は、坏部を上にして出土した。時期は弥生時代中期後半と考えられる。

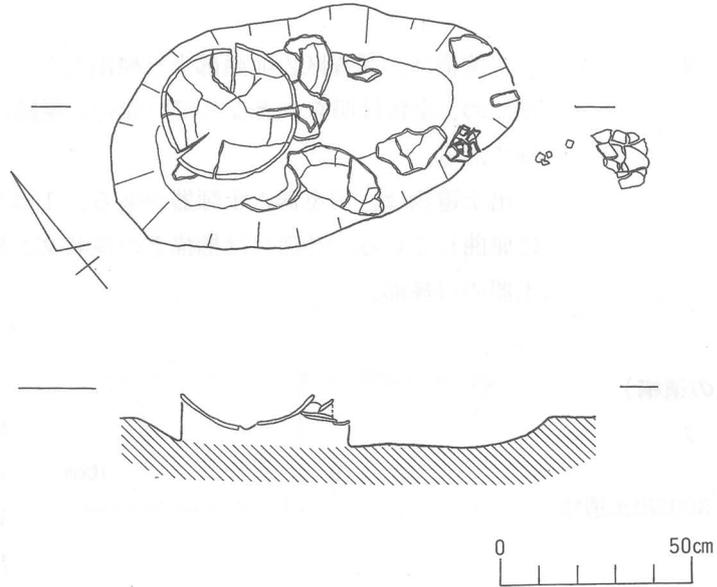


Fig. 51 SK19実測図

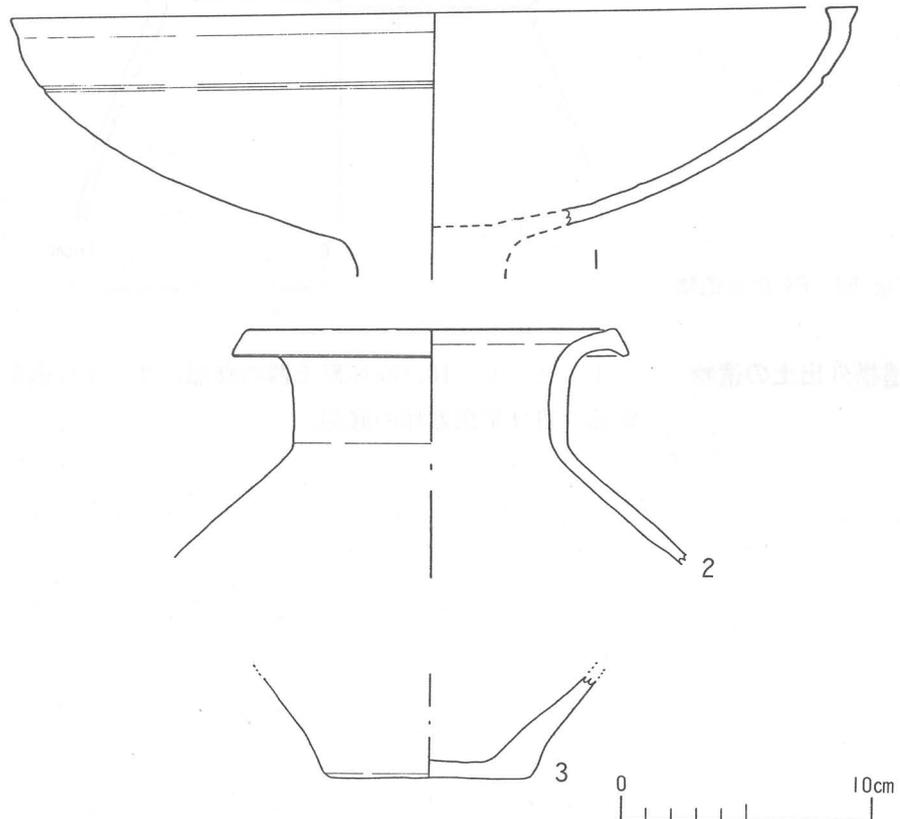


Fig. 52 SK19出土遺物

1は高環形土器の坏部。脚部は欠損している。坏部は底部から緩やかに開きながら立ち上がり、口縁部に至って強く内湾する。口縁端部は平坦に仕上げられ、その直下に弱い沈線が巡る。また、口縁部下にも弱い沈線が巡っている。器面調整は、土器の外表面が丁寧なヘラミガキ、内面は摩滅が著しく不明。2は広口壺形土器。胴部中位以下を欠損する。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部は強く外反する。口縁端部は、下方に拡張され端面には外傾した平坦面が形成されている。調整技法については、摩滅が著しく不明。3は壺形土器の底部。

S K 2 0

本遺構は、調査区の北西部より検出した。土坑の西側は調査区外に延びているため、全体は明らかとなっていない。規模は、東西40cm、南北33cm、深さ4.4cmである。

出土遺物は、須恵器と土師器がある。1は須恵器の器台、口縁部は強く外方に屈曲している。外面には櫛描きの波状文が施されている。2は土師器の壺形土器の口縁部。

(その他の遺構)

S D 0 2

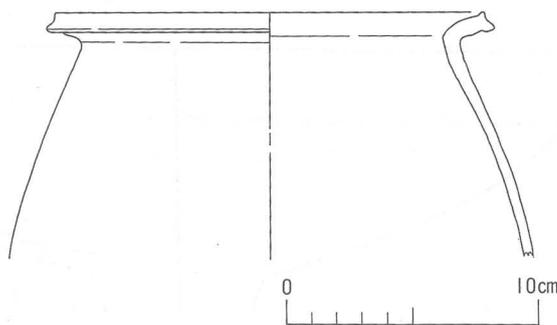
Fig. 53 SD02出土遺物



本遺構は、円形周溝墓1の北側周溝から発して調査区外に延びている。溝の規模は、幅1.5m、深さ15~22cm。内部から若干の遺物が出土している。

P 4

Fig. 54 P4 出土遺物



P4は、方形周溝墓2の南西部から検出された。規模は、50cm×43cm、深さ5cmである。内部から弥生時代中期後半の甕形土器が出土した。

遺構外出土の遺物

1・2・9・10は高環形土器の脚部。3・4は壺形土器の口縁部。5~8は底部。11は須恵器坏の底部。

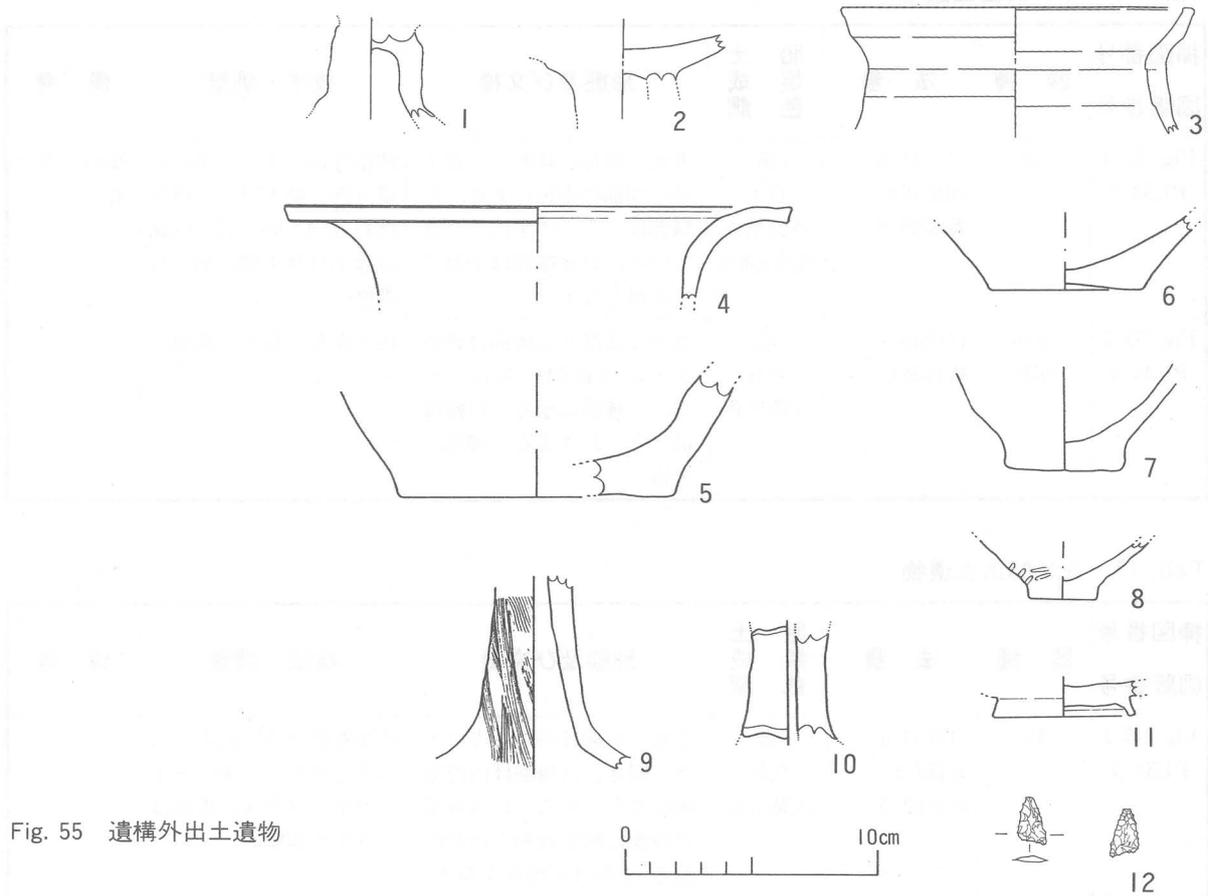


Fig. 55 遺構外出土遺物

Tab. 14 S K 03出土遺物

挿図番号 図版番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
Fig. 27 Pl.34-1	甕	口径13.5 残存高5.0	密 良好 黄橙色	口縁部は「く」の字にくびれる。口縁端部は内外面に肥厚する。	内外面共にナデ調整。	内外面共に煤付着

Tab. 15 S K 04出土遺物

挿図番号 図版番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
Fig. 29 Pl.34-2	底部	底径4.6 残存高3.4	密 良好 浅黄橙色	平底。中央に径1.2cm大の窪みがある。	磨滅が著しく調整技法不明。	

Tab. 16 S K 06出土遺物

挿図番号 図版番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
Fig. 32-1 P1.34-3	甕	口径14.3 胴部径22.2 器高23.8	密 良好 外面橙色 内面浅黄色	丸底。胴部は球形で、最大径は胴部の中位にある。口縁部は「く」の字にくびれている。口縁端部は上面で平坦面をなす。	体部外面上半から頸部の縦方向の刷毛目。口縁部は斜方向の刷毛目。内面口縁部は横方向の刷毛目調整。	外面に煤付着
Fig. 32-2 P1.34-4	高坏 坏部	口径16.1 残存高4.7	密 良好 浅黄橙色	水平な底部から体部は斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸くおさまる。脚部は欠損。	内外面共に横ナデ調整。	

Tab. 17 S K 09出土遺物

挿図番号 図版番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
Fig. 35-1 P1.34-5	鉢	口径44.4 底径7.8 高さ22.5	密 良好 浅黄橙色	平底。体部は斜め上方に大きく開き、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部の外面に断面台形の凸帯が巡る。上面は平坦面をなす。	体部外面下半は縦方向のヘラミガキ、上半は左上りの平行タタキ、内面はヘラナデ調整。	
Fig. 35-2 P1.34-6	底部	底径6.7 残存高7.8	密 良好 浅黄橙色	平底。底部から斜め上方に直線的に開く。	外面は縦方向のヘラミガキ。内面はヘラナデ。	内外面共に煤付着。

Tab. 18 壺棺 1 出土遺物

挿図番号 図版番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
Fig. 37-1 P1.34-7	広口壺	口径31.2 胴部径58.8 底径6.4 器高55.1	密 良好 褐色	胴部は球形を呈し、胴部の最大径は中位にあり、強く張り出す。頸部は直立した後、外反する。口縁部は外面に稜をもち、屈曲し斜め上方に立ち上がる。口縁端部は面をもつ。口縁部外面には竹管の円形刺突文（3個1組）を8か所施す。肩部外面には櫛描き直線文（単位6条）がある。	胴部外面の下位には縦方向のヘラナデ調整。口縁部内外面はナデ調整。	生駒西麓産の胎土。
Fig. 37-2 P1.34-8	底部	底径5.0 残存高7.2	密 良好 浅黄橙色	平底。底部から斜め上方に内湾気味に開く。	胴部外面タタキ目。内面はヘラナデ。	壺棺の壺に転用

Tab. 19 壺棺 2 出土遺物

挿図番号 図版番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
Fig. 39-1	壺 胴部	胴部径47.2 残存高31.5	密 良 浅黄橙色	胴部は強く張り出し、胴部は算盤玉型を呈している。	内外面共に磨滅が著しく不明。	

Tab. 20 壺棺 3 出土遺物

挿図番号 図版番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
Fig. 41-1 P1.35-1	壺	胴部径50.2 底部6.2 残存高49.1	密 良好 浅黄橙色	平底。胴部は球形を呈し、最大径は胴部の中位にある。口縁部を欠損する。頸部には断面三角形の突帯が巡る。	胴部下半部には丁寧なヘラミガキを施す。	
Fig. 41-2 P1.35-2	底部	底径5.0 残存高6.0	密 良好 浅黄橙色	平底。底部から斜め上方に直線的に開く。	内面に不定方向の刷毛目を施す。	壺棺の蓋として転用。

Tab. 21 S K 19出土遺物

挿図番号 図版番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
Fig. 52-1 P1.35-3	高坏 坏部	口径33.5 残存高10.2	密 良好 淡橙色	体部は斜め上方に大きく開き、ゆるやかに屈曲しながら口縁部に至り、強く内湾する。口縁端部は内外面に肥厚する。口縁端部上面は平坦面をなす。	外面体部は縦方向のヘラミガキ。外面口縁部は横ナデ調整。内面は磨滅が著しく不明。	外面に煤付着。
Fig. 52-2 P1.35-3	壺 口縁部	口径14.5 残存高9.4	密 良好 浅黄橙色	頸部は直立し、口縁部に至り、強く外反する。口縁端部は斜め下方に拡張する。	内外面共に磨滅が著しく不明。	Fig.52-3と同一個体。
Fig. 52-3 P1.35-4	壺 底部	底径7.8 残存高4.2	密 良好 浅黄橙色	平底。	内外面共に磨滅が著しく不明。	Fig.52-2と同一個体。

Tab. 22 SK20出土遺物

挿図番号 図版番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
P1. 35-6	須恵器器台 口縁部	口径28.5 残存高5.0	密 良好 灰色	口縁部は内湾気味に立ち上がり、強く外反する。口縁端部は下方に拡張し凹面をなす。外面に櫛描き波状文を施す。		
P1. 35-7	甕 口縁部	口径12.8 残存高3.8	密 良好 淡橙色	頸部は直立し、口縁部は内湾気味に斜め上方に開く。口縁端部で内外面に肥厚し、上面は平坦面をなす。	口縁部内面は刷毛目調整。口縁部外面は横ナデ調整。頸部内面は縦方向のヘラケズリの後、横ナデ調整。外面頸部は縦方向のヘラケズリ。	

Tab. 23 SD02出土遺物

挿図番号 図版番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
Fig. 53 P1.35-8	甕 口縁部	口径14.5 残存高2.8	密 良好 浅黄橙色	口縁部は外反して開き、口縁端部は面をもつ。	内外面共にナデ調整。	

Tab. 24 P4出土遺物

挿図番号 図版番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
Fig. 54 P1.35-9	甕	口径17.0 残存高9.9	密 良好 にふい 黄橙色	胴部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は「く」の字にくびれ強く外反する。口縁端部は上方につまみ上げ、受口状になっている。	体部外面は縦方向の刷毛目の後、ナデ調整。他はナデ調整。	

Tab. 25 円形周溝墓1出土遺物(1)

挿図番号 図版番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
Fig. 43-1 P1.36-1	広口壺	口径19.8 残存高4.9	密 良好 にふい 橙色	口縁部は強く外反する。口縁端部は斜め下方に大きく拡張する。口縁部端面に3条の凹線文をもつ。	外面がヘラナデ、内面はヘラミガキを施している。	

Tab. 26 円形周溝墓1出土遺物(2)

挿図番号 図版番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
Fig. 43-2 P1.36-2	広口壺	口径14.3 底径6.05 器高27.7 胴部径22.8	密 良 浅黄橙色	平底。胴部の最大径は中位やや下にある。頸部は短く立ち上がり、口縁部は強く外反する。口縁端部は下方に拡張する。口縁端部上面には凹線文が巡る。頸部より下から胴部上位にかけて上方から波状文、直線文、押し引き文（単位9条）を施す。胴部中位に1か所穿孔がある。器壁は極めて薄い。	胴部外面の下位に斜め方向のへラケズリの後、へラナデ調整。口縁部内外面はナデ調整。	方形周溝2の共伴遺物の可能性が高い。
Fig. 43-3 P1.36-3	小型短頸壺	口径6.4 胴部径8.2 器高8.9	密 良好 浅黄橙色	平底。胴部は球形。胴部の最大径は中位にある。口縁部は「く」の字にくびれる。口縁端部は丸くおさまる。胴部中位に円形の穿孔がある。	胴部外面はへラミガキ。口縁部内外面はナデ調整。	
Fig. 43-4 P1.36-4	長頸壺	口径8.5 胴部径15.4 器高16.7	密 良 浅黄橙色	上げ底。胴部は算盤玉型を呈している。胴部の最大径は中位にある。口縁部は外反しながら立ち上がる。	底部外面から胴部外面の下位は縦方向のへラミガキ。胴部外面上位はへラナデ。口縁部内外面はナデ調整。	
Fig. 43-5	底部	底径7.4 残存高3.5	密 軟 淡黄色	平底。底部から斜め上方に直線的に立ち上がる。	内外面共に磨減が著しく不明。	
Fig. 43-6 P1.36-6	底部	底径4.0 残存高4.5	密 良好 浅黄橙色	平底。底部から斜め上方に内湾気味に立ち上がる。	内外面共にナデ調整。	
Fig. 43-7 P1.36-7	甕 口縁部	口径14.2 残存高3.9	密 良 浅黄橙色	口縁部は「く」の字状にくびれる。口縁端部は丸くおさまる。	胴部外面は右上りのタタキ目。胴部内面は斜め方向の刷毛目調整。口縁部内外面共にナデ調整。	
Fig. 43-8 P1.36-8	甕	口径14.2 胴部径18.1 底部3.4 器高25.0	密 良 浅黄橙色	平底。胴部の最大径は中位にある。口縁部は「く」の字状にくびれる。口縁端部は丸くおさまる。胴部下位に穿孔がある。	胴部外面下半は左上りのタタキ目(3条/cm)。胴部外面中位は横方向のタタキ目(2条/cm)。胴部上半外面は右上りのタタキ目(2条/cm)。口縁部内外面共ナデ調整。	外面に煤付着。
Fig. 43-9 P1.36-9	甕	口径11.8 胴部径15.2 底部3.6 器高20.7	密 良 浅黄橙色	平底。胴部の最大径は中位やや上にある。口縁部は「く」の字状にくびれる。	胴部外面上半は右上りのタタキ目(3条/cm)。胴部下半部はタタキ目の後へラナデを施す。	

Tab. 27 円形周溝墓 1 出土遺物(3)

挿図番号 図版番号	器種	法量	胎土 焼色 成調	形態及び文様	技法・調整	備考
Fig. 43-10 P1.36-10	底部	底径3.8 残存高4.2	密 良好 浅黄橙色	底部から斜め上方に直線的に開く。	底部外面は右上りのタタキ目(2条/cm)。	

Tab. 28 円形周溝墓 4 出土遺物

挿図番号 図版番号	器種	法量	胎土 焼色 成調	形態及び文様	技法・調整	備考
Fig. 47-1 P1.37-1	広口壺 口縁部	口径24.4 残存高6.8	密 良 橙色	頸部は直立し、口縁部に至り、強く外反する。口縁端部は上下に拡張する。口縁部端面に円形浮文を貼り付ける。	内外面共にナデ調整。	
Fig. 47-2 P1.37-2	甕	口径27.5 胴部径34.3 残存高29.9	密 良好	最大径は胴部の上位にある。口縁部は「く」の字状にくびれる。口縁端部は上方に拡張される。	外面は縦方向のハケ調整の後ヘラナデ。内面はナデ調整。口縁部はヨコナデ。	

Tab. 29 方形周溝墓 2 出土遺物

挿図番号 図版番号	器種	法量	胎土 焼色 成調	形態及び文様	技法・調整	備考
Fig. 50-1 P1.37-3	広口壺	口径10.4 残存高5.7	密 良好 浅黄橙色	頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は上下に拡張される。	頸部外面に縦方向の刷毛目。他はナデ調整。	
Fig. 50-2 P1.37-4	広口壺	口径13.6 胴部径21.5 底径7.2 高さ30.05	密 良好 淡橙色	平底。胴部の最大径は中位にある。頸部は短く立ち上がり、口縁部は強く外反する。口縁端部は上下に拡張する。胴部中位に1か所穿孔がある。	底部から胴部下半の外面はヘラナデ。内面はナデ調整。	
Fig. 50-3 P1.37-5	底部	底径7.4 残存高4.1	密 良好 浅黄橙色	平底。底部から外反気味に立ち上がる。	内面に不定方向の刷毛目を施す。	
Fig. 50-4	底部	底径5.2 残存高2.5	密 良好 浅黄橙色	平底。底部から内湾気味に立ち上がる。	外面には指頭圧調整。	

Tab. 30 遺構外出土遺物

挿図番号 図版番号	器種	法量	胎土 焼色 成調	形態及び文様	技法・調整	備考
Fig. 55-1 P1.37-6	高環 脚部	残存高3.7	密 良好 淡橙色	中空の脚部。	脚部外面は、ナデ調整。 脚部内面はヘラナデ。	
Fig. 55-2 P1.37-7	高環 脚部	残存高3.2	密 良好 淡橙色	中空の脚部。環部は外反し て直線的に開く。	環部外面に縦方向のヘラ ケズリ。他は磨滅が著し く不明。	
Fig. 55-3 P1.37-8	甕	口径13.8 残存高5.1	密 良好 浅黄橙色	頸部は直立した後、外反す る。口縁部は外面に稜をも ち、わずかに屈曲して、斜 め上方に立ち上がる。口縁 端部は上面で平坦面をな す。	頸部外面は縦方向の刷毛 目。頸部内面は不定方向 の刷毛目。口縁部内外面 はナデ調整。	
Fig. 55-4 P1.37-9	広口壺 口縁部	口径20.2 残存高3.7	密 良好 にぶい橙色	口縁部は強く外反して水平 に開く。口縁端部は上方に 若干つまみ上げる。口縁端 部は面をもつ。	口縁部内外面はナデ調 整。	
Fig. 55-5 P1.38-1	底部	底径10.6 残存高4.9	密 良 淡橙色	平底。底部から外反して斜 め上方に開く。	外面は縦方向のヘラケズ リを施す。	
Fig. 55-6 P1.38-2	底部	底径5.9 残存高3.0	密 良 浅黄橙色	上げ底。底部から外反して 斜め上方に開く。	内外面共に磨滅が著しく 不明。	
Fig. 55-7 P1.38-3	底部	底径4.3 残存高4.0	密 良 浅黄橙色	平底。底部から内湾気味に 斜め上方に開く。	内外面共に磨滅が著しく 不明。	
Fig. 55-8 P1.38-4	底部	底径2.6 残存高2.3	密 良好 浅黄橙色	平底。底部から直線的に斜 め上方に開く。	外面は右上りのタタキを 施している。	
Fig. 55-9 P1.38-5	高環 脚部	残存高7.8	密 良好 浅黄橙色	中空の脚部の下に外反して 開く裾部がある。	脚部外面は縦方向の刷毛 目。脚部内面の下方に横 方向のヘラケズリ。裾部 内面はナデ調整。	
Fig. 55-10 P1.38-6	高環 脚部	残存高4.4	密 良好 浅黄橙色	中空の脚部。	脚部外面に縦方向のヘラ ミガキ。	
Fig. 55-11 P1.38-7	須恵器 底部	底径5.6 残存高1.4	密 良 灰白色	八の字状に開く。	削り出しによる高台。高 台内外面は回転ナデ調 整。	
Fig. 55-12 P1.38-8	石鏃	全長1.9 厚さ0.3 幅1.2	灰色	凹基式	A B両面ともに両側辺に 細やかな調整剝離を加え られている。特にB面 の方が細やかである。	サヌカイト



## 第5章 結 語

**縄文時代晩期の調査 (第22次調査)** 第22次調査は遺跡公園建設に伴う事前調査として実施したもので、公園予定内の遺跡の状況を把握するために、東西方向のトレンチ2本、南北方向のトレンチ1本の計3本のトレンチを設定して確認調査を行った。調査の結果、東西方向のトレンチから土坑(S K04~08)と凸帯文土器を多く含む流路と遺物包含層を検出した。

**土 坑** 土坑は東西トレンチ(南)の西側から集中して検出された。これらの土坑の内部には炭化物が堆積するという共通点があり、遺構の位置関係を見てもこれらが互いに関連した遺構であることを示していると考えられる。土坑の範囲はまだ調査区外に広がる様相を示している。こうした炭化物を有する土坑は、今回の調査地点の南側で行われた第11次調査地点でも検出されている。第11次調査<sup>(1)</sup>では、12基の土坑が検出され、内部に多くの炭化物が含まれていることが報告されている。こうした小規模な土坑の性格については現在のところ不明であるが、広範囲に広がっていることが考えられる。遺構の時期は、S K04から凸帯文土器(Fig. 18-6)が出土していることから、縄文時代晩期の遺構と考えられる。

**凸帯文土器** 縄文時代晩期の遺物包含層は、東西トレンチの南と北で確認された。包含層中の遺物の大半が凸帯文土器であり、それに少量の石器が共伴している。凸帯文土器については本文中で分類説明しているが、ここで若干説明を加えておきたい。

土器の胎土の分類では、生駒西麓産の粘土を使用したものを胎土B、それ以外のものを胎土Aとした。純粋な縄文晩期の包含層である第11層出土遺物でみると、東西トレンチ(北)では48点中に胎土Aが32点(67%)、胎土Bが16点(33%)となり、同じ第11層のS K01では、32点中に胎土Aが19点(59%)、胎土Bが13点(41%)、また東西トレンチ(南)東群では19点中胎土Aが14点(74%)、胎土Bが5点(26%)、西群では39点中胎土Aが29点(74%)、胎土Bが10点(26%)となっており、東西両群とも同じ出土比率を示している。第11次調査では胎土B(生駒西麓産粘土)は6~7割を占していると報告されているが、出土比率では本地点とちょうど逆転していることになる。本地点の北東部で実施された第6次調査<sup>(2)</sup>では、船橋式の段階での生駒西麓の土器の出土比率が30%<sup>(3)</sup>であり、今回の調査結果と近い数値を示している。

深鉢形土器の形態分類では4タイプに分類した。肩部から口縁部にかけて強く屈曲するタイプを(1類)、肩部から緩やかに屈曲した口縁部が垂直気味に立ち上がるタイプを(2類)、口縁部が内傾するタイプを(3類)、口縁部が直線的に立ち上がるタイプを(4類)に分類した。1類に分類したFig. 10-15・16については、肩部付近で屈曲するが口縁部はあまり外反せず垂直気味に立ち上がるなど、2類に分類したFig. 10-14と形態的にそれほど違いがないのも事実である。3類に属する深鉢形土器(Fig. 18-1・4・5、19-18)は東西トレンチ

(南)西群からまとまって出土した。4類は東西トレンチ(北)第11層から1点(Fig. 11-17)出土している。

凸帯の貼付される位置については、口縁部に接して凸帯を貼付するものを(凸B)、口縁部やや下に貼付するものを(凸A)とした。その出土比率を見てみると、東西トレンチ(北)第11層では凸Aが46%、凸Bが54%であるが、深鉢形土器3類を出土した東西トレンチ(南)西群では凸A20%、凸Bが80%となっており、凸Bの出土比率が極めて高いことが判った。

浅鉢形土器は3タイプに分類したが、口縁部が内側に強く屈曲する1類が最も多く出土している。1類には、肩部のみに沈線が巡るもの(Fig. 12-55、16-11)と口縁部にも沈線が巡るもの(Fig. 12-54)がある。2類については、破片での出土であるため全体形は明確にできないが、皿状を呈すると考えられる。3類は器高の低い皿状である。

以上、第22次調査出土の凸帯文出土器について見てきたが、深鉢形土器には、二条凸帯が圧倒的に多く、明確に一条凸帯の深鉢形土器は1点(Fig. 18-6)のみであること、凸帯の位置が口縁部に接して貼付されるものが多いことから、第11層出土の凸帯文土器は縄文晩期後半「長原式」<sup>(4)</sup>に相当すると考えられる。中でも東西トレンチ(南)西群出土の土器群には新しい要素が認められる。

#### 弥生時代以降の調査 (第25次調査)

第25次調査では弥生時代中期から後期にかけての方形周溝墓、円形周溝墓、壺棺墓などが検出された。今回の調査範囲は第3章でも述べたように、昭和55年に実施した第7次調査および昭和57年に実施した第9次調査の範囲と一部重なっている。第7・9次調査<sup>(5)</sup>の範囲はトレンチ設定図(Fig. 2)<sup>(6)</sup>に示している。今回の報告書の中では第7・9次調査検出の遺構については、円形周溝墓を除いて全体図(Fig. 23・24)に示していないので簡単に説明しておく、円形周溝墓1基(後期)、木棺墓4基(前期から中期前半)、土坑墓1基(中期から後期)、壺棺墓1基(中期)などである。これに今回の調査で検出された遺構を加えると、円形周溝墓5基、方形周溝墓2基、木棺墓4基、壺棺墓4基、土坑墓1基となる。

こうしてみると、今回の調査範囲は少なくとも弥生時代中期前半から後期後半に至るまで、継続して墓地として利用されていたことが判る。第7・9次調査の本報告が刊行されていないので、詳しい年代は判らないが、遺構の変遷を見てみると次のようになる。

#### 遺構の変遷

(前期から中期前半)…… 木棺墓(第7・9次調査)

(中期後半)…………… 方形周溝墓2、壺棺墓(第9次調査)

(後期後半)…………… 円形周溝墓1、円形周溝墓(第7・9次調査)、  
壺棺墓1～3

今回の調査地点の南側で実施した第11次調査では、木棺墓1基と壺棺墓1基が検出されており、木棺墓は中期前半、壺棺墓は後期後半の時期と考えられている。遺構の種類と時期の関係は、今回の調査範囲検出の遺構と同じ傾向が認められる。第11次調査では中期後半、後期後半、後期前半の各時期の住居跡が発見されており、集落と墓が近接して位置することが判ってきている。

## おわりに

口酒井遺跡の発掘調査は、昭和53年に最初に調査が行われ、現在まで30次をこえる調査が実施されてきている。その間、第6次調査では粃痕の残る浅鉢形土器が出土し、縄文時代晩期に口酒井周辺において既に稲作が行われていたことが裏付けられた。また、第7・9・11次調査および今回報告する第25次調査では弥生時代の集落と墓が調査され、猪名川流域における古代人の営みの一端が解きあかされてきている。今回の調査は仮称「口酒井遺跡公園」計画の資料作成のための調査である。今後は、これまでの調査成果を生かした公園計画にしていく必要がある。

報告書の刊行にあたり、当時調査を担当した中井秀樹、田中賢人両氏には資料の検討と校正をお願いした。また、米尾一幸氏には資料を提供していただいた。心から感謝を申し上げたい。

## 註

- (1) 南 博史ほか「口酒井遺跡」-第11次調査報告書-伊丹市教育委員会 財団法人古代学協会1988。
- (2) 註1の文献。
- (3) 浅岡 俊夫 「伊丹市口酒井遺跡の凸帯文土器」『高井悌三郎先生喜寿記念論集 歴史と考古学』1988。
- (4) 家根 祥多 「近畿地方の土器」(『縄文文化の研究』第4巻縄文土器II) 1981。  
「出土遺物 縄文時代」『長原遺跡発掘調査報告II』大阪市文化財協会 1982。
- (5) 浅岡 俊夫 「口酒井遺跡(第7次調査)」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和55年度』1983。
- (6) 浅岡 俊夫 「口酒井遺跡(第9次調査)」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』1984。

## 報告書抄録

ふりがな	くちさかい							
書名	口酒井遺跡発掘調査報告書							
副書名	第22次・25次調査							
巻次								
シリーズ名	伊丹市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	小長谷 正 治							
編集機関	伊丹市教育委員会							
所在地	〒664 兵庫県伊丹市千僧1丁目1			TEL 0727-83-1234				
発行年月日	西暦 1995年 3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くちさかい 口酒井遺跡 第22・25次調査	ひょうごけんいたみしくちさかい 兵庫県伊丹市口酒井 あざあなもり 字穴森1-1ほか	28207	78	34° 46' 12"	135° 26' 13"	19881024~ 19890203	960	遺跡公園 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
口酒井遺跡 第22・25次調査	集落 墓	縄文 弥生	土坑 7基 方形周溝墓 2基 円形周溝墓 4基 壺棺墓 3基	凸帯文土器、石器 弥生土器、石器				



a 南北トレンチ (南より)



b 南北トレンチ (南より)



a 東西トレンチ（北）（西より）



b 東西トレンチ（北）  
縄文土器出土状況



a 東西トレンチ（北） 縄文土器出土状況（第11層）



b 東西トレンチ（北） 縄文土器出土状況（第11層）



a 東西トレンチ（北）（第11層）  
縄文土器検出状況



b 東西トレンチ（北）（第11層）  
浅鉢出土状況



c 東西トレンチ（北）（第11層）  
浅鉢出土状況



a 東西トレンチ (北)  
足跡検出状況 (第10層直上)



b 東西トレンチ (北)  
足跡検出状況 (第10層直上)



c 東西トレンチ (北)  
足跡検出状況 (第10層直上)



a 東西トレンチ（北） 落ち込み状遺溝



b 東西トレンチ（北） 落ち込み状遺溝



a 東西トレンチ（南）  
縄文土器出土状況



b 東西トレンチ（南）  
縄文土器出土状況



c 東西トレンチ（南）  
縄文土器出土状況



a 東西トレンチ（南）（流路内）  
縄文土器出土状況



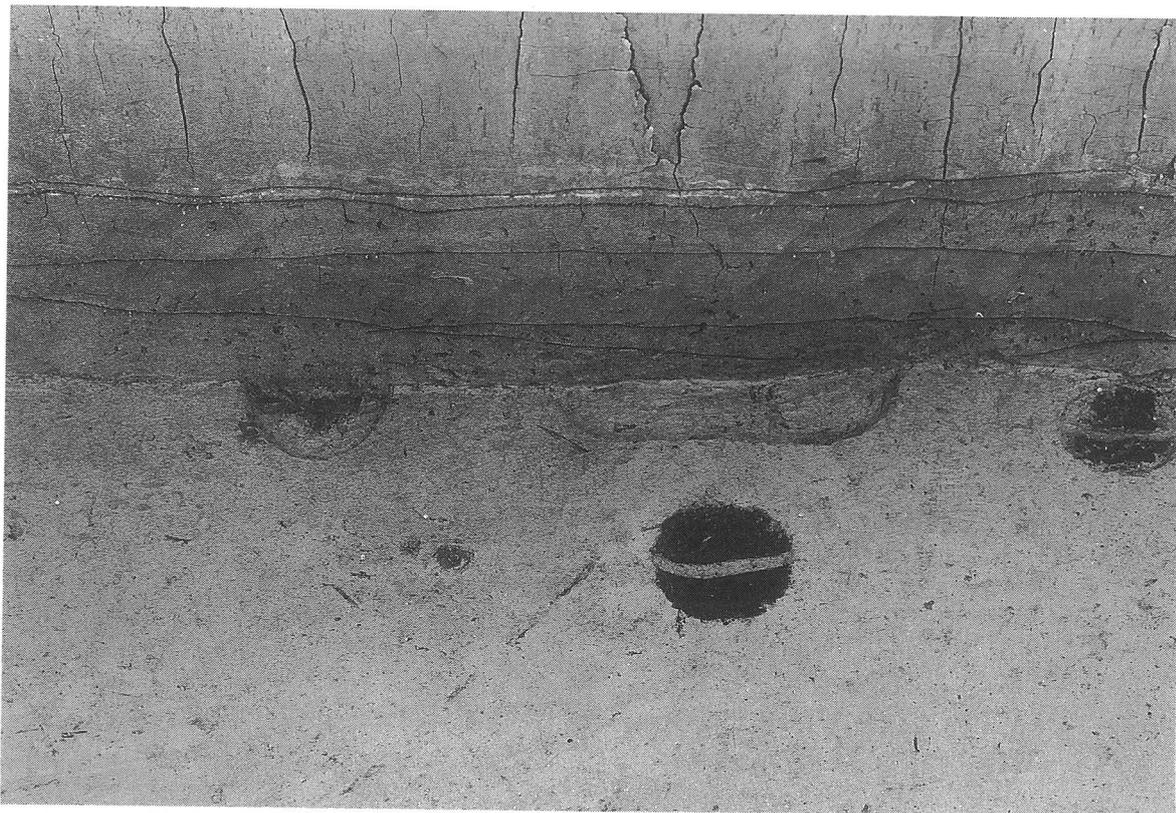
b 東西トレンチ（南）（流路内）  
縄文土器出土状況



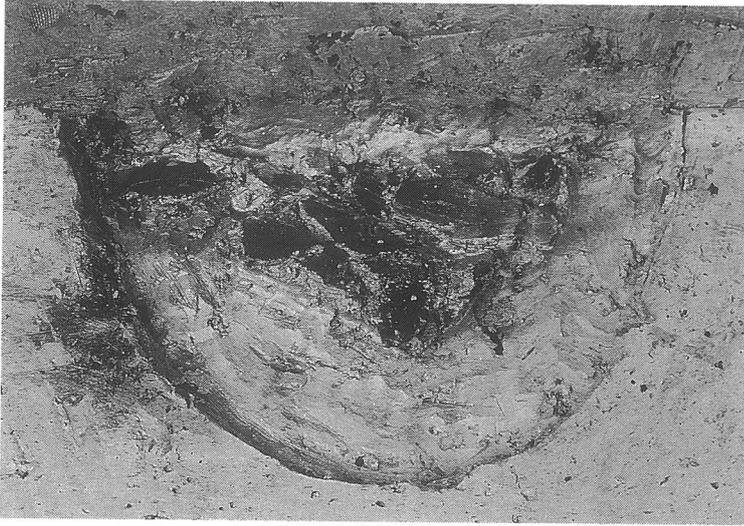
c 東西トレンチ（南）  
石斧出土状況



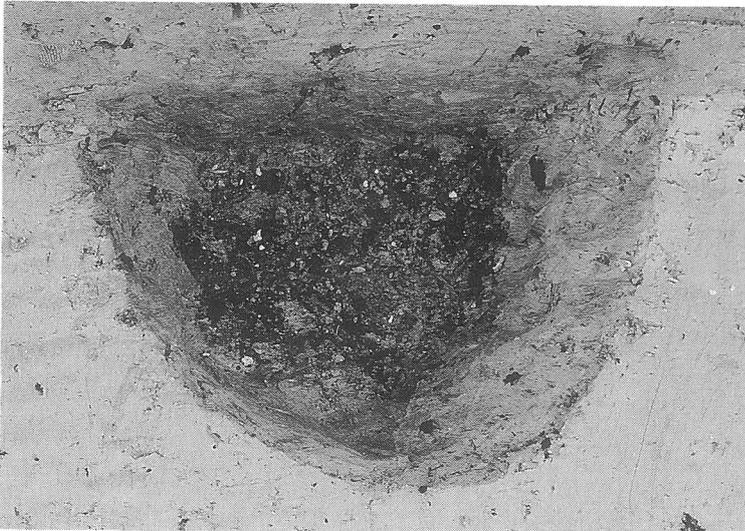
a 東西トレンチ (南) SK04~SK08



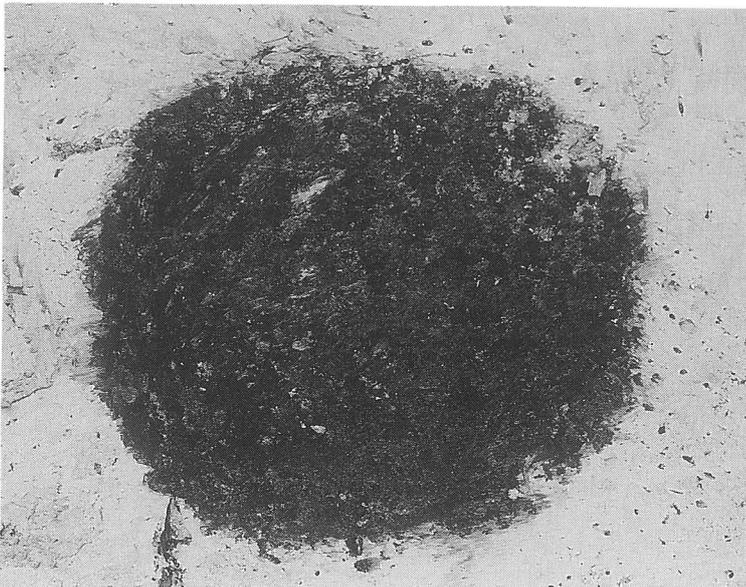
b 東西トレンチ (南) SK04~SK08



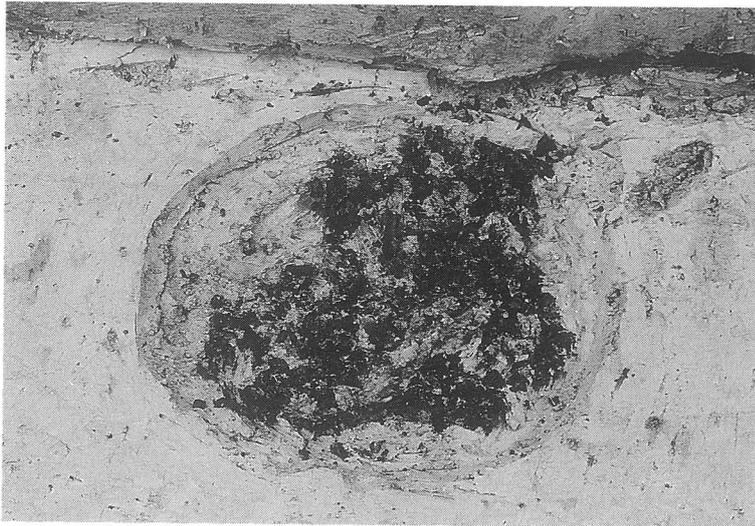
a SK04 縄文土器出土状況



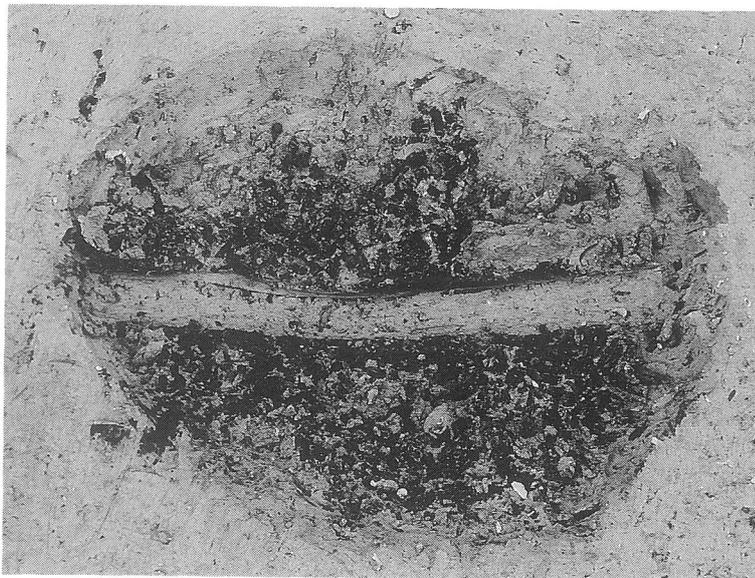
b SK04 炭化物出土状況



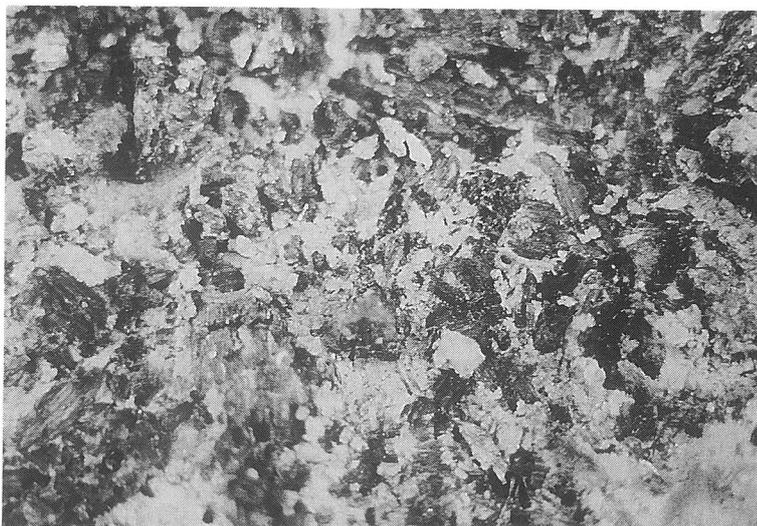
c SK06 炭化物出土状況



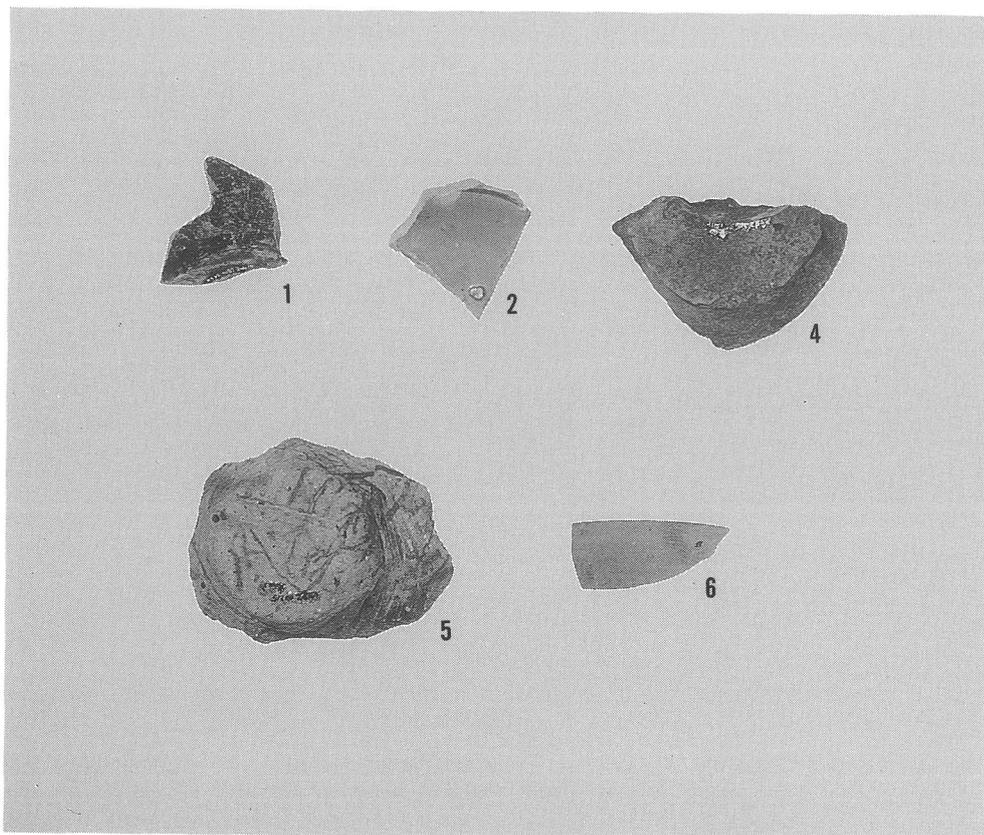
a S K07 炭化物出土状況



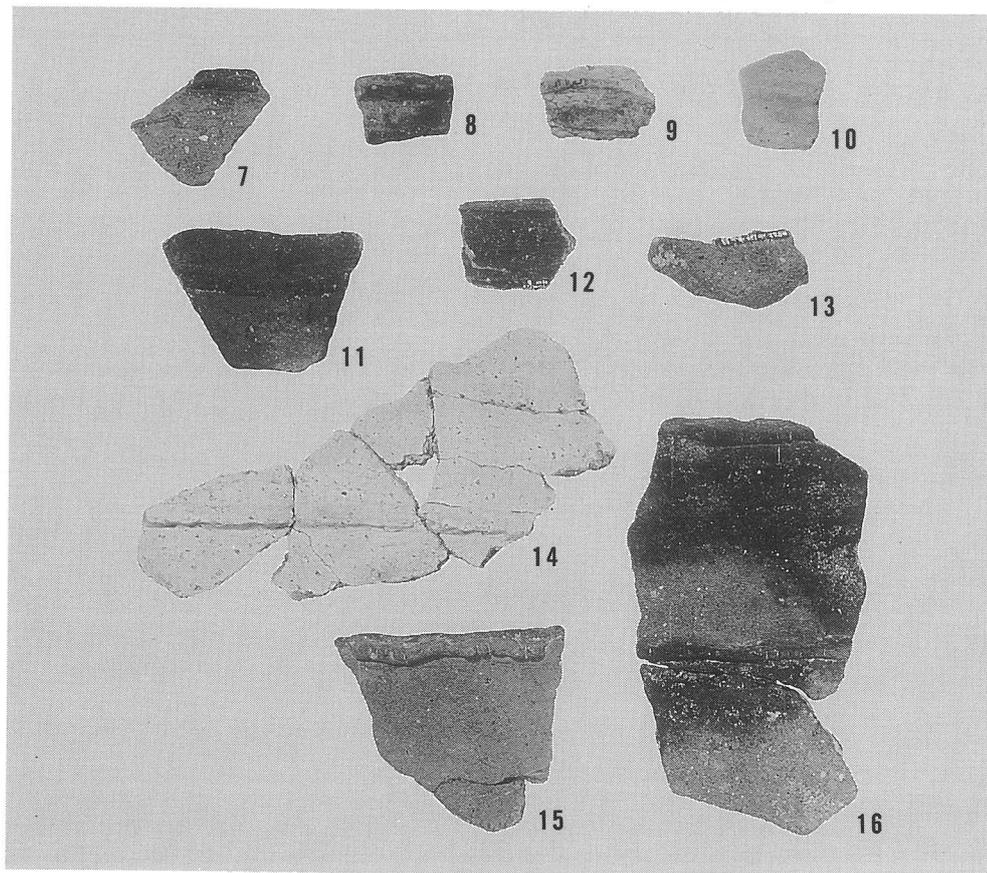
b S K08 炭化物出土状況



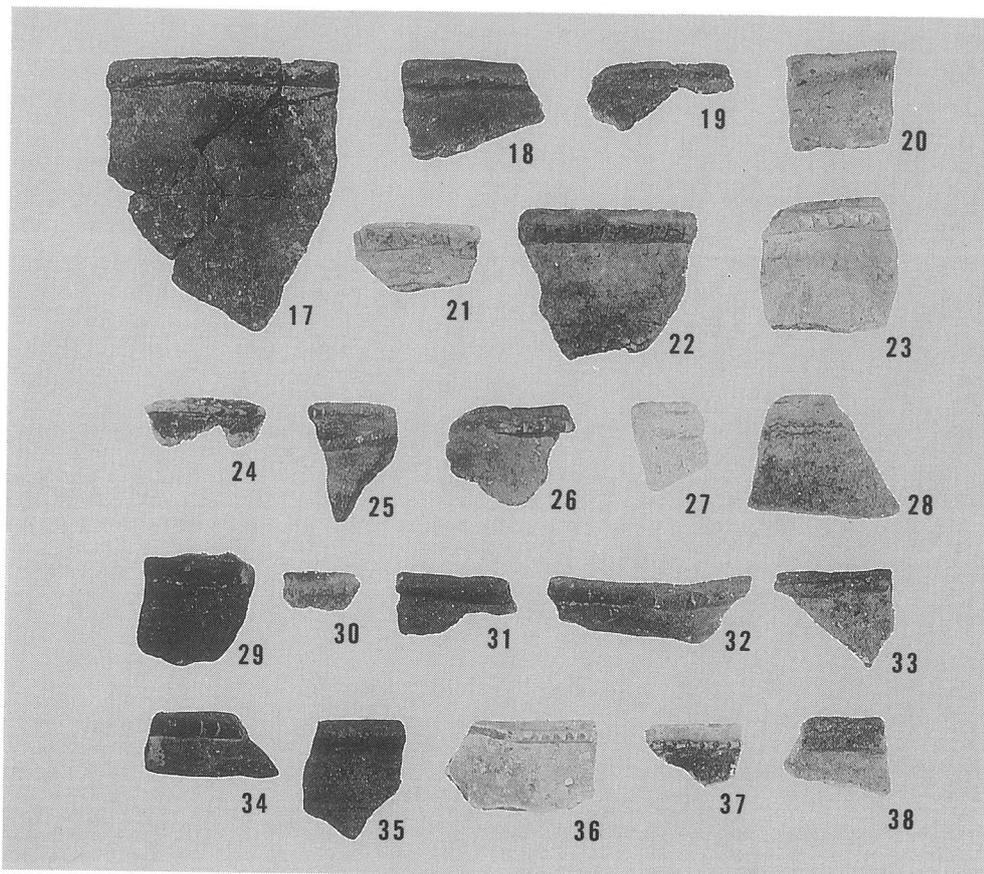
c S K08 炭化物



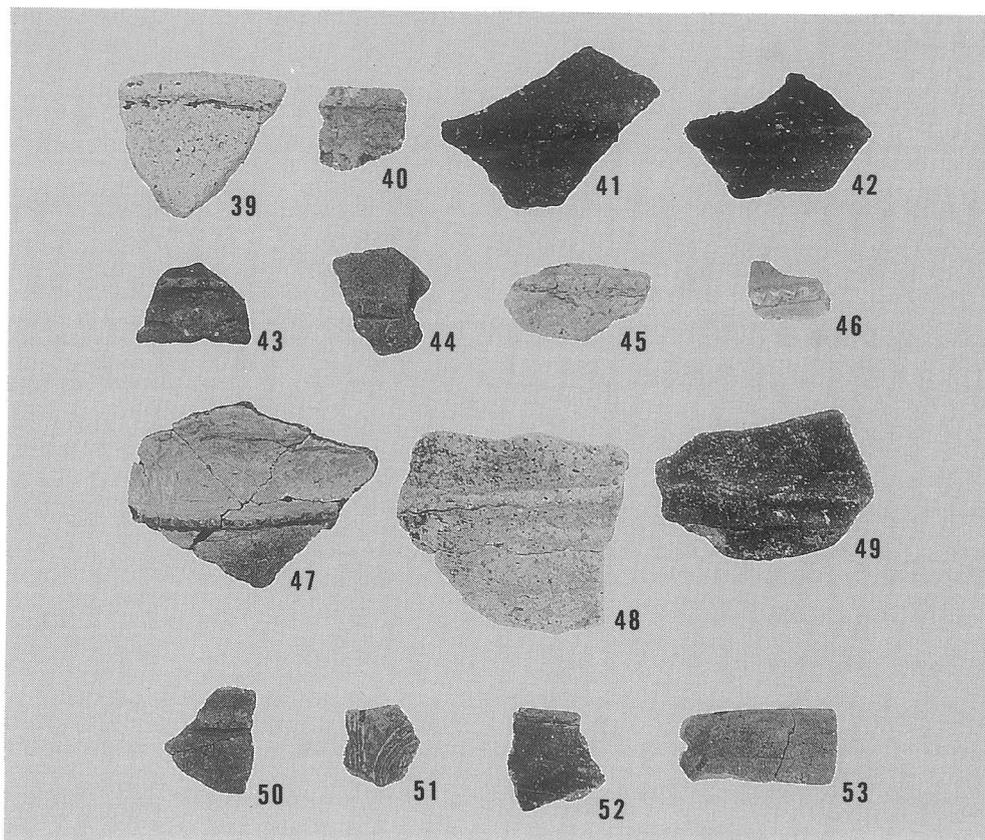
a 東西トレンチ（北）出土遺物（1）（1・2層 1・2、8層 4～6）



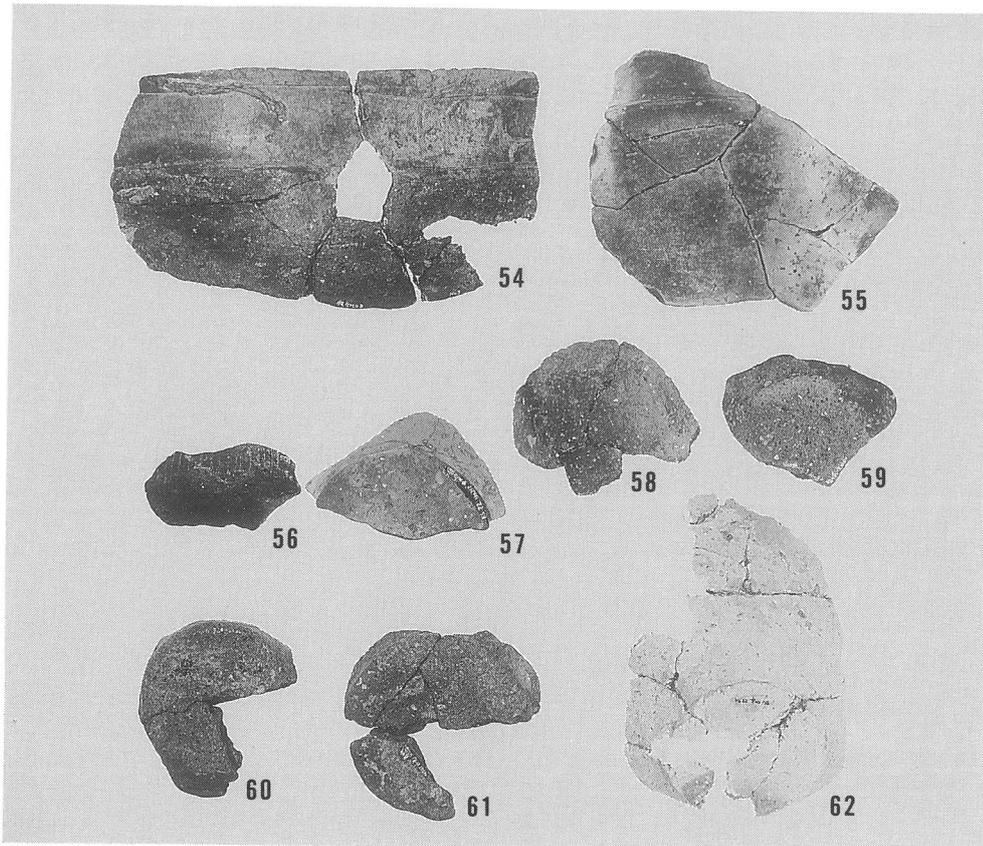
b 東西トレンチ（北）出土遺物（2）（8・9層 7・8、10層 9～14、11層 15～16）



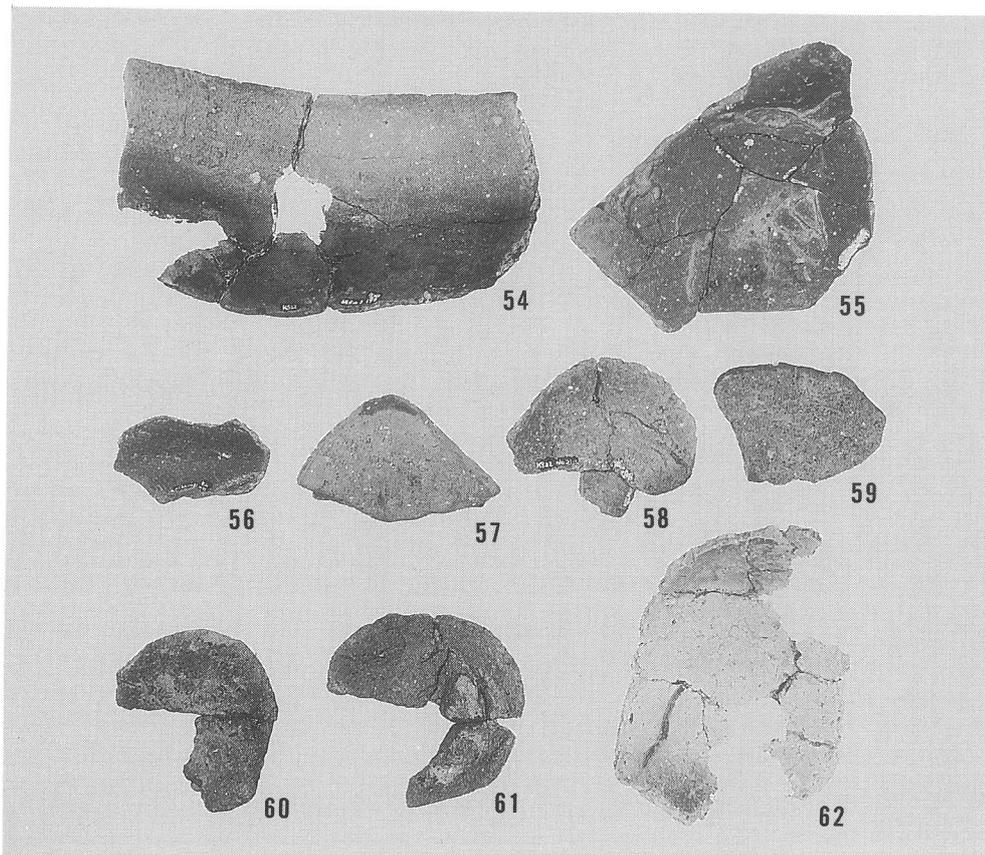
a 東西トレンチ (北)  
出土遺物 (3)  
(11層 17~38)



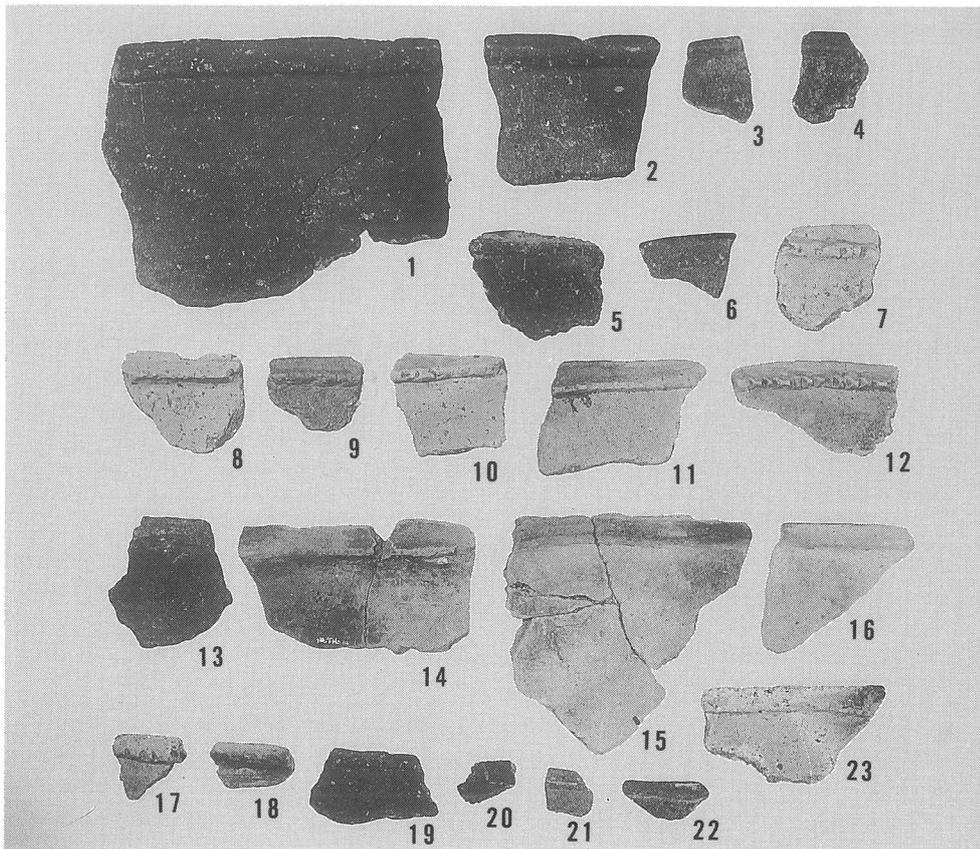
b 東西トレンチ (北)  
出土遺物 (4)  
(11層 39~53)



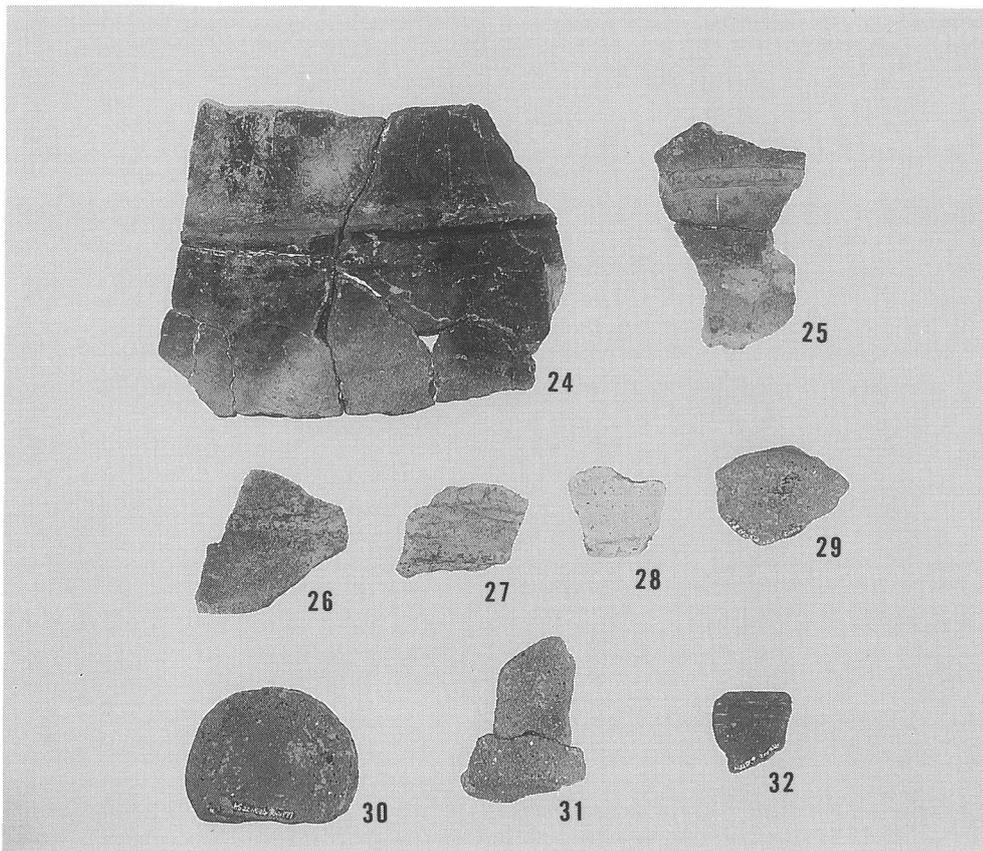
a 東西トレンチ（北）  
出土遺物（5）表面  
（11層 54～62）



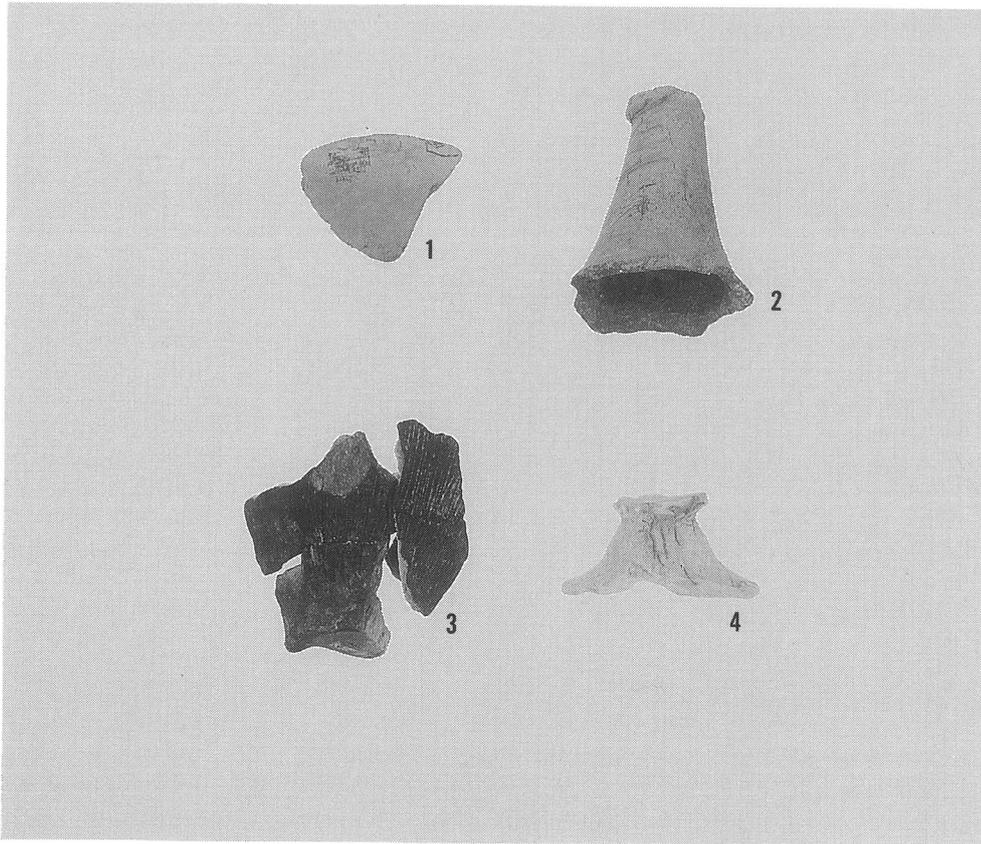
b 東西トレンチ（北）  
出土遺物（5）裏面  
（11層 54～62）



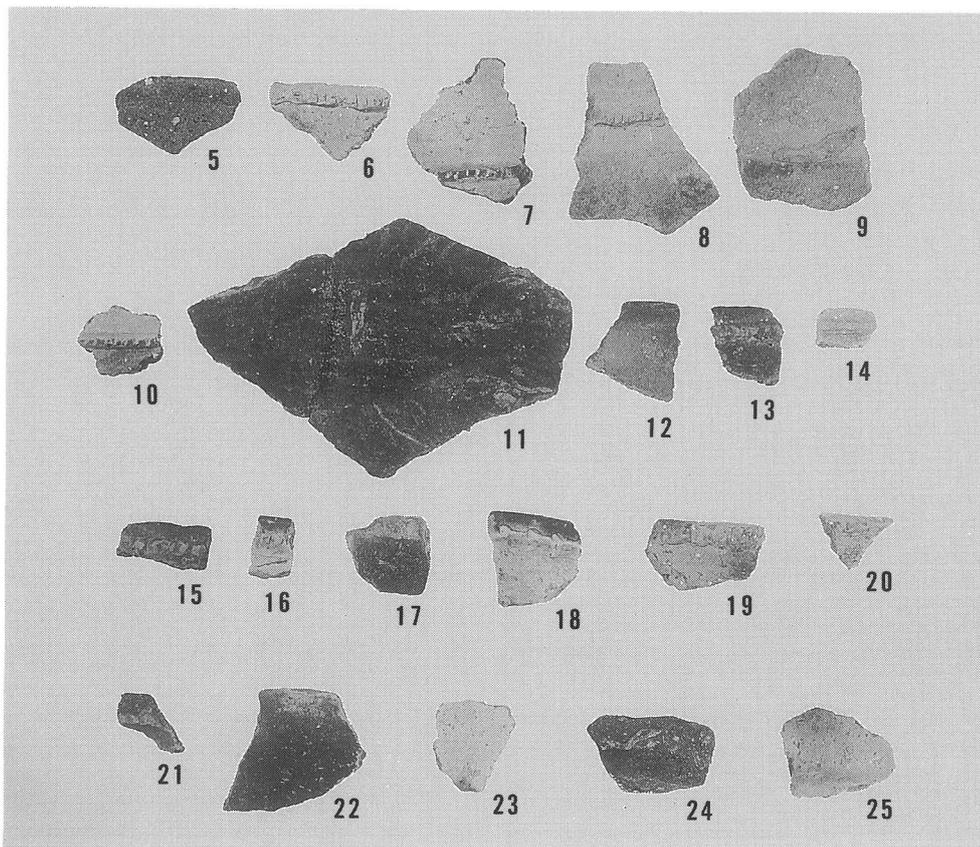
a 東西トレンチ (北)  
SK01出土遺物 (1)



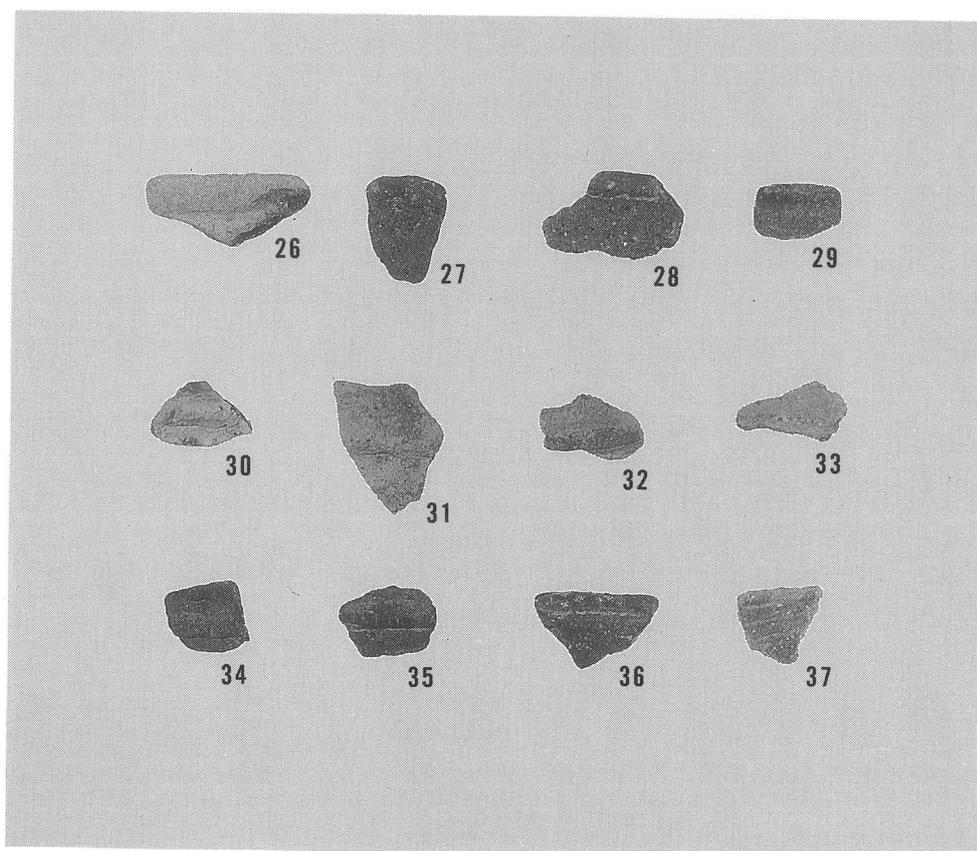
b 東西トレンチ (北)  
SK01出土遺物 (2)



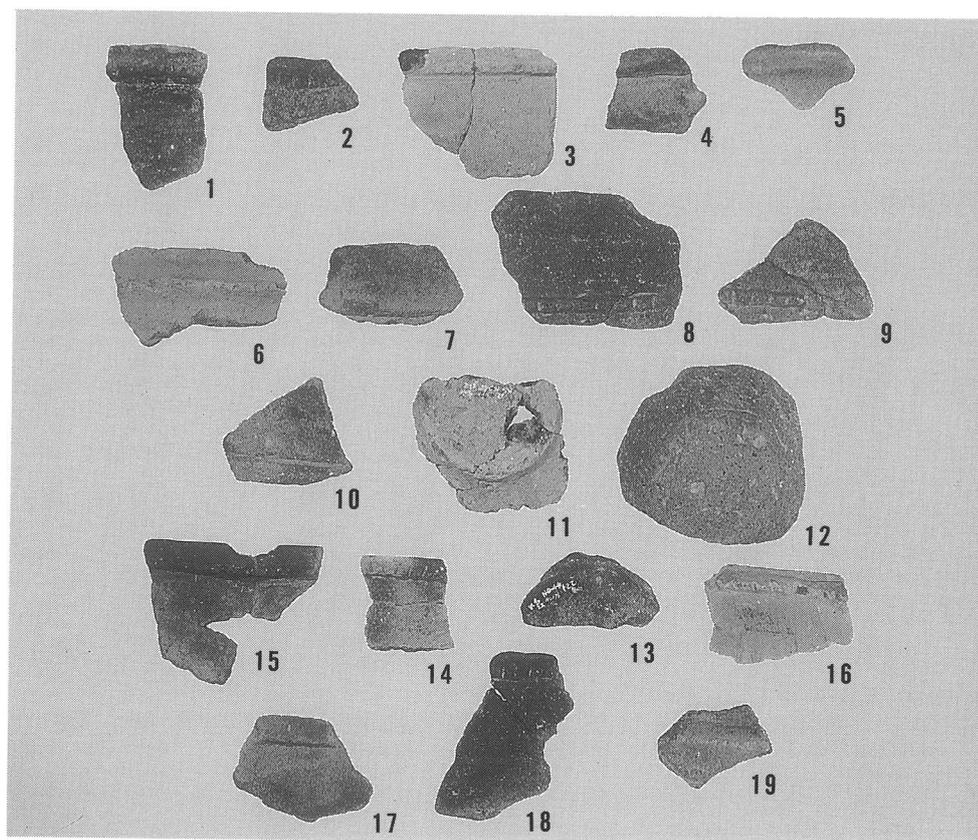
a 東西トレンチ (南)  
出土遺物 (1)  
(6層 1~3、7層 4)



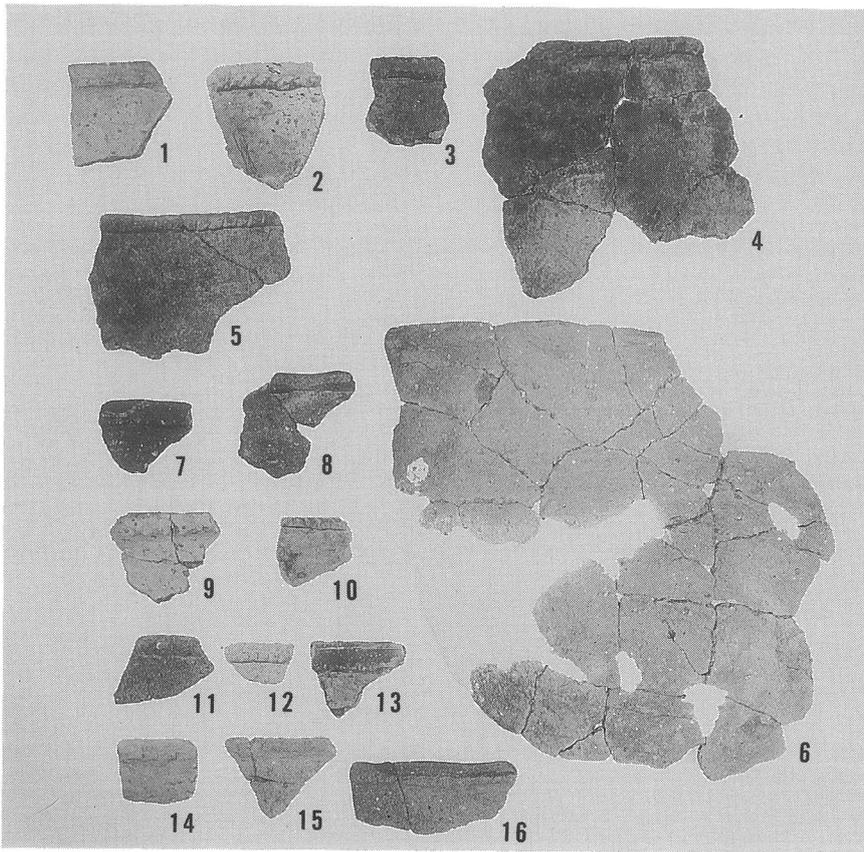
b 東西トレンチ (南)  
出土遺物 (2)  
(10層 5~25)



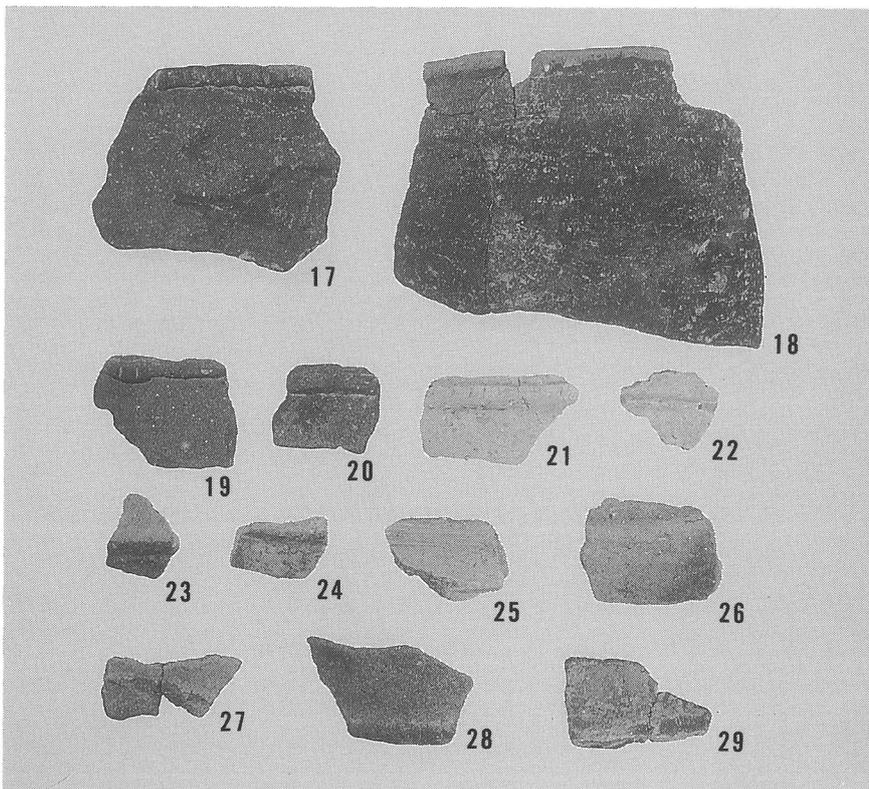
a 東西トレンチ (南)  
出土遺物 (3)  
(11層 26~37)



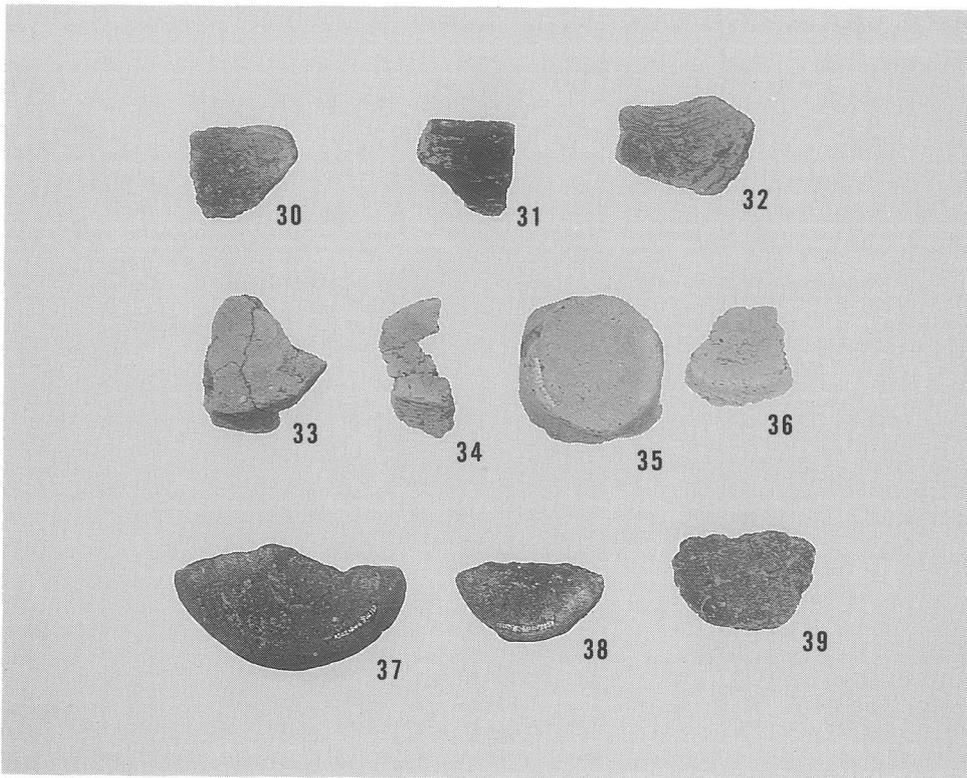
b 東西トレンチ (南)  
東群出土遺物



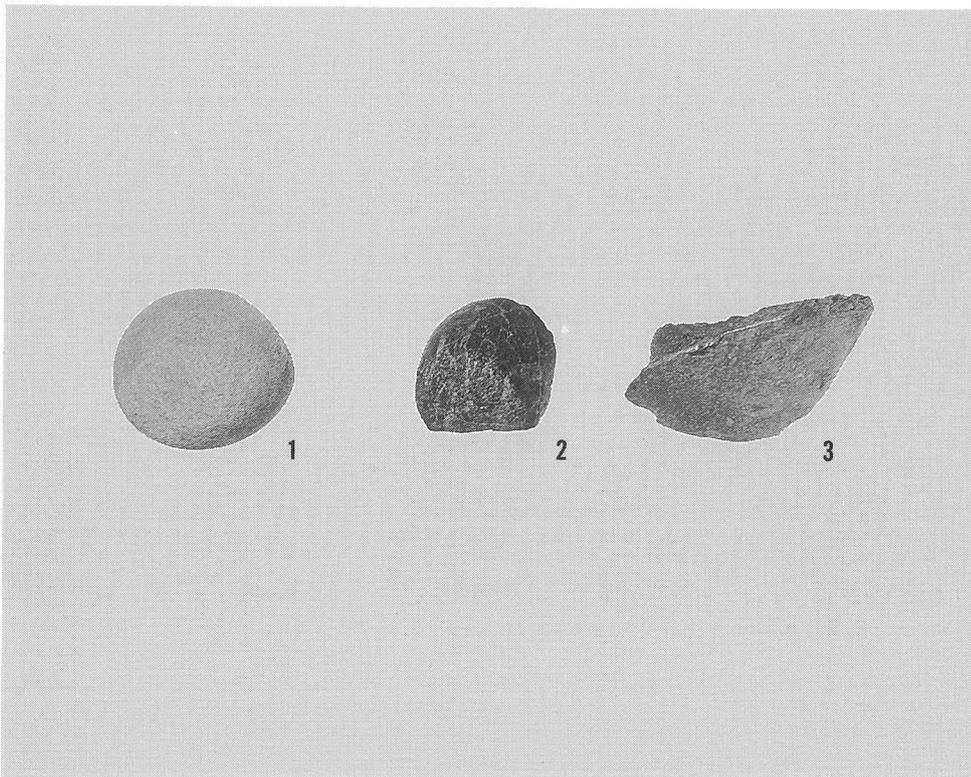
a 東西トレンチ (南)  
西群出土遺物 (1)



b 東西トレンチ (南)  
西群出土遺物 (2)



a 東西トレンチ（南）  
西群出土遺物（3）



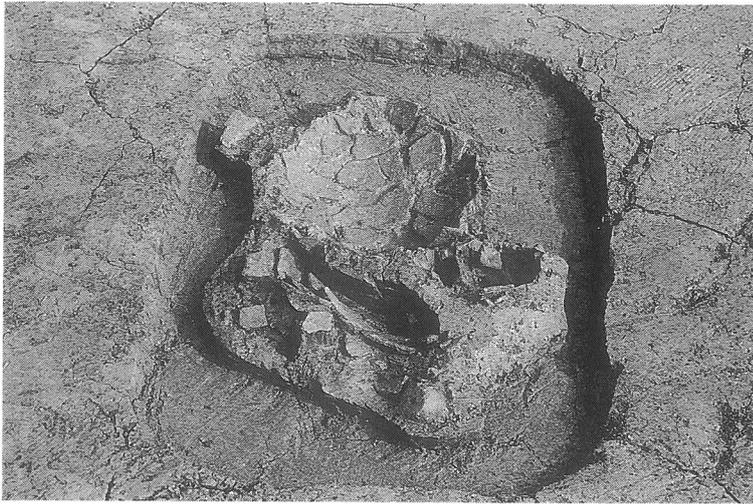
b 東西トレンチ（南）  
出土の石器



a 第25次調査上層 全景（南より）



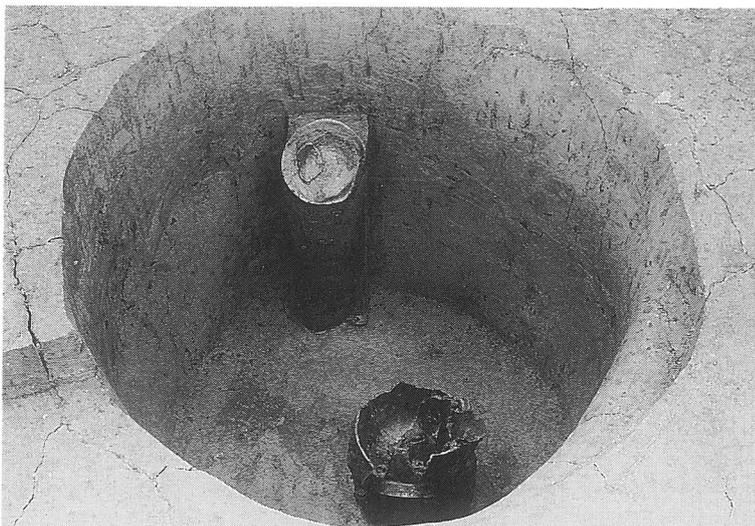
b 第25次調査上層 土坑検出状況



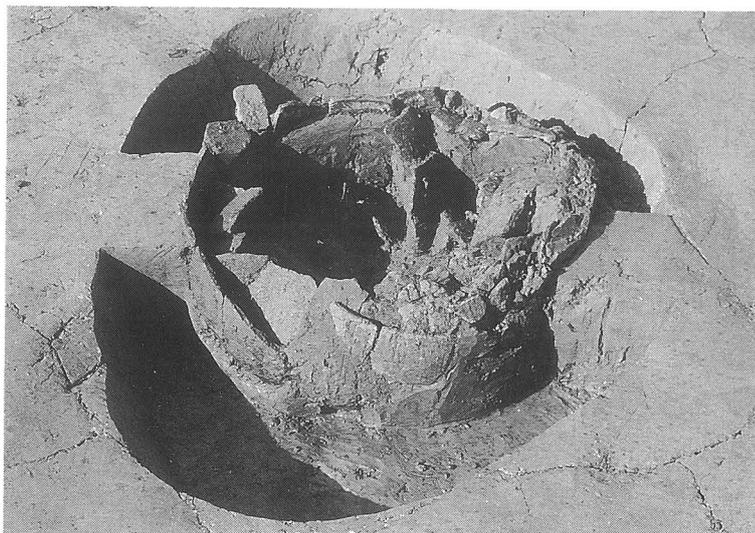
a SK03



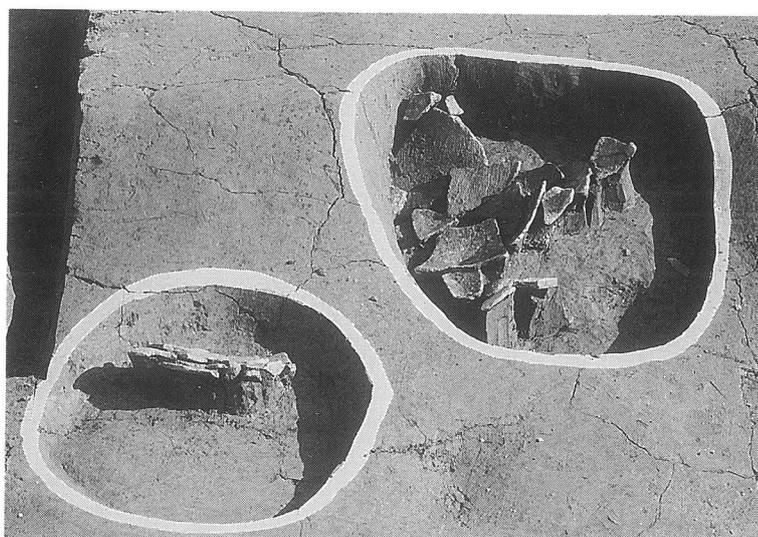
b SK06 半掘状況



c SK06 遺物出土状況



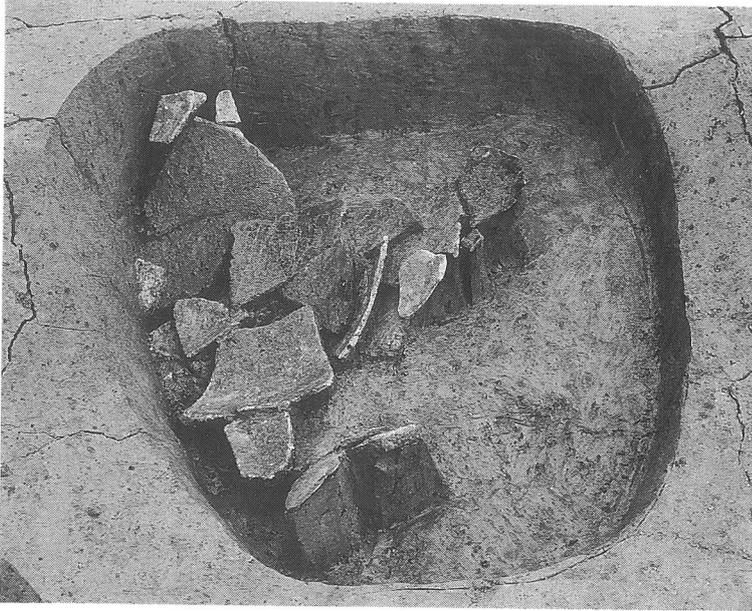
a 壺棺 3



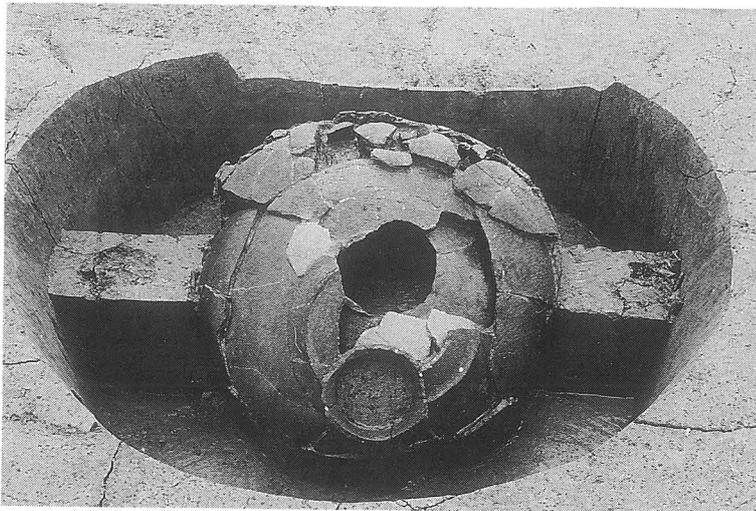
b SK08、SK09  
(左 SK08、右SK09)



c SK08



a S K 09



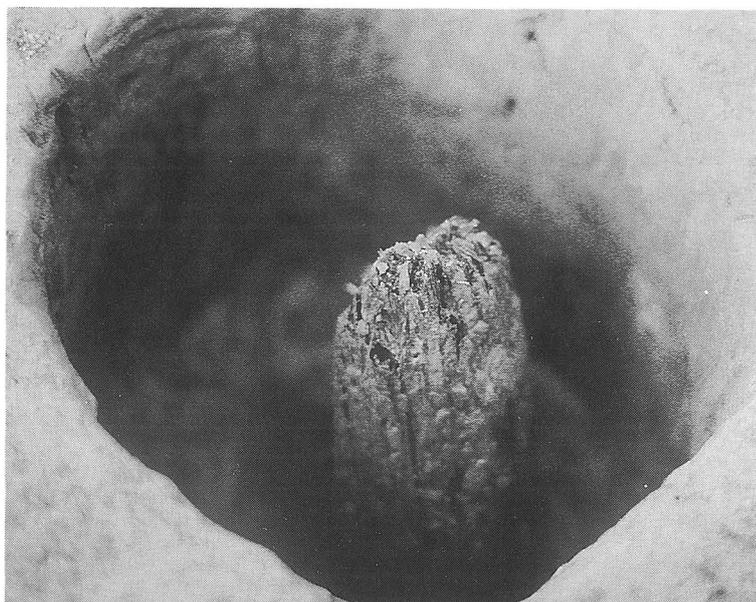
b 壺棺 1



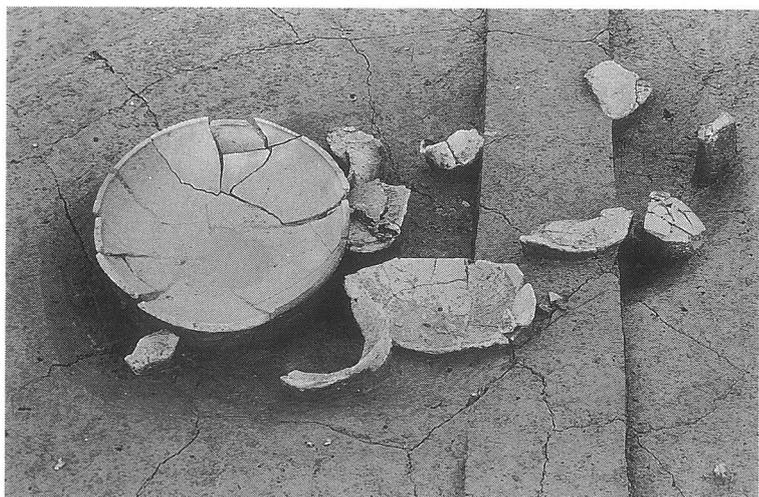
c 壺棺 1



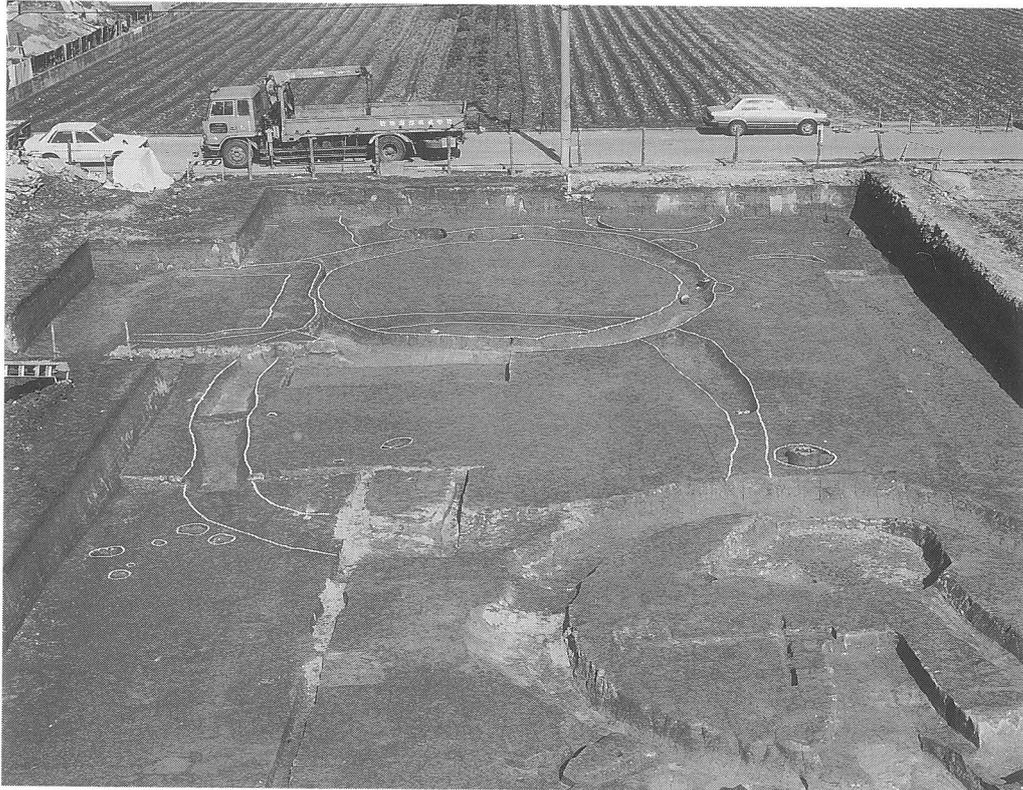
a 壺棺 2



b P 1



c SK19



a 第25次調査下層 全景



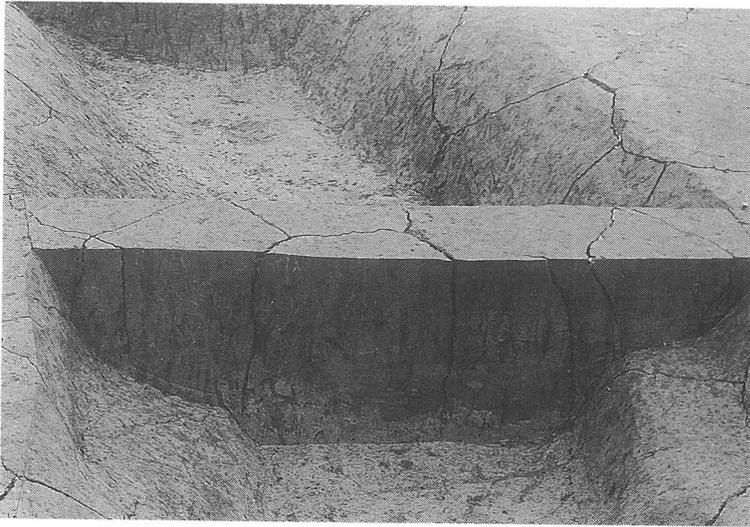
b 第25次調査下層 全景



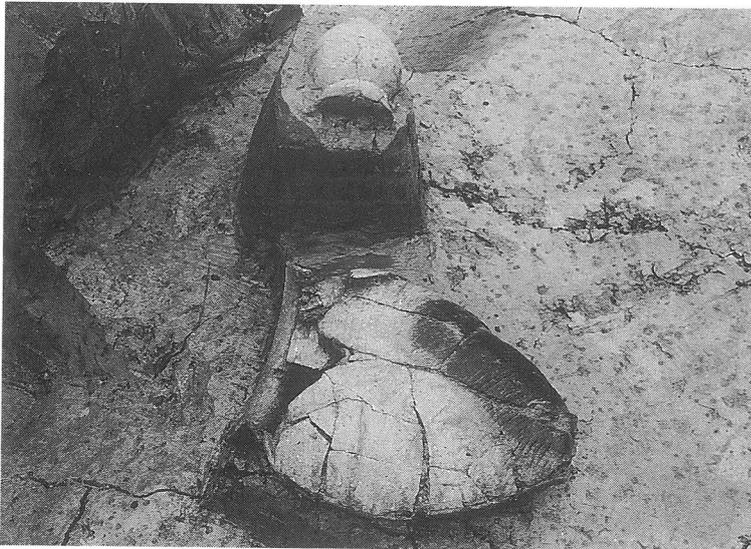
a 円形周溝墓1・方形周溝墓2（南より）



b 円形周溝墓1（西より）



a 円形周溝墓 1



b 円形周溝墓 1  
遺物出土状況



c 円形周溝墓 1  
遺物出土状況



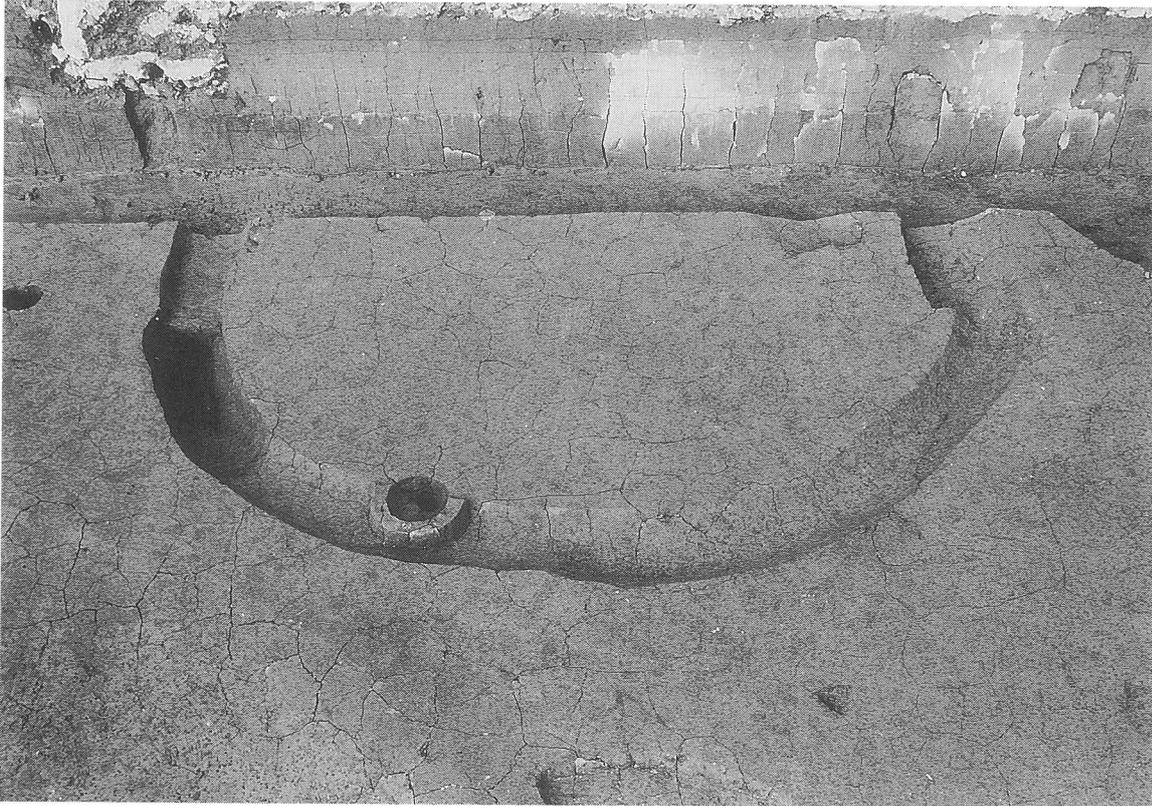
a 円形周溝墓 1  
遺物出土状況



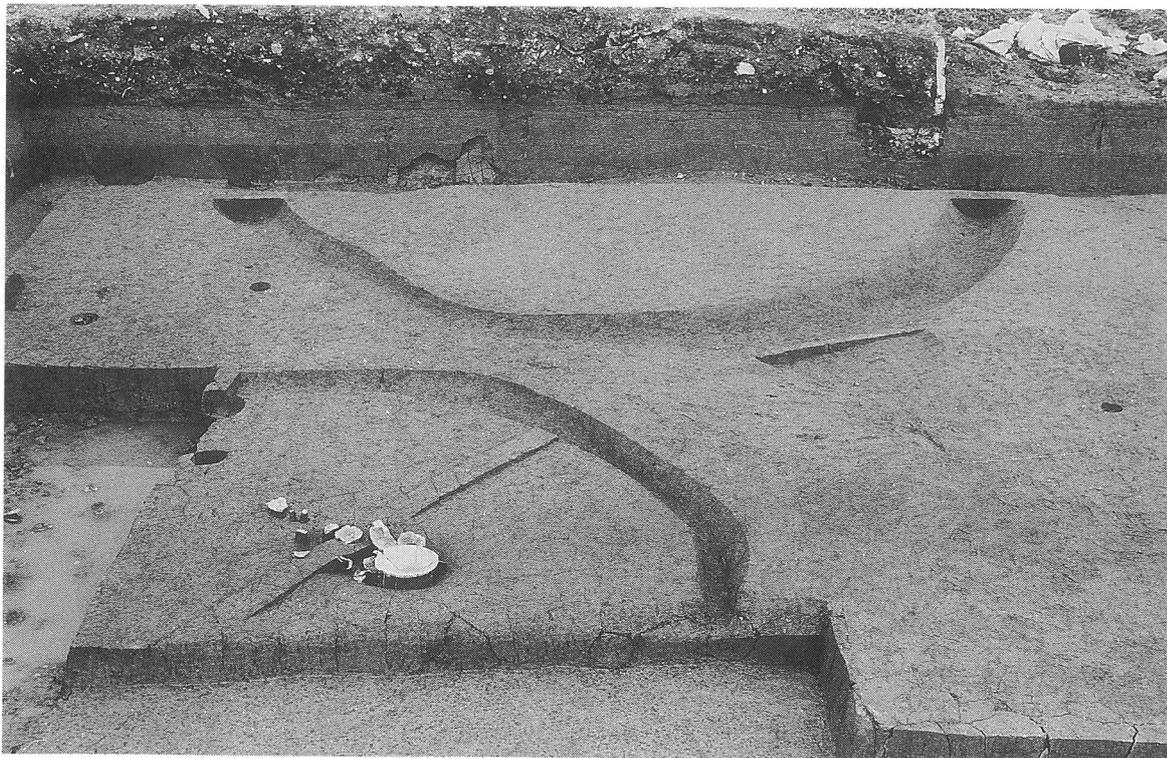
b 円形周溝墓 1  
遺物出土状況



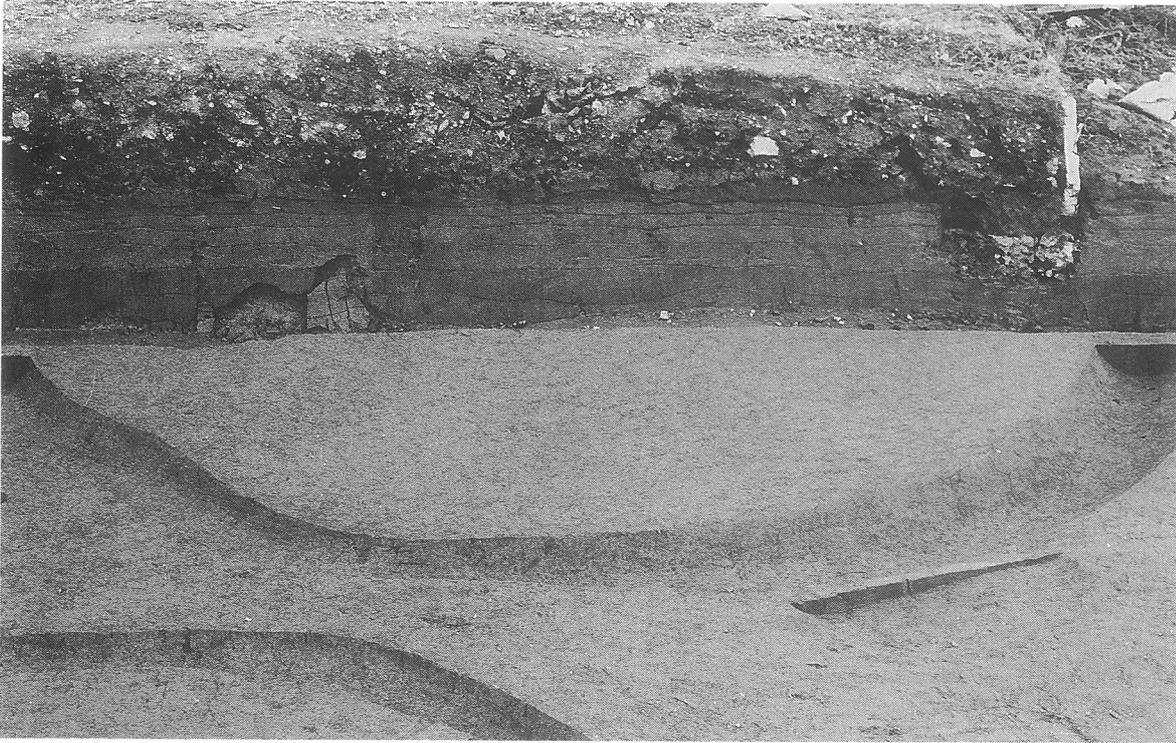
c 円形周溝墓 1  
遺物出土状況



a 円形周溝墓 2 (南より)



b 円形周溝墓 3・4 (手前が円形周溝墓 4) (北より)



a 円形周溝墓 3



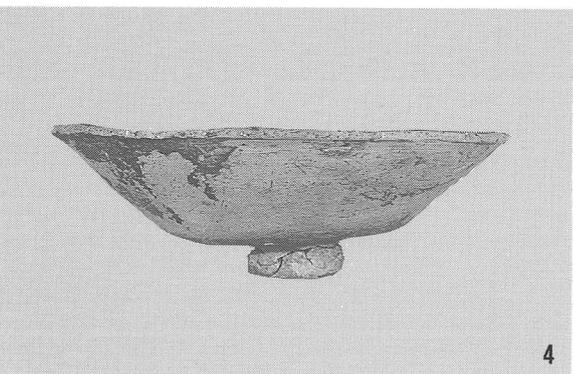
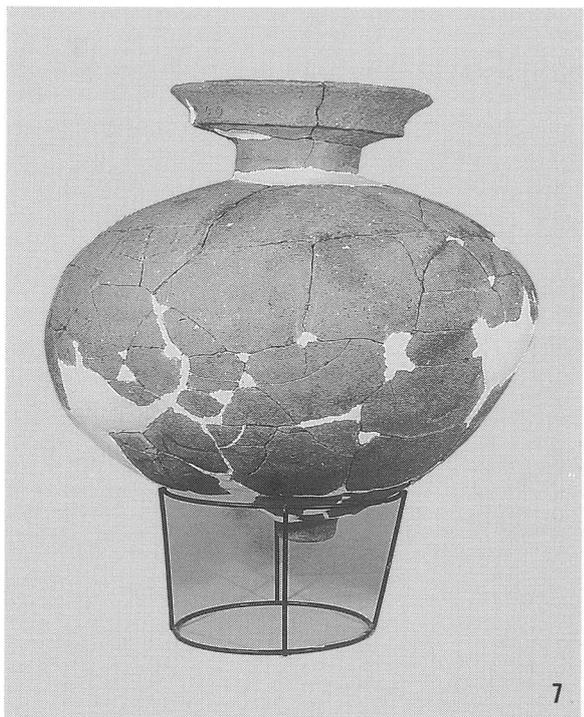
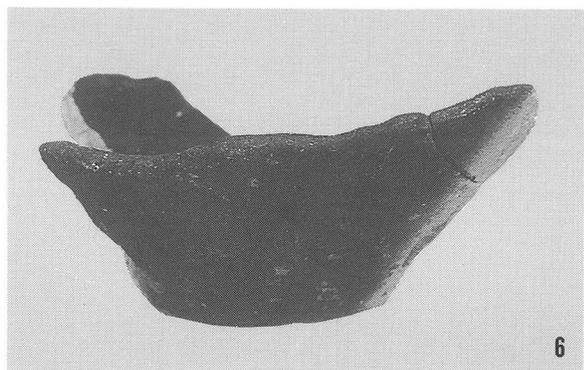
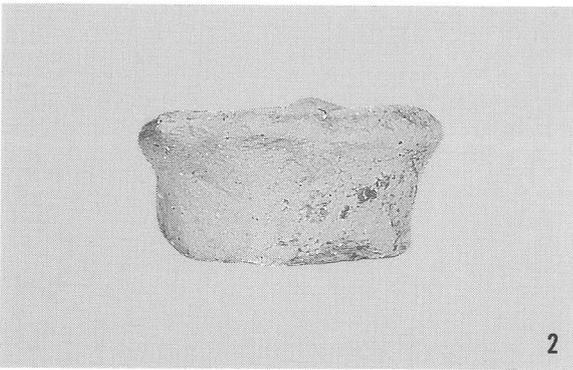
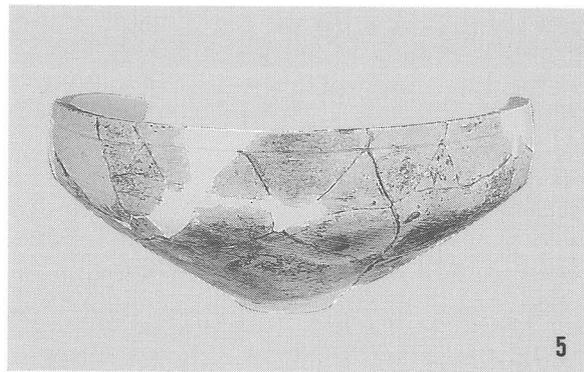
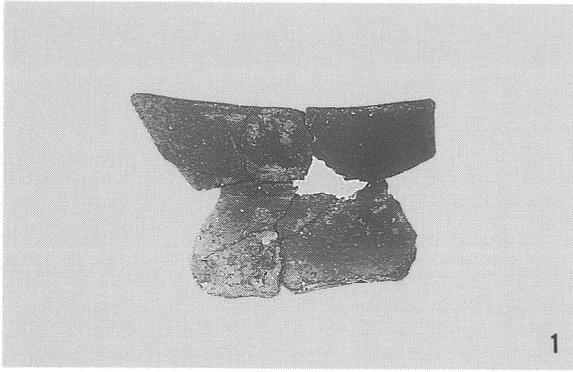
b 円形周溝墓 4



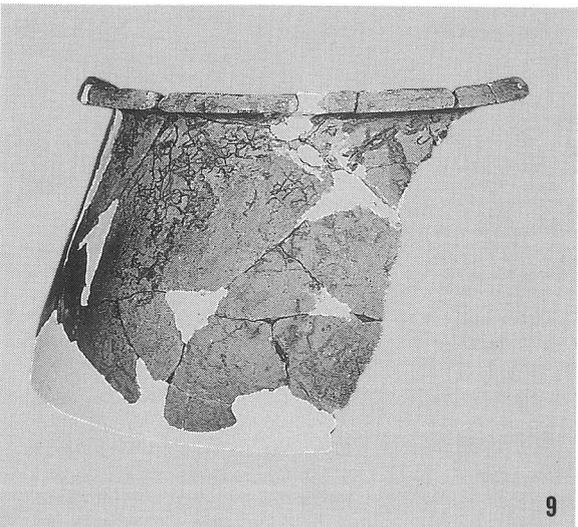
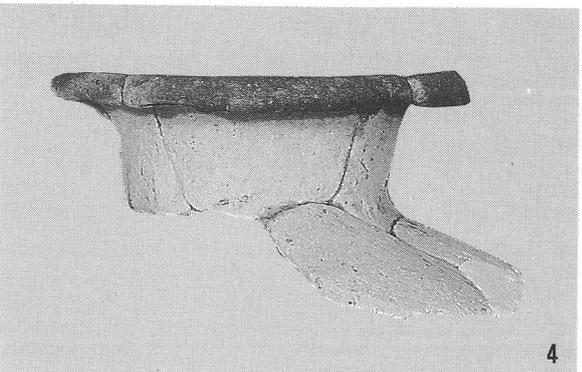
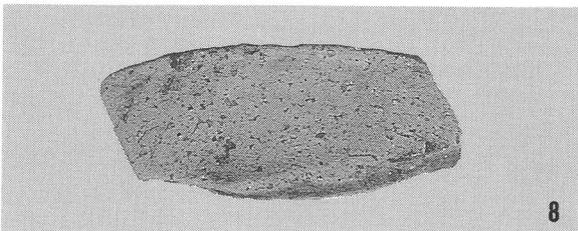
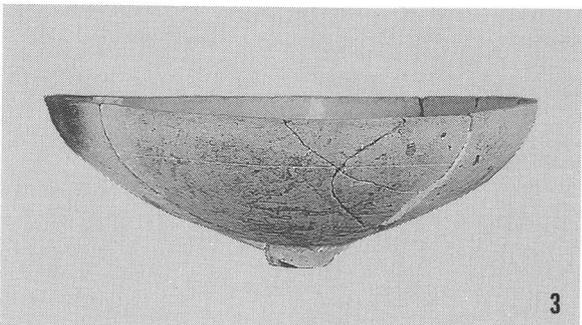
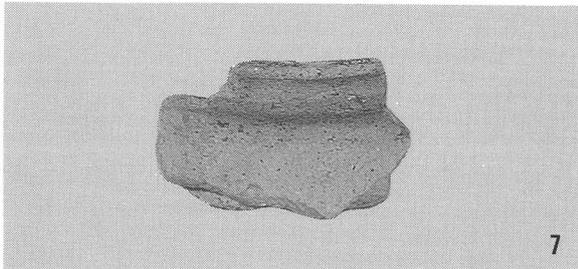
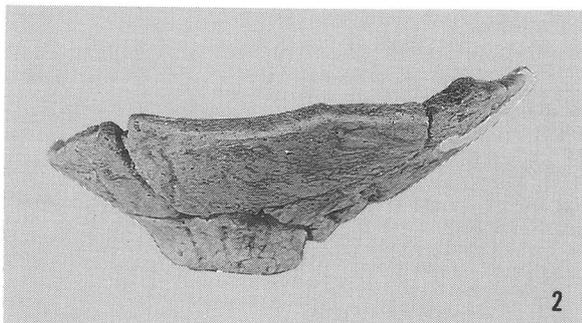
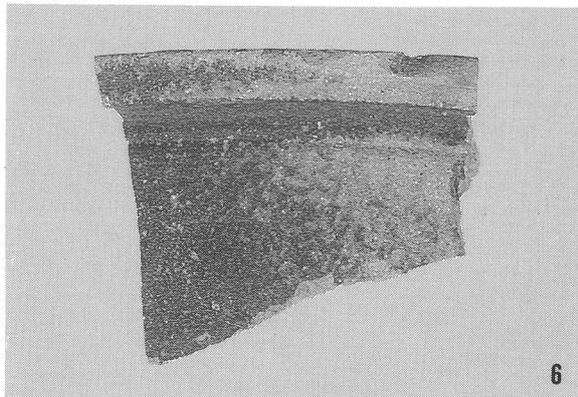
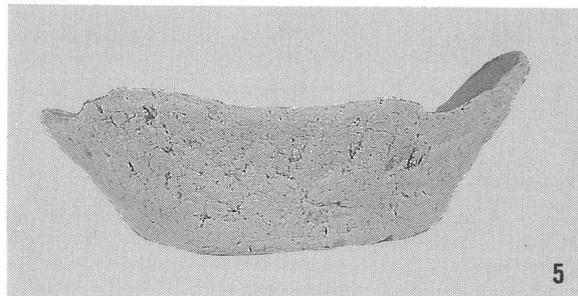
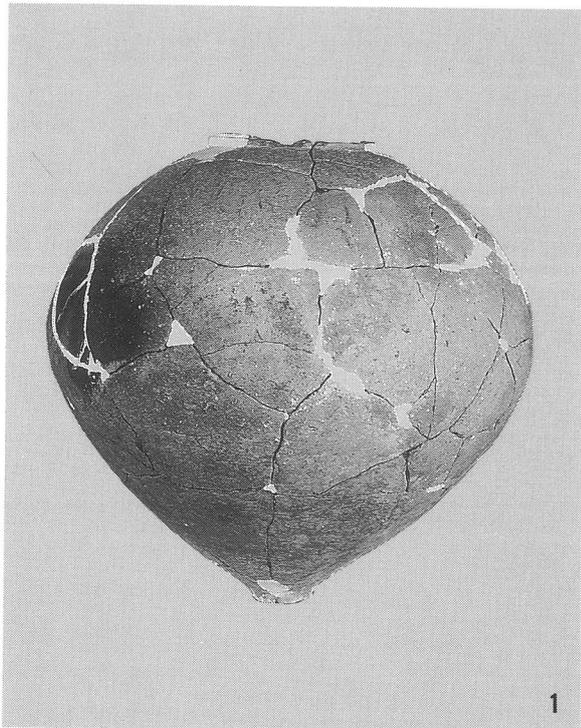
a 方形周溝墓1（手前が方形周溝墓1）（西より）



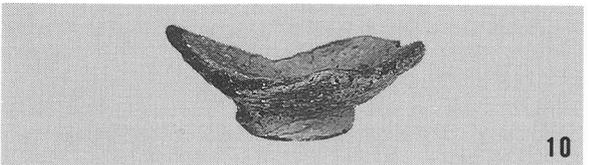
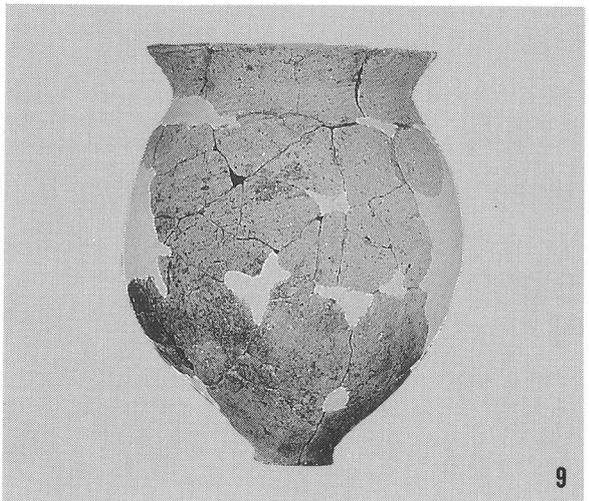
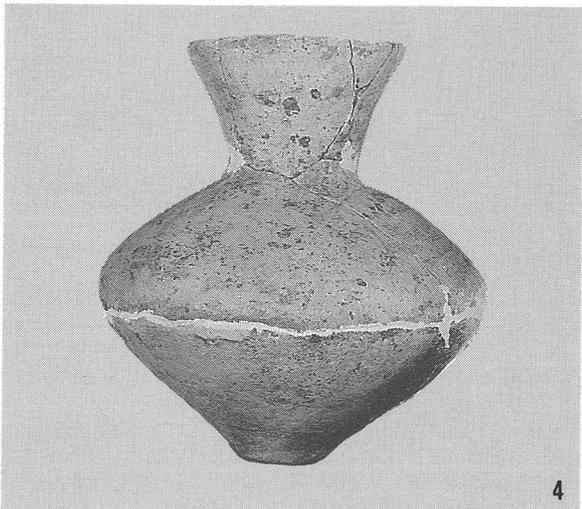
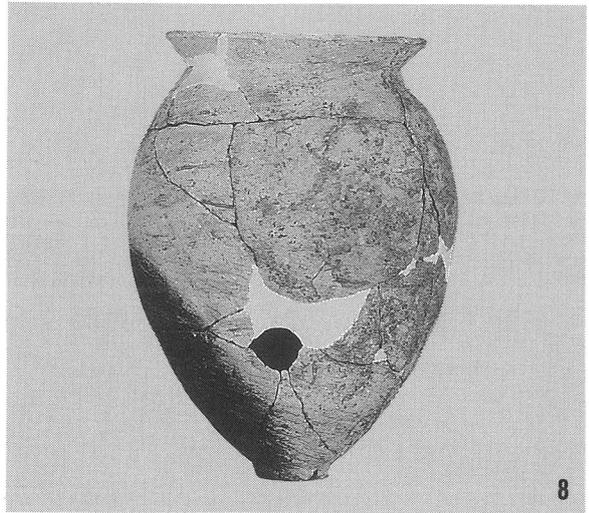
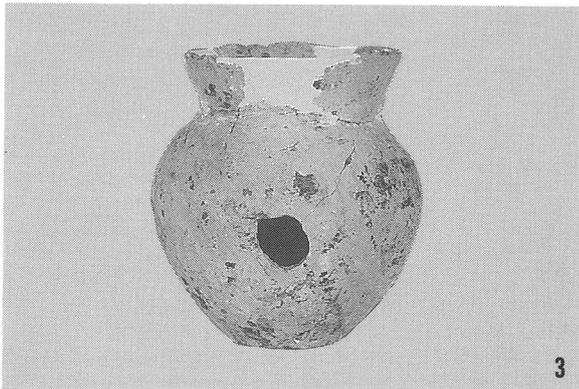
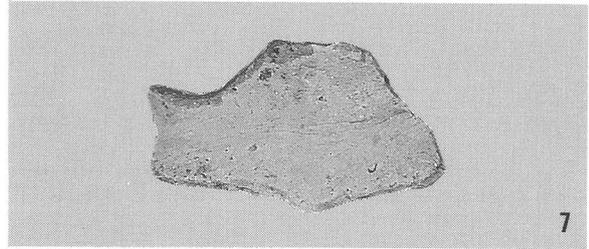
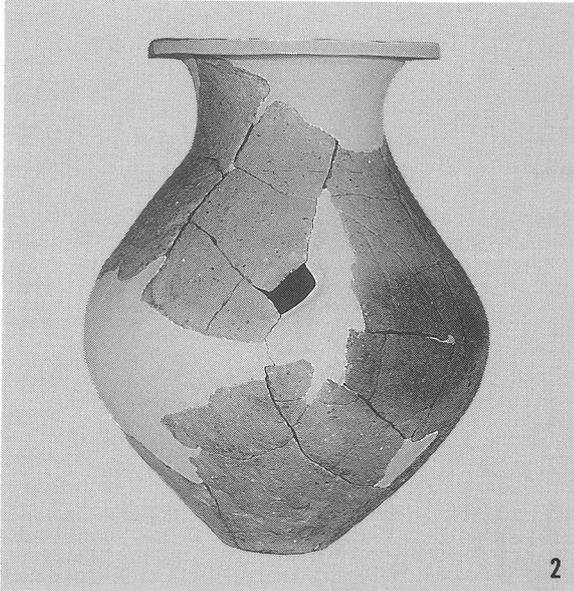
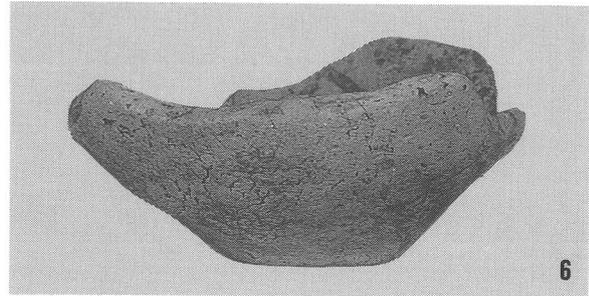
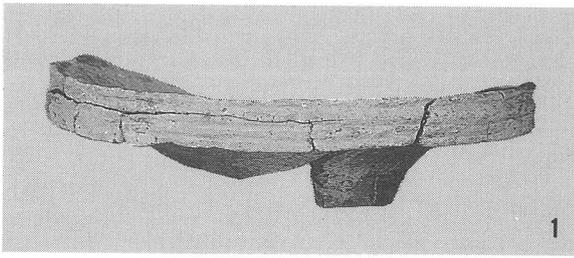
b 方形周溝墓1（西より）



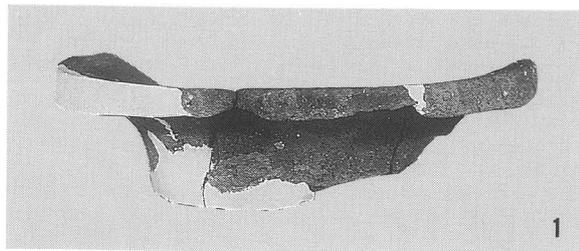
第25次調査出土遺物(1) (SK03-1、SK04-2、SK06-3・4、SK09-5・6、壺棺1-7・8)



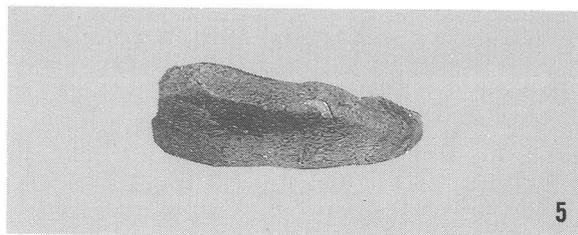
第25次調査出土遺物(2) (壺棺 3-1・2、SK19-3~5、SK20-6・7、SD02-8、P4-9)



第25次調査出土遺物(3) (円形周溝墓 1-1~4、6~10)



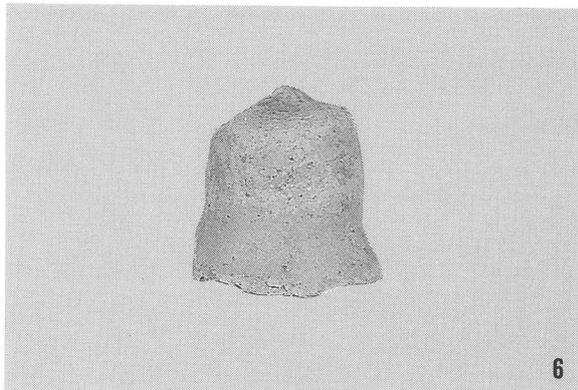
1



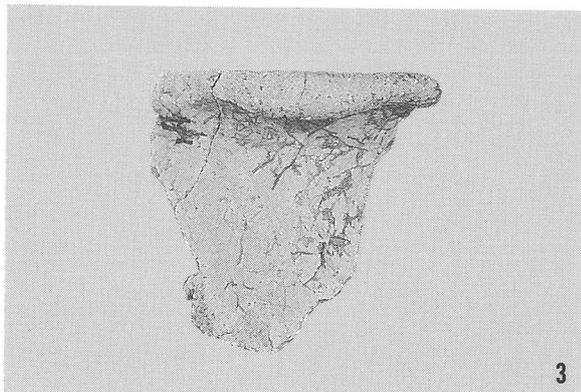
5



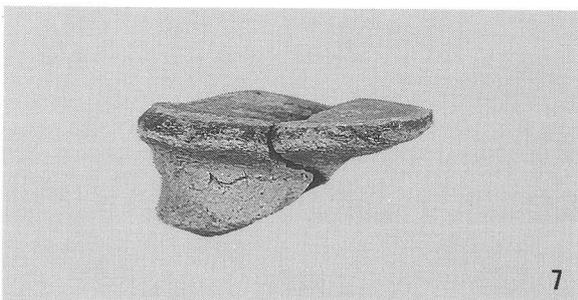
2



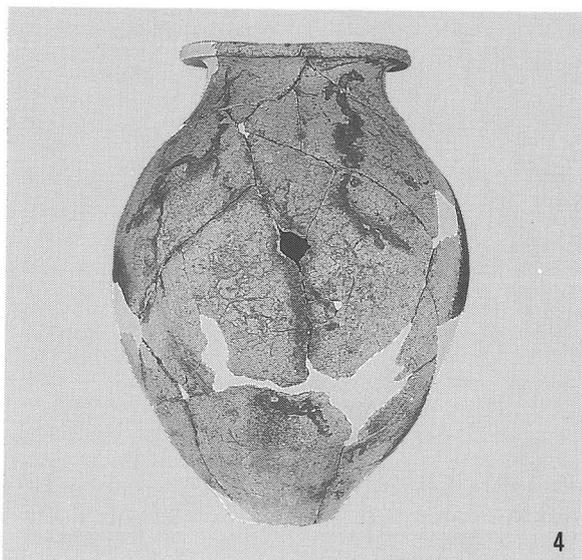
6



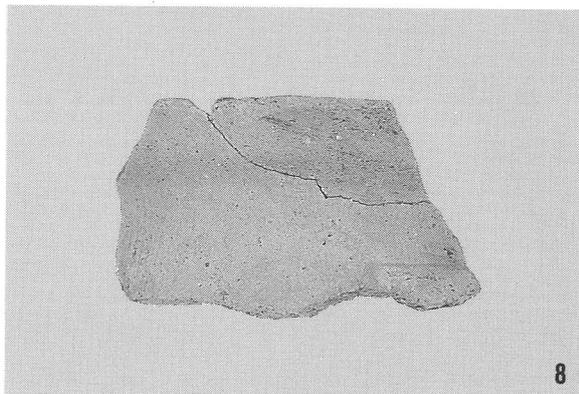
3



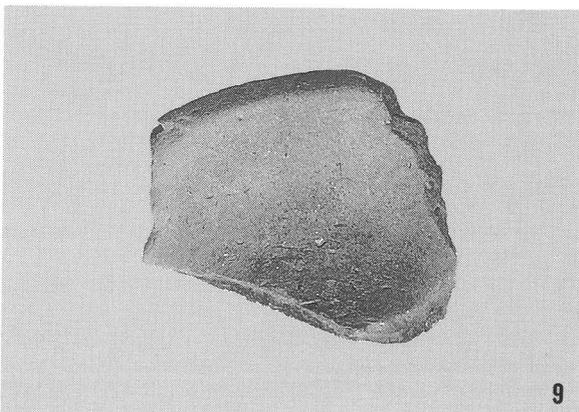
7



4

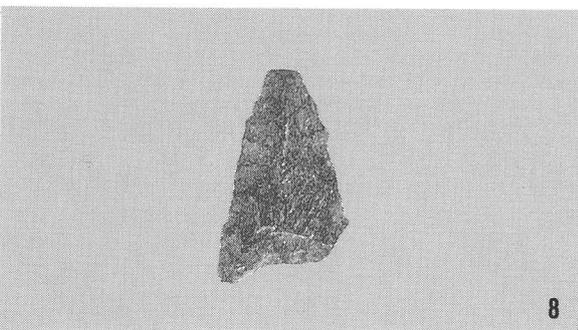
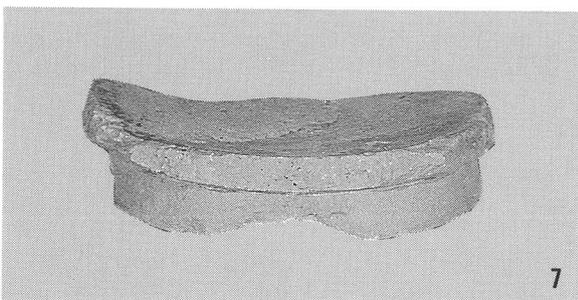
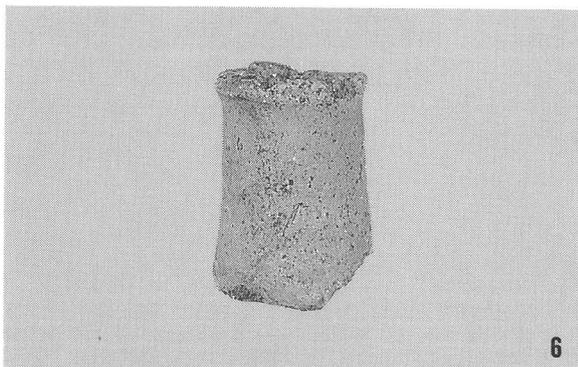
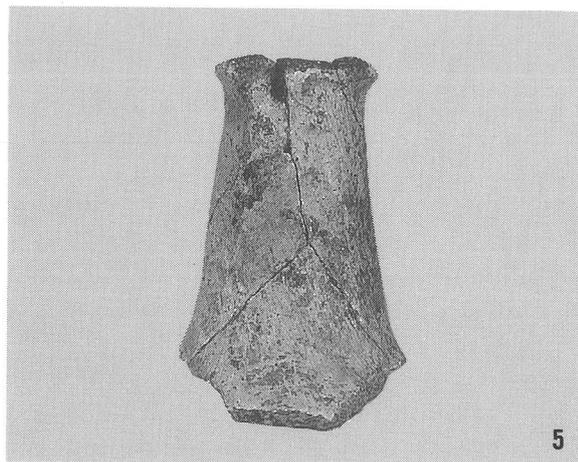
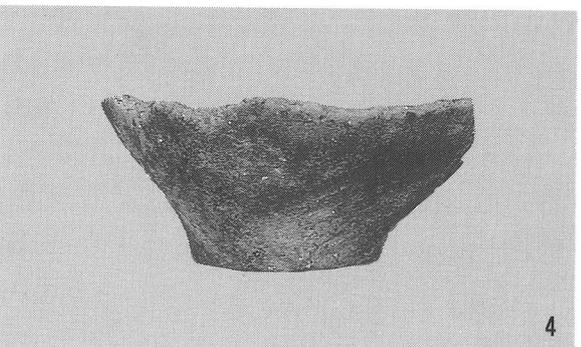
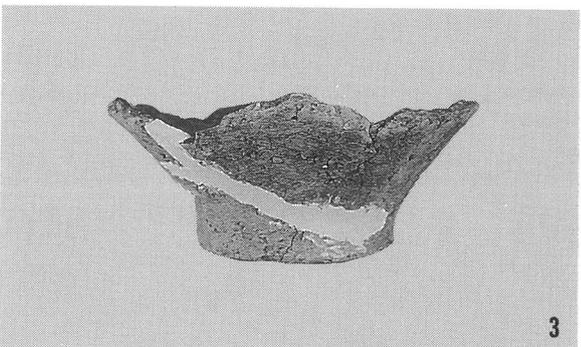
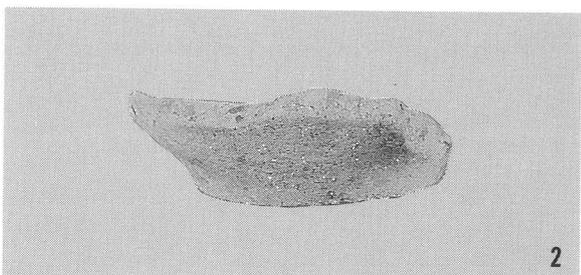
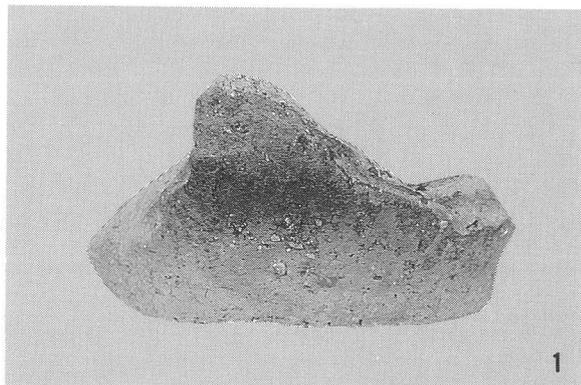


8



9

第25次調査出土遺物(4) (円形周溝墓 4-1・2、方形周溝墓 2-3~5、遺構外出遺物 6~9)



第25次調査出土遺物(5) (遺構外出土遺物 1 ~ 8)

伊丹市埋蔵文化財調査報告書 第20集

口酒井遺跡発掘調査報告書

— 第22・25次調査 —

発行日	1995年3月
発行	伊丹市教育委員会 兵庫県伊丹市千僧1丁目1 TEL (0727) 83-1234
印刷	阪神印刷株式会社 尼崎市三反田町3丁目4番30号 TEL (06) 426-8888(代)

